

見下し、海を隔て、鳥海山の翠色を望む。眺望甚だ佳なり。一里餘にして、
 船川港に達す。港灣は東南に向ひ、西は本山、真山、北は寒風山を負ひ、前に南平
 澤根の長崎を控へ、自然の良港を爲せり。灣内は東西一里、南北廿五町、深さ満潮二丈
 餘干潮一丈八尺、水底は淤泥にして投錨に宜し。近年船川灣築港の議起り、將來は縣下
 樞要の地たるに至るへしといふ。村の東泉臺山に明治二年佐竹義堯が築きたる砲臺を見、
 保量神社、舟川氏古館址、増川八幡等を経て、女川に至れば、字堂下に、月照山極樂地
 藏院あり。俗に小増川の地藏院と稱し、境内には老杉古松鬱として茂生し、自から幽趣
 多し。これより臺島村に赴く途中、
 鵜の崎の奇景あり。此濱邊二十町許、海上に奇岩磊々として起伏し、怒濤のこれ
 に當つて奔飛するさま、名工と雖も猶これを描く能はざるべし。臺島に雄雌島の奇姿を
 賞し、椿村に妙見堂の椿と椿灣の奇勝を食り、双六灣頭の鰐淵岩、辨天島、潜り岩を見、
 小濱の岩岬觀音、帆掛島を探り、愈々西して、
 門前村の本山に本山神社あり。景行天皇以來の古社にして、磴道索紆、
 本社は其奥にあり。本山は海岸に突出せる一小山にして、上に藥師堂を安んず。登路極

めて峻拔にして、容易に絶巔に至り難けれど、其眺望は甚だ廣濶に、南は飽海郡の飛
 島を望み、烟波秀嶺の間佐渡か島の翠微を指點し、遙かに西北朝鮮靉靄に對し、北東
 は奥羽の諸山繚繞して襟帯を成せるの光景、まことに半島中屈指の勝なり。六七月の候、
 天晴れ風靜なる日、これより舟を泛べて島めぐりをなせば、龍岩、フンベ島、アシカ島、
 蒼雀窟(この窟殊に奇なり)小山橋、大山橋、宮島、根太島、クヘリ岩等の奇勝を見るを
 得べし。されど海岸暗礁多く、怒濤又甚た高ければ、一ヶ月二ヶ月を滞在して猶一日の
 靜波をも得ざることあり。されば遊覽の客は非常の好運に非れば、容易にこの海岸の奇
 を得る能はずといふ。これより陸路を辿れば、路頗る險に、其間大瀧、白糸瀧の勝あれ
 ども、容易に見る能はず。
 加茂 本山の西麓にあり、それより戸賀を経て、入道崎を遶れば、畑より、黒澤を
 經て、湯本に至る。村に星辻神社あり。坂上將軍の勸請せしところと稱す。此地温泉あ
 り。炭酸泉にして游浴に適す。これより、
 真山に登りて、真山神社に賽し、北に向つて下れば北浦村に出づ。村に日枝神社
 あり。東に進むこと一里、相川に至れば古城址あり。康永年間安部兼季の居住せしとこ

ろにして、海に臨みたる海岸に猶その跡を存せり。

寒風山 は一に妻懸山と稱し、西は薬師長根を限りて瀧川村に屬し、南は比詰、富永の兩村に境し、山脈南より北に連亘す。頂上に高さ八尺餘なる九層の石塔あり。昔、加賀の船頭某がこの近海にて暴風雨に逢ひ破船せし時、當山の神靈に祈りて命を助かりたる賽禮として建立せしものなりと。これに凭りて望めば、八郎潟は圓くして鏡面の如く、湖水を繞れる村々皆指點すべし。ことに西北大洋の觀は、渺々として際涯なく、半島中第一の勝なり。これより蘇武澤を経て、八龍橋にかへる。また、これを逆に一週するも別に異りたる所なし。兎に角、東北に一二を争ふ勝地なり。

能代より弘前に至る途中

能代町 米代川の河口にあり。戸數二千二百、人口一万二千餘を有せり。有名なる港なれども、港内水淺く、巨船大船を容るゝ能はず。毎年十一月より翌年四月までは風濤の爲め航海を停止するを例とす。能代春慶塗は此地の名産にして、漆を層塗しても猶木理を失はざるを以て特色とす。また能代挽材會社あり。米代川流域に産する木材を製

し、且これを運搬するを以て其業とし、其規模の盛大なる、電話を架し、消火栓を設立し、一日に二十六噸の板を挽き得と云ふ。只、停車場甚だ遠く(町より一里)交通の便宜しからざるを遺憾とす。

大館町 人口七千餘を有する一都邑にして、來滿峠を以て岩手縣に接し、國中東北部の要路に當れり。附近に、熊野澤硫黄山、小坂鑛山、尾去澤鑛山等あり。

大湯澤温泉 陸奥羽後の境なる矢立峠にあり。陣場停車場より十四五町、硫黄泉にして、皮膚病に特效あり。沿場は鬱蒼たる古木の下にありて、自から一小別天地を爲したるの觀あり。

碓ヶ關温泉 碓ヶ關町(人口千餘)は既に陸奥の地なり。温泉は平川の沿泉にあり。無色透明にして諸病に効あり。温泉宿は葛原、柴田の二戸。

大鰐温泉 大鰐町は平川を隔て、藏館町と相對し、人口併せて二千餘を有せり。頗る山水の趣に富み、温泉場亦甚だ完備せり。泉質は鹽類泉にして、河原湯、熱の湯、飛の湯、大泉等を數湯に分つ。對岸藏館にも亦同質の温泉あり。旅亭は大鰐にて加賀助、藏館にて山二をよしとす。温泉は大鰐停車場より四五町。

弘前市附近

兩羽街道は陸奥に入りて、その一帯の平野に、津輕氏歴代の居城たりし弘前市を起す。

弘前市 は商業の活潑なると交通の盛なるとにては青森市に及ばざれども、人口の多きと、市街の整頓せるとは遙かにその上にあり。蓋し青森は新開地にして、此地は數百年の日月を開したればなるべし。中津輕郡の中部に位し、東西三十四町、南北一里五町、戸數七千、人口三万七千餘を有せり。地勢平夷、東南北の三面は田野遠く開け、西は岩木川の清流潺々としてこれを遠り、遙かに岩木山の翠微に對するさま、頗る盛岡市の岩手山に於けるが如し。明治四年廢藩置縣の後は、頗る衰頹を來し、士族は多く散し、工商は業を失ひ、殆ど支持すへからざるの觀ありしが、二十七年奥羽北線の鐵道開通し、其後第八師團を置くに及びて、市の光景頓に一變し、今は次第に隆盛に赴けり。市中見るべきものは弘前舊城なるべく、今猶牙城址の一櫓と、辰巳、丑寅、申酉の三櫓は巍然として空に聳え、追手、搦手、外東、内東、内南の七門を存せり。二の丸、三の丸、は

陸軍省用地となりて、弘前兵器支廠は其城址内にあれど、牙城は市民これを請うて公園と爲し、以て四時遊樂の地と爲せり。而して其地は稍丘陵を爲せる爲め、遠落近村皆脚下に集り、岩木山の晴雪は人をして襟を披いてこれに向はしむ。城南、大圓寺の故址に五重塔あり。寛永七年の創建にして、高さ十七間餘、登臨すれば郡内十里餘の平野を望むべし。其他、東照宮、八幡宮、天満宮、招魂社、長勝寺、報恩寺等あり。此地産物多く、津輕塗のごときは特に世人の珍とする所、林檎も亦多額の産出あり。官衙學校は裁判所、稅務署、監獄支署、第一中學校、東奥義塾、高等女學校等あり。旅店は齋吉、佐々木、石場を優等とし、葛西、竹内、永井等これに次ぐ。料理店は醉月樓、峰月館、長久樓、延年樓あり。遊廓は北横町、壽町の二所にあり。(口繪寫眞参照すべし)

岩木山 津輕富士又奥富士の名あり。海面を抜くこと五千二百六十尺、山容倒扇を懸けたる如く、その裾は長く西津輕郡に跨る。此地方にては陰曆七月廿八日より八月十五日を期してこの山に登る白衣行者多く、其盛なる近國稀に見る處なり。東南麓百澤村(停車場より三里)に岩木山神社あり。山頂本宮の下居宮にして、堂宇の規模甚だ宏壯を極む。これより絶巔まで登路一里二十町、半腹以上は岩石嵯峨として處々噴火の跡を存

し、其登路の險峻なる、富士山に攀登せし人も登り得ずして中途より下山するもの往々にしてありといふ。絶巔なる本宮は白木造にして高八尺、堅横各三尺、華表一基而已。されど其用材は俗に所謂節無しせなしの御用木なるものにして、一箇材は必ず一箇の扁柏木を用うるを例とす。又三年毎には必ずこれを改造し、若し風雪の爲めに損することあれば之を修繕せずしゆせんに必ずこれを改作す。其他附近に温泉二三あり。また奥羽名山の一なり。暗門瀑あんもんたき（あんもんたき）弘前停車場を距る西方十一里、中津輕郡西目屋村大字川原平の山中にあり。三層にして一層毎に其方向を異にし奇觀極りなし。第一は高二丈、巾二十間、第二は高さ十八丈、巾二十間、第三は高十二丈巾十六間。

黒石町 川部停車場の東一里半にあり。人口七千餘を有し、土地高燥、四望快濶、甚た風景に富む。黒石神社は字市の町にありて、黒石藩祖津輕信英の靈を祀れり。又、西南一里餘猿賀村に古祠猿賀神社あり。中野神社は下山形村字中野にあり、紅葉の勝地として甚た名あり。

浪岡城址 南朝の名臣北畠顯家の子顯季の義を唱へし古跡にして、長慶天皇の潛幸あらせられし地と稱す。されど信すべからず。

十三湯 是は西津輕郡の北端にある巨津にして、其廣さ東西一里三十町、南北三里十町、周圍七里餘、岩木川、田光沼の下流皆こゝに注ぐ。津輕氏の祖左衛門秀榮の今を距ること七百年前此地に居住せし城址今猶存し、當時は福島城といひ、人口一万以上を有せる東國第一の要津なりといふ。奥羽北線の大釋迦驛より野里、毘沙門、金木を経て、里程大凡十五六里。

弘前より大釋迦嶺を踰え、新城驛を過れば、青森灣の蒼波は直ちに眼頭に迫り、瓦甃粉壁畫こなべが如きもの、則ち是れ青森の市街。

奥羽の市街を略評すれば大は則ち仙台を以て第一と爲し、繁盛は則ち福島を以て第一と爲す。而して弘前、青森、秋田、山形はこれに次ぎ、盛岡、若松またこれに次ぐ。酒田、能代のこときは其名昔より聞えたれども、今は則ち甚た振はず。碇泊する舟船も亦多くは和船にといまり、大船は遠く沖に繫ぐに過ぎず。而してその文明の程度は日本海に面したる羽前羽後の地、遠く陸前陸中、陸奥の地に軼ぎたるが如し。

北海道

北海道の旅行

北海道の山、斧鉞入らざる事此に千年、巨木天日を遮る大樹林到る所に在り。北海道の海、高浪巖を嚙んで白玉を散じ、澎湃天空に接するもの、周圍皆な是れなり。眺望の雄大なる、都人士の未だ夢想にだも及ばざりしもの固より多し。况や大厦高樓軒を並べ、都を距つて三百里、こゝに之あらんとはと、其般盛の豫想外なるに驚かざる、大都會もあり。見渡す限り際涯なく、只青草の波打てるは、原野かと思はれは水田なるに、北海道にも米はありやと、奇聞を發する場合もありなむ。要するに北海道の旅行は趣味極めて多し。堂塔伽藍の縁起多からず、英雄豪傑の歴史少なければども、人事を離れて天然の景象を研究するには、北海道旅行ほど利益多きは無らむ。北海道旅行は、汽車にて過る所、千變万化なり。都會、農村、鑛山、漁落、原野、大洋、眼界は一秒毎に變化す可し。斯くして誤解されたる北海道の真相を知り、其廣袤六千三百三十餘方里、西國九州を合せた

るよりも猶大なる面積に、未だ見ざりし殖民地の實況を識り、日本全國沿岸線の七分の一なる、一千數百里の海岸を有する漁場に、會て聞かざりし漁業の有様を観るは、豈尋常一様なる内地旅行の比ならんや。若し夫れ、一口に北海道と言へば、今猶ほ昔日の蝦夷地の如く、「其交通不便ならん」「其道路險惡ならん」「其氣候寒冷ならん」と、沉く誤解せらるゝも、是れ以ての外也、北海道と内地との交通は、神戸より東海並に西海を廻りて、函館、小樽に至るものと、東京より鐵路青森に出て、青森より函館、室蘭に至る日本郵船會社の定期航海もあり。其他郵船會社以外の船舶にして往來するものも少からず。また北海道沿海の航行は、郵船會社及び北海道應補助航海船の往來絶えず、只だ冬期に至り極北なる北見根室兩國の航海を絶つのみ。其他毫も不便なく、炭礦鐵道は小樽港手宮より札幌に至り、石狩原野を横斷して宜蘭港に至り、又中途より岐れて夕張、幌内、郁春別等の諸炭山に至り、官設鐵道は砂川にて炭礦鐵道に連絡し、日本最長の石狩河畔に沿ひ、神居古潭の絶勝を過ぎりて、北海道の中央なる旭川(離宮豫定地の在る處)に出て、岐れて天鹽線及び十勝線となり、北は士別、南は落合に至るを得可く、釧路線は、釧路、白糠間十七哩餘は既に開業し

つゝあり。また北海道鐵道乃ち函館、小樽間の鐵道は、小樽山道間廿二哩と、函館、森間の三十哩とを開業し、道路は開拓使以來開墾する所一千五百餘里、まゝ道路の不良なる處なきにもあらざれど、重なる部分には、數里毎に驛遞の設ありて、馬を備へ、道廳より其費を補給しつゝあれば、馬の賃銀は一里に付き十錢より二十錢まで、場所によりて高低あれど、其以上に出ることなく、旅行には決して不便を感ずる事無し。氣候は、本邦中にては温度低しと雖も、歐米諸國に比すれば概して温暖なり。例年四月は積雪融解し、爾後温度急に上り、夏期の最高は華氏九十度以上に達し、能く植物を生育せしめ、而も朝夕は涼しくして爽快なり。秋季に至つて温度降り、九月下旬に初霜を結び、十一月末より雲を積み、一二月の交其深さ一尺乃至四尺に至り、寒氣強しとは云ひながら、世人の想像する如くならず。交通の便斯くの如し。氣候亦た適度なり。決して世人の誤解するが如きものにあらず。北海道の山河草木は、笑つて世人の來り遊ぶを歓迎す。船ならば横濱より三日、鐵路と船にて東京よりは二晝夜に足らず、殆んど一睡の間に北海道に達す可し。北海道旅行また容易なりと謂ふ可し。

北海道に赴く順路

北海道の關門として、最も古き歴史を有し、曾て榎本武揚子が幕軍を率ゐて死守せし處、五港の一として知られたる函館は、旅客先づ第一に足を容るゝ處なり。北海道と云へば、直ちに「函館」を聯想し、世人は概ね「函館」なる名稱を記憶すべし。而して若し一度函館に至らば、市街の美麗なる、道路の完備せる、建築に輪奐の美を極めたる、三府以外に稀に見るの鐵道馬車、人家の櫛比、往來の雜踏、十万人の人口、一万五千の人家、帆檣林立の巴字灣頭、風光明媚の山と海、遊覽の地各所に備はりて、こゝが蝦夷ヶ島の入口かと、想像以外の賑やかさに、驚かざるもの蓋し稀なる可し。今此函館に至るには、海、横濱よりすると、陸、東京上野よりすると二途あり。先づ始めに海路より説かん。而して海路よりするも、東廻りと西廻りとの別あり。東廻りは神戸を起點とし、横濱、荻の濱(陸前)を経て函館に至るものにして、西廻りは神戸、尾ノ道、下ノ關、境、敦賀、伏木、直江津、新潟、佐渡、土崎、舟川、能代等を経て、函館に達するものなり。東西孰れも函館に着し、夫れより小樽に及ぶを終點となす。日本郵船會社の定期航海と云ふ

し。亦た人力車を勞するを須る。一たび旅宿に入れば、其器具の立派に、其取扱の町
噂なる、人は皆な身の北海道に在るを忘るゝが如し。斯くして東京を出て、横濱より海
路を函館に着するまでの費用を算すれば、

自新橋至横濱汽車賃三十錢 自横濱至函館汽船賃三圓五十錢 合計金三圓八十錢

乃ち僅に三圓八十錢なり。汽車中は三十斤、汽船は六貫目まで、其荷物は總て無賃に
取扱はる。船中の辨當は素より郵船會社の供するものにて、毫も失費を要せざるなり。

(旅費は總て三等を以てす。以下之に倣ふ)

陸路の汽車 若し船量を厭ふて鐵道に依るときは、上野青森間四百五十六哩餘、此
行程約一晝夜を汽車に明し、青森函館間海上五十九哩には、夜間六時間を乗船せざるべ
からず。海風徐ろに袂を吹き、漫々たる海原に一條の筋を残して、煤煙を遠く引きつゝ、
巨船の甲板の上に立つ心地、また得も云はれず快なり。上野青森間直行列車は午前一度、
午後一度上野を發す。午前の直行に乗れば、習習青森に着し、午後の列車を擇まば翌
夕着すべし。青森函館間、亦た郵船會社の定期航海毎日午前午後の兩度あり。午前は十
一時發を以て直ちに函館へ向ふを得可きも、午後は十二時發なり。多少の不便ありと知

る可し。故に函館へ直行せんと思は、成る可く午前の直行にて上野を發するを宜しと
す。午至上野を發し、翌朝青森に着し、數時間休息するには、鍵屋、鹽谷、中島等の旅
館あり。亦た停車場より順路三四丁直ちに海岸に出れば(此人力車代十錢以下)横濱に在
るが如き乗船客休憩所は、彼處にもあり。就て休息し、切符を求め乗船するも宜し。
手輕の旅行には後者を選む可し。かくて乗船、抜錨、六時間の後は函館に着せん。函館
に入りて後は、船客の送迎、旅宿の選み方、暑夏前節と全様なり。而して陸路を選まば、
其費用の最低額は左の如し。

自上野至青森汽車賃五圓七十九錢 汽車中の辨當代當日の晝より翌日の晝まで一回二

十錢づゝとして八十錢、茶四回十二錢 自青森至函館船賃九十錢 合計七圓六十一錢

是れ午前の直行にて上野を發し、旅宿に入らずして直ちに乗船すと假定せしものなれば、
若し旅宿に休憩し、又は午前の直行に乘じ、夜間青森に着し、旅客休憩所に發船を待つ
を不便とし、旅宿に入るものとせば、前記の七圓六十一錢に加へて、茶代及び旅宿若者
への心附、及び一食分を合して別に一圓許を要すべし。

北海道巡遊の順序

北海道に遊ぶには、先づ函館に入るを普通の順序とす。尤も横濱若くは青森より直航して、小樽に至り、小樽より、増毛、天鹽、稚内、宗谷、等を觀了り、更に小樽に引返し、札幌より上川(旭川)及び附近の諸炭山及び殖民地の状況を視察し、中央道路を執りて網走に出て、再び旭川に戻りて室蘭より函館に出て、函館より根室に至るの沿岸に遊ぶも妙ならん。然ども斯くては許多の日子と旅費を費さざるを得ず。故に先づ函館に遊び、夫れより海路室蘭に航し、室蘭より炭礦鐵道に乗じて札幌に出て、札幌小樽の間に遊びて更に札幌より旭川地方に赴き、旭川より室蘭に歸り、更に函館附近に遊ぶを以て最も順序能き旅行となす。いづれにもせよ方今工事中の北海道縦貫鐵道の完通する曉に至らざれば、巧みに少數の日子と少額の旅費を以て、全道を跋涉するを得可らず。故に今は、比較的失費少くして、僅かの日數間に順序よく有数の都會及び其他を旅行する方法順序を紹介す可し。

函 館 港

函館の沿革 函館は方今特別自治制の下にありて、「區」と稱せらる。函館とは元と蝦夷語にて、ウシヨケシと稱し、灣の端と云ふ義なりしに、轉訛してウスケシ、或はウシキシと呼べり。寶徳年間河野加賀守政通此地に據る。其館の形狀整正恰も箱に似たるより、人呼びて箱館と稱せりとぞ。康正二年蝦夷人蜂起し、甚だ猖獗にして其攻陷する所となり、翌長祿元年恢復す。其後五十五年を経て蝦夷復び起りて、館主河野彌二郎右衛門尉季通(政通の子)敗れて自盡す。其後箱館の事久しく史上に見えず。寛保元年松前藩は、函館對岸の龜田番所を此所に移し、船舶旅人を檢せしむ。天明五年の調査に據るに、當時戸數四百五十餘、人口二千五百、實に濱海の蟹村漁落のみ。而して當時松前藩にては、治應を松前に置き、富商の輩を強て全所(今の福山也)に居住せしめ、城下を繁華ならしむるを計れり。故に函館の如き良港も、壓倒せられて、容易に發達する事能はざりざ。されど寛政十一年徳川幕府の直轄となるに及び、東蝦夷地各漁場の産物を悉く箱館に於て拂下くる事となりしより、商船漸く輻輳して、俄に繁華の地となれり。故に當

時移住して久しからざるに多くの富を致したるものあり。露西亞領の渡航者として有名なる高田屋嘉兵衛の如きは、始め官船の雇船頭となりて各地を航行し、それより富を積みみて數多の船舶を所有するに至り、富豪の名遠近に鳴り渡れり。かくて富商集り、戸口年を逐ふて増し、嘉永六年米國水師提督ペルリ來りて和親貿易を請ふや、幕府は下田及び箱館の二港を開きて互市場となし、箱館港の殷盛は一日一日と増進して、北海道第一の要地となれり。安政三年辨天岬砲臺（現今之を毀ちて更に海面を埋立て、五ヶ町を造り、猶ほ函館船渠の敷地となせり）の築造に着手し、次て五稜廓の建築に取かかれり。砲臺並に五稜廓とも、明治二年榎本武揚子等の據りて大に幕末の餘勢を張りし處、今は僅に五稜廓のみ其痕を止む。尋て安政六年、米、露、英諸國の領事館開設する、年々を逐ふて繁昌し來り、舊來松前に居住せる商人等の轉住するもの亦た少からず。殊に支那に輸出する昆布等の海産物は、順に價格の生ぜしと、奥地開拓の爲め、商賈旅人の出入多きを加へ、慶應三年に至つては、戸數三千三百餘、人口一万五千に及べり。明治元年十月、榎本武揚、大島圭介、等の舊幕人來り據り、激戰數回、翌二年五月平定す。此役、市民皆な業を休み、且つ兵燹に罹りて資産を失ふこと多かりしかど、全年七月蝦夷

を改めて北海道とし、開拓使を置き、箱館に支所を設けて人民を撫育せしより、民意安し、生業を恢復せり。全年八月「箱」字を改めて「函館」と稱す。五年六月函館札幌間に電信線を架し、八月函館青森間に海底電信線を布設す。こゝに於て通信の機關稍備はるに至れり。七年八月開拓使附屬船を以て、函館青森間の飛脚船に充て、尋て十一月三菱會社も東京函館間の定期航海を開き、爾後漸次運輸の便を増し、内外の交通頻繁となれり。九年七月、車駕臨幸の事あり。十三年始めて區役所を置き、區會を開き、自治の基を作り、十四年九月、車駕再び臨幸あらせられ、親しく新開の地を見をなはしぬ。二十一年龜田川の流末を轉じて大森濱（大平洋に面し、港とは反對の側なり）に注ぎ、溝渠を埋め、此年豫て計畫せし水道の布設に着手し、八里を隔てたる赤川より鐵管（口徑十二インチ）を以て水道を通じ、飲料水を市民に供し、消火栓を設けて消防に便にす。此工費三十万五千圓なり。是より先、横濱に水道布設の事あり。函館の水道布設は、實に我邦に於て第二次の計畫にして、東京水道の布設亦た此工事に學ぶ處多し。斯くの如くして北海道拓殖の業年を逐ふて進むに従ひ、北海道の門戸たる函館は愈々繁榮を増し、戸口を加へ、電燈を設け、馬車鐵道を敷設し、水道を増設し、殊に三十年には八十二万圓を以て函館

港改良工事を起し、三十三年に至り竣工す。港内には四時船舶輻輳し、商業の取引は内
外に繁く、北海南東諸港と、内地各府縣の諸港より、遠く支那、北米合衆國及び露領地
方に及び、市街の殷賑なる、實に北海道第一の都會にして、また本邦中屈指の都會たり。
(函館市街圖及口繪寫眞參照すべし)

港と市街 函館港は津輕海峡の北、渡島灣の中心にあり。函館山(一に臥牛山と呼
ぶ。其形恰も牛の臥すに似たるより、頼三樹三郎の命せしところといふ)灣中に突出し、
砂地を以て陸に連り、海水深く灣入して、巴字の形を爲す。因て又巴港の稱あり。港内
波穩かにして碇泊甚だ安全なり。市街は海岸より延きて山腹に連なり、其中部に位する
を末廣町と稱す。銀行、諸會社、郵便電信電話局、こゝにあり。また豪商多く、金森、
金二、今市の三店、洋品雜貨商として最も名あり。函館支廳、區役所、函館控訴院、地
方裁判所、商業學校、中學校、英清露三國領事館及び露佛の寺院、西本願寺別院、其他
教會堂等、皆山腹にありて美觀を添へ、税關、船渠、郵船會社支店は海岸に在り。旅館
の櫛比する東濱町は、層樓大厦軒を並べ、夜間碇泊の船樓より眺むれば、紅燈點々水に
映じ、壯觀云ふべからず。若し夫れ仲濱町に至れば、一坪地價百圓に上り、問屋の多く

は茲にあり。店頭何物をも飾らず、格子深く鎖し、閑として聲なきも、十露盤玉一つの
上下、能く二三十万圓の貨物を集散し、其商取引の活潑なる、到底豫想の外に屬す。

遊覽の場所 公園地は青柳町に在り、市中に往來する馬車鐵道に乗れば、十分時に
して到る可し。公園の北方なる摺鉢山に登りて南方を眺れば、右は立待岬、左は潮首の
崎、前方は即ち烟波縹緲の間、黒烟を吐て駛る飛脚船、白帆を孕みて來る大和船、漁舟
其間に點綴して、一幅の活畫なり。北方の内海は、帆檣林立、遠く對岸の七重濱、乃ち戊
辰の亂に舊幕臣中島三郎助父子か、血戦して驍名を輝したる古戰場を見るべく、前後
とも宛然たるパノラマなり。園中には博物館あり、水産陳列場あり、共に商業學校の附
屬なるも、函館縣の時代に建設せるもの、陳列品は主に本道の物産なれば、以て本道の
富源を見るべし。其中に各種の漁業方法を、一々模型によつて示し、或は漁撈の器具に
一々説明を附して列ねあるを觀ば、また漁業地を巡視するに及ばずして其多くを知る
を得べし。園内を出れば谷地頭と云ふ溫泉場あり。溫度華氏九十三度にして、泉質は
炭酸アルカリ食塩泉なり。旅合勝田樓、割烹店百花園、朝田屋あり、共に庭園の美を以て
鳴る。國幣中社函館八幡宮は此地に在り。歸途相生町を過れば蓬萊町あり。藝妓百、娼

妓三百、割烹店小林樓の如き百疊の室を掃つて遊子を迎ふ可し。東に道を右方に執れば、大森濱の海濱に出づ、一に赤石の浦と名づく。白砂十里、浪は太平洋より寄せ來れど、高からずして、夏時は海水浴に適し、浴客常に群集し、夜間は露店の肆を列ねて雑沓を極むる新藏前は其の左方に在り。こゝを離るゝ丁餘にして劇場三あり。池田座、太和座、及び函館座と稱す。湯の川は、市街を距る二里、馬車鐵道通ず。白銅二個を費さば至るを得可し。礦泉の噴出する處、湯盛館、林長館、等割烹店の尤なるものとす。共に屋内に礦泉の湧出するあり、四時遊客絶えず。一日の清遊は約金貳圓にて足る。礦泉溫度華氏百六度以上百三十度迄數種あり、泉質綠礬泉なり。五稜廓は市街を距る一里、人車貳拾五錢を要す、乗合馬車は其半額なり。今は外濠の五稜のみ依然たり。冬時其外濠の水を結氷せしめ、伐出するものを函館氷と稱し、海内に其名聲を恣まゝにす。七面山は臥牛山の中腹、港内に接したる方にあり。上に一小旗亭あり、就て至港内を下瞰すべし。臥牛山は更に十數町を登らば、其山嶺に達す可し。日蓮上人の高弟、日持上人、滿州布教の大願を起し、鎌倉を出て、遙かに蝦夷ヶ島根に渡り、此山に登りて遠く西比利亞地方を望み、結縁の爲に一大石に七字の題目を彫りたるものあり。之を經石と稱す。されど

今日要塞砲兵の屯するありて、七面山以上に登るを許さず、經石亦た好事の人の見舞ふもの稀なり。

招魂社 沙見町にあり、明治二年の造營にして、五稜廓及其他の役に戦没せし忠魂を祀る。例年六月十日を以て大祭を行ふ。境内芝生廣ふして松を植ゆ。堤上に立つて遠く望めば、外洋、港内双眸に入り來る。常に人の賽するもの稀なるも、亦た一遊の價值あり。社殿の傍、清水谷侍従の撰にかゝる一基の碑あり、五稜廓戰役の顛末を記す、一讀すべし。

銀行及諸會社等 日本銀行北海道支店、第百十三銀行、函館銀行、三井銀行支店、日本商業銀行支店、二十銀行支店、函館銀行、函館貯蓄銀行、安田銀行支店及其他の諸會社等、概ね末廣町に在り、函館電燈所は園田實徳氏の私設にして、東川町にあり。また商業會議所は富岡町に在り、もと商工業者の出資して建築せしもの。函館俱樂部も其の中にあり。新聞紙は函館毎日新聞、北海新聞、函館日々新聞、北海朝日新聞の四種あり。

製造所 夏期は清國輸出の重要品たる錫を製造すべく、豊川町海岸は此等小製造所

を以て充たされ、また東川町には昆布製造所、製革所、等あり。函館鐵工所は豊川町にあり、蒸汽力を用ひて鐵機製作及び木挽の事をなす。
水道配水池 横濱市に次ぎ、全國第二次に成る。汐見町に配水池を設け、二万八千四百九十五平方尺の貯水池、其地位高燥にして、函館市街の一半を眺むるを得べし。
此の如くして略ぼ函館の巡遊を了らば、再び海を航して室蘭に出て、長驅札幌に至るを最も順序よき旅行法となす。

札幌に至るの順序

函館室蘭間の汽船は、毎日午後九時を以て函館を解纜し、翌午前五時室蘭に着す可し。旅宿には九一、河田、等あり。室蘭より札幌に到る直通列車は、午前七時十分室蘭を發し、午後二時札幌に着す可きも、旅客若し敷時間滞在して室蘭を見んと欲せば、午前十一時三十分室蘭發、午後六時二十分札幌着の二番直通に乗るも可なり。然れども室蘭の地は、僅に炭礦會社貯炭場あると、旅客の上下するとの爲に存立を支へられたる土地にして、此地の産出物は、僅少の魚介と、雲丹とのみ。故に室蘭滞在は利益少なきも、旅

客若し失費と時日を惜まさらんには、直ちに札幌に向ふを止め、金六十錢を投じて小蒸汽に乗じ、二時間を費して室蘭の對岸紋籠村に出て、伊達男爵の經營にかゝる模範農場を觀て、以て本道農事の一斑を識るも可ならむか。室蘭より紋籠に航するの海は、所謂「噴火灣」なり。彼方に天空を衝くの有珠ヶ嶽は、盛んに白煙を吐き、奇巖突兀、逆まに大海原に映ずるの光景、嵩高雄大の觀は以て大に人意を壯にすべし。
今夫れ午前七時十分發の列車に乗込まば、室蘭を出て、一時間、登別驛に着せん。こゝは名た、*



分(こゝより夕張炭山線の岐れ路)三川、由仁(此邊水田多く鐵路の兩側悉く是れ。晩夏の交、由仁附近を汽車にて通る旅客は、農家耕耘の規模甚だ大なるに驚く可し)清真布、岩見澤(砂川驛を通じて旭川線へ向ふ分岐點にして、炭礦線の中央に當る、幌

向(此驛亦た大農村なり)江別、野幌、厚別以上二十二驛を通過し、而して札幌に着す。旅館には山形屋、旭館、丸ノ等あり。皆な停車場に近し。かくの如くにして旅客は本道の首府たる札幌に入りぬ。函館より室蘭を経て札幌に至るの旅費計算左の如し。
自函館至室蘭汽船賃一圓二十錢 室蘭旅宿休憩一飯六十錢(中等)自室蘭至札幌汽車賃一圓九十八錢 合計金三圓七十八錢 之に汽車内の辨當一回二十錢を加へ總計三圓九十八錢。(室蘭市街及口繪寫眞参照すべし)

札 幌 區

札幌の沿革 札幌の地、舊と樹林と草原と相交り、唯二三舊土人の住居するのみにして、熊鹿狐狸の出沒せし所なり。安政四年函館奉行堀織部正、錢函(後志國)より千歳を経て札幌に至るの細徑を開き、東西海岸往來の便に供す。同時に志村鐵一なるものを扶持して、札幌川(後に豊平川と云ふ)札幌區と豊平村を界する川にして、區の東方を貫流す)の波守となす。今はこゝに大鐵橋を架し、來往に便にすれど、當時に在りては行人稀なれば、之を以て足りたるなり。かくて鐵一は川の南岸に茅屋を構へ、又吉田茂八

なる者來りて其北岸に住し、沂ぼる鮭或は雜魚を捕へて口を糊す。本州人にして古への札幌の地に住せしもの、實に以上二名を鼻祖とす。慶應二年幕吏大友龜太郎、農夫を募り、今の札幌村(區の北方にあり)の地に移り、官費を以て米金を給し、開墾を始む。之を元村と稱せり。用水を引く爲に、豊平川より札幌の地を経て、一條の溝渠を掘る、呼んで大友堀と云ふ。以上は開拓使以前に於ける沿革なり。明治二年十一月、開拓使判官島義勇、下僚を率ひて札幌に來り、雪を冒し地を相す。其馬を駐めたる處は乃ち大友堀の畔にして、こゝに置應の基開かれ、札幌の地始めて創成されたるなり。當時の住民は僅に十戸許といふ。之より後、何時とはなしに大友堀を創成川と呼びかへ、判官馬を駐めたる邊に架したる小橋を、創成橋と稱す。今は日本銀行札幌出張所の在る所也。三年、判官岩村通俊これに代り、榛莽を伐り、道路を開き、略ぼ經營する處あり。四年市街を區畫し、厚く保護を加へて商賈を導き移し、爾後移住するもの漸く多く、明治六年には本籍戸數七百九、人口千九百四十九となれり。爾後年を逐ふて移住者を増し、殊に北海道廳となりし以來、進歩殊に著しく、今は人口五万と稱し、全道有數の都會となれり。

市街 札幌はもと草原を區畫して市街を形造りしものなれば、一の小坂だも無く、端より端に至るまで、道路坦々たり。市街は南方一條より八條に至り、北は一條より十二條に至る。其大通と稱するものは、路巾六十間、これより南北數條に分れ、東は一丁目より十二丁目に至り、西は一丁目より八丁目に至る。其東西を區分するは即ち創成川にして、川の以東は東一丁目より街次之れを唱へ、川の以西豊平川に至るの間は各其丁目分つ。故に北何條の東一丁目も南何條の東一丁目も、一丁目のある處は悉く一丁目なり。要するに札幌市街は碁盤の目の如し。井然不紊、大道直くして矢の如し。(札幌市街圖及口繪寫真參照すべし)

遊覽の場所 中島遊園地は、南七條西四丁目にあり。池あり小舟を泛べて人の遊ぶに任す。西の宮、大中亭など呼はる、旗亭あり。小酌によろし。競馬場あり、春秋二期大に馬を競ふ、水原林檎園亦た南六條と七條との間にあり。名産の林檎を求むれば、主人客を引いて小亭に導き、之を勸む。樹下清鮮なる林檎を味はし、亦た飽く事を知らざる可し。其地續きに劇場あり、札幌座と名く。薄野とは遊廓の名稱にして、南五條南四條各西四五丁目の間にあり。廓内亦た劇場あり、大黒座といふ、終歲由鼓の聲を絶たず。

博物館は北五條にあり。札幌農學校の附屬館なり。本道産物の工藝礦業品、農産水産獸畜の製製品等を陳列す。館内西洋草花の温室あり、一度其室に入れば、百花爛熳香氣衣袂に薫す。札幌神社は區外圓山と稱する地にあり。區を距る約二十丁、二十錢を投すれば人力車にて赴くを得可し。官幣の大社にして、明治二年九月、北海道開拓守護神として、神祇官に於て初鎮坐式を執行せられ、東久世開拓長官(通稱)島開拓判官(義勇)等御靈代を奉じ、北海道開拓使假廳構内に假に神殿を設けて奉齊したるに創まり、大國魂大神、大己貴大神、少彥名大神の三神を奉祀す。明治四年五月、札幌郡圓山村に於て四万八千四十二坪餘を社地に選定し、神殿を造營し、全年九月御遷坐式を執行し、爾來毎年六月十五日を以て大祭を執行す。北海全道の總鎮守なるを以て、此日全道の各官衙學校、悉く業を休みて以て齊き奉れり。境内櫻樹數百株、花時には滿市の士女群集し、東京の上野、向島を忍ばしむ。定山溪は、札幌の東南約四里の地に在り、馬車を僦ふて赴くを得可く、札幌郡平岸村に屬して、華氏百度の鐵泉湧出する温泉場なり。地は豊平川の上流に臨み、之に綸を垂るれば、「やまへ魚潑瀾」として手に在り。輕川は札幌より約三里、札幌小樽間の中央に位し、手稻山の半腹にあり、札幌よりは瀛車二十五分にして

達す可し。其の流車賃十三錢なり。温泉場を光風館と云ふ。停車場より約十六丁泉質は硫黄泉にして、温度は華氏五十一度餘、曉起光風館上より輕川平原を眺むれば、朝霞を破りて馳る流車、風防林の梢にかゝる朝暾、得も云はれず妙なり。

渡島通と狸小路 南一條通を渡島通と云ふ。函館へ通する國道なるを以て斯く呼ばる。札幌に在りて最も殷盛なる町並にして、豪商と呼はる、者の多くは皆なこゝに軒を並ぶ。狸小路は南三條と二條との間に在り。數年以前までは暖味料理屋の櫛比せし處なりしが、今は掃蕩せられ、夏期露店の處狭きまで居並ぶを以て、僅かに其賑はしき餘をとらむ。寄席三あり、義太夫落語浪花節、男女の足を運ぶもの繁し。

麥酒會社と製麻會社 札幌麥酒會社は、北四條にあり。製造部は、製麥、醸造、器械、試験の四課に分れ、技師長一人、技師一人、技師見習二人、技手四人、之を監督し、職工九十餘人を使役す。製造法は専ら獨逸式に則り、逐年銳意改良の結果、大に聲價を高め、内國製出麥酒中嶄然頭角を現せり。麥芽製造に供する大麥原料は、毎年北海道産の物三分の二、各府縣より輸入の物三分の一を用ひ、尙年々不足を告げ、獨逸並に米國より麥芽を輸入して原料に充つ。麥酒の主なる輸出地は、東京、大阪、京都にして、九

州北陸之に次ぐ。また近年、京城、浦鹽斯德、天津、上海等へ輸出するもの少からずと云ふ。三十三年より製備部を開始せしが、原料たる珪砂は、後志國熊雄地方にて産し、一ヶ月の製造高六万本、一ヶ年七十二万本の多きに達す。従來東京より輸入せる個數は、一ヶ年凡そ三百五十万本なれば、自製の方は其五分の一を充すに過ずと。以て其販路の廣さを察す可し。製麻會社は、北六條創成河畔に、赤練瓦の獨逸式建物すなはち之なり。全社に於て使役する職工は、男工三百五十名内外、女工八百名内外にして、其多くは能登越中等より雇入れらるるもの、男女寄宿舎の設備ありて、本道有數の大工業會社なり。原料は、歐洲各地に於ては亞麻耕作者又は仲買人に於て製線し鬻ぐを以て、機織工場は只之を買入れ紡織するに過ぎざるも、本道に於ては新事業にして、該作物は新渡來のものなれば、當初白耳義國人コンスタンを聘し、耕作者に之が栽培法を教示したり。

亞麻莖の買収は、雁來、琴似、當別、新十津川、栗山の五製線所に於てし、製線の後、本社に輸送し、以て資料に供す。而して其製造品は、絲、布の二種にして、絲類は帷子用細絲、生平用絲、蚊帳用絲、疊縁用糸、疊表及花莖經糸、漁網用捻糸、帆縫、靴縫、其他各種の縫糸にして、織物類は、軍艦商船用帆布、雨覆又日覆ズツ、生晒服地用、

赴く鐵路の傍、石狩川上流に沿ふたる邊にあるもの、二所となす。鏡函朝里間なる神居古潭は、見上げれば千丈の奇巖累々として今しも墜らんかと危まれ、見下せば海波漫々として遠く霞むは天鹽の山々、翔る海鷗、駛る船、其光景得も云はれず、四五月の交、此附近に於て鯨魚盛に行はれ、車窓より之を見るを得可し。かくて小樽驛に着すれば、停車場には各旅店の若者集り、自から店名を叫びて客を引く、越中屋、キト、角キ、等は、旅宿の最も親切丁寧なるものなり。其規模函館札幌と伯仲す。

其間數個の丘陵ありて、地勢高低多く、平地少なきを以て、市區整正なるを得ず。北方に港あり、東西十八町、南北十町、深さ四尋より五尋に至る。高島岬其北を擁して、風波を遮り、大艦巨船を安全に碇繋するを得可し。實に本道西北海岸第一の



小 樽 區

●●●●●●●●●●
小樽の位置 小樽區は後志國小樽高島兩郡に誇り、北西南三方は山嶽丘陵を負ひ、東方一帯小樽灣に面し、遙に石狩國に相對す。海岸弓形をなし、街衢之に準じて南北に延長せり。

良港なり。日本郵船會社は支店を當港に設け、神戸を基點として東廻、西廻の定期船あり。共に當港を終點とし、更に當港より天鹽、北見の諸港に接續する命令航路あり。又社外船(郵船會社以外を云ふ)數多ありて、各地との往復絶えず。陸は鐵道によりて札幌に至る二十二哩、砂川よりは官線に連絡して、旭川に至る百六哩、室蘭に至る百三十哩、以て石狩大原野の關門をなし、別に小樽函館に敷敷する北海道鐵道は、既に余市山道間二十一哩を開通せり。

沿革 小樽は原名をオタルナイと云ひ、砂川の義にして、石狩、小樽二郡の境界にある川より起因す。松前藩の時、其支流に居住する土人を今の小樽の地に移し、漁場を開き「オタルナイ」場所と呼ぶ。後志十七漁場の一にして、松前藩士氏家新兵衛の支配地たり。當時漁場の受負人は、屋舎を設け、土人を使役して鯨漁を營めり。又漸次内地より出稼に来る者ありしが、皆春期に來り秋期に去り、永住するを許さず。此成規は獨り小樽のみにあらず、蝦夷の奥地皆同様なりき。加之、後志國神威岬以北は、古來の習慣として、女子の通行を禁ぜり。これ人口に膾炙する

忍路たか島及びもないが

内 案 遊 漫 本 日

せめて歌棄磯谷まで
 の俗語の因て起る所以なり。幕府の蝦夷地を直轄するに及び、大に舊來の陋弊を改め、拓地殖民を奨励し、又幕史梨本彌五郎と云へるもの、安政二年始めて妻女を伴ひて神威岬の沖を過ぎ、以て女子通行の禁を解けり。
 或は云ふ向山源太夫、妻女を伴ふて、船、神威岬の沖を過ぐ、土人其神の怒に逢はん事を云ふ。源太夫輒ち携ふる處の火繩銃を岬に向け發して曰く、我は台命を帯びて航す、汝、審神能く我に仇するを得るやと、元より何事のあるべき道理なし、而も土人これを以て台命の辱きものと信じ、畏懼亦た幕吏の言に叛く者なしと。
 是より後、漸次奥地に永住する者増加し、小樽漁場も一の部落をなすに至れり。明治二年開拓使を置かるゝや、小樽は一躍して重要な地となり、十三年十一月手宮（小樽の南端）札幌間の鐵道竣工し、交通の便を増し、其他海面の埋立、市區の改正等、見る可き工事多く、二十二年特別輸出港となり、二十七年露領沿海州薩哈噠島及朝鮮貿易に關する帝國臣民の所有船舶出入及貨物の積卸を許さる。茲に於て港灣の修築倍々必要を感し、遂に明治三十年國費を以て十ヶ年の繼續事業となし、小樽築港に着手す。工費概

道 海 北

算二百萬圓とす。三十二年十月區制を實施して自治體となり、三十三年八月更に外國貿易港となれり。電話交換局は全年四月に開設し、小樽札幌間長距離電話は、其翌月を以て實施せらる。斯く海陸交通の便益加はり、人口の増殖著しく、方今町數四十一、人口七萬に上り、北海全道中第二の大都會となれり。左に明治初年以來毎五ヶ年と、最近四ヶ年の戸口を掲げて、其如何に急速に發達せしかを知るに資せん。

年次	現住戸數	現住人員
明治元年	四四五	二、二三〇
全 五 年	八五〇	四、二四二
全 十 年	一、四二八	六、四三三
全 十 五 年	一、九一五	一〇、八七一
全 二 十 年	三、七〇九	一五、四六一
全 二 十 五 年	三、二七七	三一、四七二
全 三 十 年	七、七二三	五四、九六六
全 三 十 一 年	八、九〇九	五六、九六一
全 三 十 二 年	九、四一九	六一、八九三
全 三 十 三 年	九、四一九	六七、三〇八

其戸口の増加速なるを以て、小樽港の發達の劇甚なるを知る可し。而して北海道鐵

道も数年を出てずして貫通せんとす。將來の進歩想ふべし。

市街と行及商家 市街の内最も目抜と稱すべきは、湊町、堺町、色内町とす。此三町は連綿して南北に亘り、大賈豪商櫛を駢べ、百貨輻輳し、郵便電信局、電話交換局、區裁判所、商業會議所、各銀行本支店、北海道鑛山會社及び屈指の回船問屋、旅店、等其間に雜る。家屋は概ね堅固なる二階造りにして、宏大なる石造亦た少からず。街路は兩側を入道とし、悉く切石を敷き、中間を車馬道とし、雨雪の際は人夫をして泥土を掃ひ積雪を除かしむ。故に人馬の往來織るが如しと雖も、常に清潔を保てり。夜は毎戸大抵電燈を點し、煌々輝きて不夜城を爲す。手宮町亦繁盛なり。其棧橋は埠頭を横斷して海中に突出する事二百餘間、汽車直に其上に至り、以て貨物の揚卸に便す。炭礦株式會社附屬工場及び手宮停車場あり。其北に小樽築港事務所ありて、方今突堤は千五百餘尺を竣功し、進んで千八百尺に至らしむるの設計にして、工事は着々進行中に屬す。南濱町は、海に沿ひ、倉庫回酒店多くして緊要の地たり。入船町亦繁華なり。其街上を横きりて鐵橋を架し、汽車は行人の頭上を走る。住吉町には小樽停車場あり。量徳町には、小樽支應、警察署、量徳尋常高等小學校あり。山の上町は、眺望に富み、酒樓魁陽亭

あり。稻穂町は各種の製造所工場あり、花園町は山腹に沿ひ、區役所あり、公園地あり、其他の諸町は、概ね雜商、職工、労働者等居住し、勝納町は主に漁業に従事せり。(小樽地圖及口繪寫眞參照すべし)

小樽の住民 各地より集合し、三府四十餘縣の人、殆んど皆雜居す。其内新潟縣人最も多く、石川縣人之に次ぎ、奥羽地方及富山、福井、滋賀、東京の人之に次ぐ。市内に於て各商業に従事する者を區別すれば、米穀、荒物、海産物は、重に新潟石川兩縣人、吳服太物は滋賀、新潟兩縣人、鐵物は山梨縣人、陶器類は富山縣人、魚商は新潟縣人、野菜商は福井縣人に多し。又其他の職業を區別すれば、大工は、新潟、石川、秋田の三縣人、染職は新潟縣人、仕立職及靴職は東京府人、労働者は秋田、岩手、青森、石川の四縣人多し。而して全體より之を觀察すれば、小樽に於て勢力を有する者は新潟、石川二縣人なるべし。

小樽の商業 管外に於ては、大阪、東京、新潟、伏木を始めとし、廣く各地に及び、管内に於ては、後志國神威岬より、北見國網走に至る一帶の沿海及石狩原野、天鹽國上川、中川二郡とす。石狩原野の運搬は、専ら炭礦鐵道及官設鐵道により、其他は皆汽

船に由る。汽船の過半は郵船會社に屬し、府縣の諸港及本道西北河岸の諸港と定期若くは臨時に往來して貨物を集散せり。今明治三十三年の管内外輸出入の總金額を見るに實に二千四百七十六万三千九十二圓に達せり。爾來尙ほ年を逐ふて増額するは言ふを俟たず。

金融機關

日本銀行小樽出張所、三井銀行支店、田中銀行支店、北海道商業銀行、小樽銀行、十二銀行支店、二十銀行支店、百十三銀行支店、日本商業銀行支店、北海銀行支店、合資會社中立銀行、札幌貯蓄銀行支店等あり。拓殖銀行亦た支店を設く。方今株式會社十七、合資會社十三、合名會社十にして、物品販賣、仲買業、倉庫業、其他各種の業を營めり。小樽商業會議所は湊町にあり、小樽米穀取引所は稻穂町にあり。共に商業取引の機關たり。

市街地價

南濱町一丁目より三丁目に至る一等地一坪七十圓以上百五十圓以下、色内町之に次ぎ、一坪六十圓以上百圓以下、北濱町少しく下りて五十圓以上七十圓以下とし、湊町、入舟町、稻穂町等に至るに従ひ、漸次低落し、一等地三十五圓以上六十圓以下に下り、若竹町の如き、場末に至りては一坪三圓以上五圓以下なり。

社寺と學校 神社は九ヶ所あり、其内住吉神社は創建頗る古く、明治八年郷社に列せらる。社地廣大、神殿壯麗、毎歲七月十五日大祭を行ふ。寺院十二あり、其内三ヶ寺は近く數年間の設立にかゝる。また公立尋常高等小學校五、公立尋常小學校四、私立尋常小學校三、尋常中學校一、また中學程度には、私立餘力學館、私立英和學校、私立有隣學校及私立商業學校等あり。又女子の爲には私立靜修女學校あり。高等女學校亦近きに開設されんとす。

遊覽の場所

公園は花園町に、遊園地は手宮にあり、登臨すれば港内の眺望を恣にするを得べし。小樽築港所に就て工事の現況を見る、亦た大に裨益あるべし。炭礦會社手宮工場の裏道に一の石室あり、壁上梵字に類するもの、彫られあるは、上古コロポックル人種の遺跡なりと傳へらる。亦た一覽の價値なきにあらず。劇場は末廣座、住吉座、星川座、手宮座等あり。一年三百六十日會て閉場する事なく演劇をつゞけ居れり。

新聞社

小樽新聞社、小樽毎日新聞社の二あり。以上を以て北海道の三大都會と稱せらるゝ函館、札幌、小樽三區の案内を了れり、今は本道の沿海を一週する爲に、航海の狀況を述べ、而して後また本道内主要地の案内を

試む可し。

北海道廳命令航路

函館根室間 毎月六回發船し、往復航とも釧路に寄港し、往航又は復航に厚岸、霧多布に寄港す。但し一二三月は六回の内一回釧路に止むることあり。其賃錢を表示すれば左の如し。

函館	二、五〇	釧路	二、八〇	厚岸	一、〇〇	霧多布	一、〇〇	根室	一、〇〇
	二、〇〇		一、五〇		一、〇〇		一、〇〇		一、〇〇
	三、五〇		二、〇〇		一、五〇		一、〇〇		一、〇〇

表中の數字、以上は圓位にて、其の以下は十と錢となり、以下賃錢表は皆之に準ず、

根室紗那線 五月より十一月迄、毎月三回、十二月は月一回の發船をなし、往復航とも留別に、往航又は復航乳香路斜古丹に寄港し、五九月の航海中、各一回得撫島床丹に寄港す。氷結又は流水の爲め、港灣又は航路閉塞したる時は、根室を花咲に換へ、十

一月中旬以後の航海に於て、天候不良の爲め進航する能はざる時は、紗那及留別を單冠に換ふる事あり。賃錢表左の如し。

根室	一、五〇	乳香路	一、五〇	斜古丹	二、〇〇	留紗別那	二、五〇	得撫	二、五〇
	一、五〇		一、〇〇		二、〇〇		二、五〇		二、五〇
	三、〇〇		二、〇〇		二、〇〇		二、五〇		二、五〇
	四、五〇		三、五〇		三、五〇		二、五〇		得撫

根室網走線 五月より十一月迄毎月三回、四月及び十二月毎月一回の發船をなし、往復航共泊に寄港す。賃錢表左の如し。

根室	一、〇〇	二、五〇
泊	二、〇〇	二、〇〇
網走	二、〇〇	二、〇〇

小樽稚内線 四月より十一月まで毎月五回、十二月より三月まで毎月三回發船し、往復航とも増毛、焼尻、天賣、鬼脇、鷺泊、香深へ寄港す。氷結又は流水の爲め、港灣

北 海 道

●小樽天鹽線 六月より十月迄毎月三回、十一月より二月迄及び四月は毎月一回、三月及び五月各二回發船し、往復航共増毛遠別に寄港し、臨時に留萌、鬼鹿、力登、苫前、羽幌、初山別等に寄港す。賃錢表左の如し。

小樽	二、三三	三、〇四	三、八四	四、二四	四、四〇	四、六四
稚内	一、二三	一、九二	二、四〇	二、六四	二、八八	
枝幸	一、一二	一、三六	一、九二	二、一六		
紋別	四、〇〇	八、八	一、一二			
湧別		四、八	八、〇			
常呂			四、〇			
網走						
天鹽						
小樽	一、〇〇	二、六〇	二、九〇			
増毛	一、六〇	一、九〇				
遠別		四、〇〇				

日 本 漫 遊 案 内

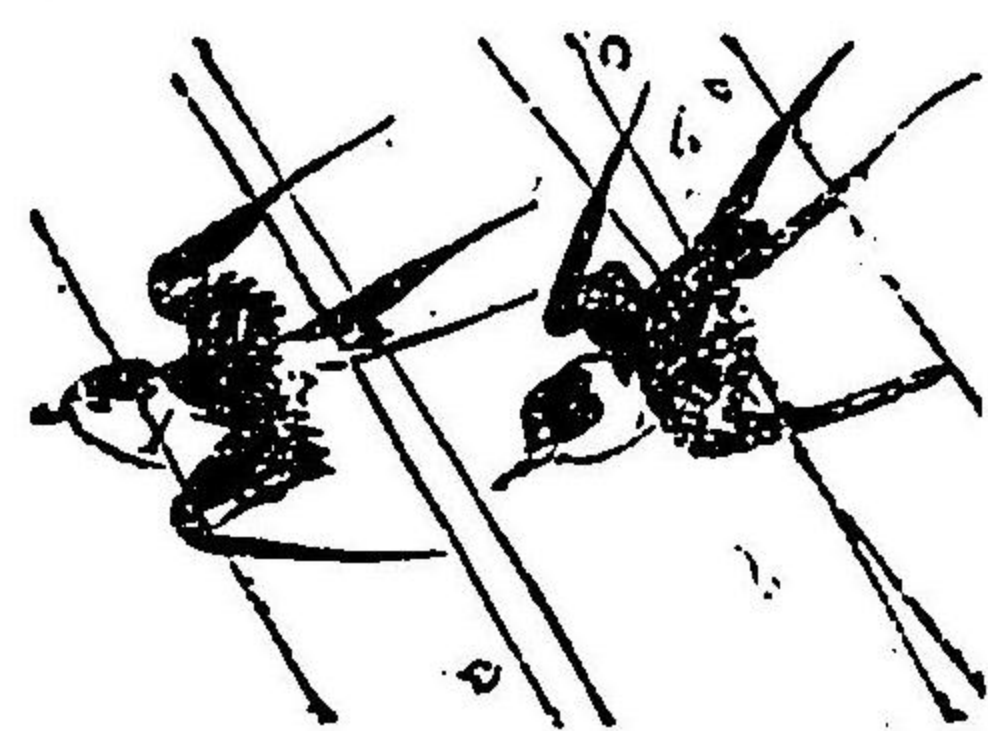
又は航路閉塞したる時は、稚内を坂下に換ふる事あり。賃錢表左の如し。

小樽	一、二〇	一、七〇	一、七〇	二、三〇	二、六〇	二、九〇	三、五〇
増毛	一、二〇	一、二〇	一、七〇	一、九〇	二、三〇	二、九〇	
焼尻	二、五	一、二〇	一、四〇	一、七〇	二、三〇		
天賣	一、二〇	一、四〇	一、七〇	二、三〇			
鬼島	五、〇	七、〇	一、七〇				
鷺泊	五、〇	七、〇	一、三〇				
香深	一、一〇	一、三〇					
稚内							

北海道廳補助航路

●小樽網走線 五月より十月迄二ヶ月毎に五回、四、十一、十二の各月二回づつ發船し、往復航共、稚内、枝吉、紋別、湧別、常呂に寄港し、臨時に、雄武、斜里に寄港する事あり。賃錢表左の如し。

る都會として、殊に全道の中心として、官設鐵道の集點として、前途益々有望なるを以て知らる。されど十年前以前を顧みれば、全く未開の原野にして、野獸の巢窟に委し、人類としては僅に四十戸の土人ありしに止る。明治十八年八月、司法大輔岩村通俊、北海道を巡廻し、北海道廳長官陸軍少將永山武四郎等と共に旭川に至る。時にアイヌを嚮導とし、丸木舟に乗り、石狩川を溯り、八日にして纔に近文に達せりといふ。乃ち山に登り地形を相して、本道の樞地となし、碑を近文山に建て、其事を記して曰く*



と、此言空しからず、實に今日は旭川市街の大道祇の如く、都府殆んど成れり矣、十年間の發達、恰も隔世の如きなり。
上川の地理 上川の地、略ぼ北海道の中央に位し、海拔四百餘尺、四圍山嶺を繞ら

* 明治十八年八月、岩村通俊、永山武四郎、長谷部辰連、佐藤秀顯等、各以其官事、登此山、則山河圍繞、原野廣大、實有天府之富、他年大道如砥、都府區成、相與再登、舉杯酣飲、以談今日也、乃相謀建碑、以遺之後云、

し、殊に東部に聳立するスタクカムウシユベ山は、本道第一の高山にして、山姿雄大、北海の重鎮たり。石狩、忠別、美瑛の三川は、上川原野を貫流し、合して一條となり、蜿蜒銀蛇の如く、神居古潭の峽谷に入り、石狩原野に駛走す。旭川町は、此原野の西部三川合流點の東部に位し、南西は忠別川を以て神居村に連り、北は石狩川を隔て、鷹栖村に對し、ウシシユベツ川を以て永山村に界し、東は風防林を以て東旭川村に接す。其面積七十二万五千餘坪あり。離宮豫定地は忠別川を隔て、神樂村に在り、神樂ヶ岡といふ。地勢高燥、樹木蒼鬱、此處に登臨すれば、上川原野の風景双眸の中に集り、脚下に旭川全市街を瞰て、眺望絶佳なり。第七師團兵營は、市街の北東にあり、相距る凡そ一里とす。

運輸と交通 鐵道は三方に通じ、其一は西に走り、札幌へ八十六哩、小樽へ百八哩、室蘭へ百四十七哩とす。一は十勝線にして、目下鹿越驛まで五十六哩。一は天鹽線にして、天鹽國上川郡士別まで三十三哩餘、開通す。又此地より北見國網走に至る道路あり、所謂「中央道路」これ也。其里程五十七里、市街に郵便電信局あり、目下札幌小樽間長距離電話の架設中に屬す。

上川の戸口 明治三十一年末には、戸數一千二百十三にして、其人口四千六百六十二人に過ぎざりしが、同三十三年末の調査には、二千四百三十九戸、九千二百九十四人の多きに達し、僅かに二ヶ年にして、二倍以上の増加を示し、爾後年を逐ふて非常に増加しつつあり。現在一万余餘、かゝる急激の進歩發達は、本道古來未曾有の事なり。

市街 市街を分て南北を九條とし、東西は一丁目より二十丁目に至る。又別に宮下通、常盤通、曙通を設く。旭川停車場のある所は宮下通と稱し、次を一條通となし、順次北に逐ふて九條に至る。市街宅地一戸分は、間口六間奥行二十七間なり。而して目今最も繁盛なるは一條通二條通にして、之に次ぐは三條通宮下通となす。一條通は一丁目より二十丁目に至るまで、人家櫛比し、壯大なる建築少からず。商家旅店相連り、勸工場あり、銀行あり、劇場あり、郵便電信局は其十一丁目にあり。二條通も亦稍々一條通に類し、勸工場あり、戸長役場あり、北海旭新聞社あり。三條通には、上川支廳、警察署、勸工場あり。商家料理店相交る。北四條通には、區裁判所あり、稅務署あり、四丁目五丁目には寺院多し。五條通には燐寸軸木製造所あり、蒸汽機關を用ゐて盛んに外國輸出の軸木を製出す。上川農事試作場は、六條通より八條通に跨り、其構内には上川測

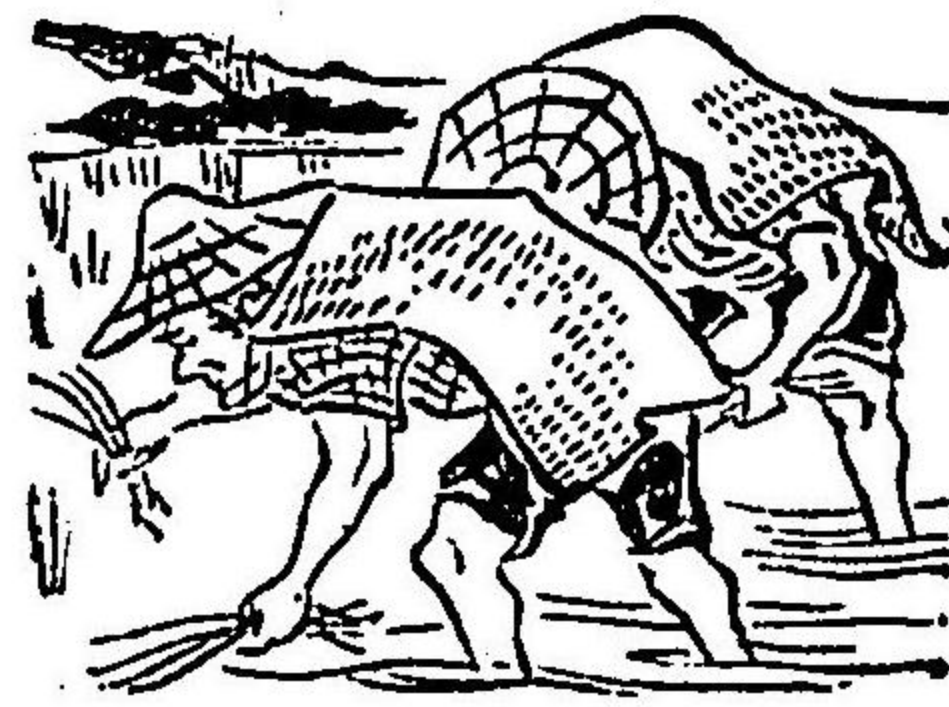
候所あり。宮下通には、憲兵屯所、上川倉庫株式會社あり。北海道鐵道部旭川工場は、市街の南東隅に位し。宏大なる工場四棟あり。専ら鐵道用の工品を製造補習す。以上述べ如く、一條通より五條通までは、大抵商家、旅人宿、料理店、諸官衙、雜然としてあり。六條七條通は、建築中の家屋多く、八條九條通は、宅地の區畫あれど、未だ全く人家の建てられたるを見ず。

地價 市街宅地の價は、明治三十年以降漸次騰貴し、三十二年師團工事開始以來、俄然暴騰して、上等地は一戸分(間口六十間奥行二十七間此坪數百六十二坪)三千圓内外、二等地は二千圓内外の相場なり。借地料は、上等地一坪一ヶ月二十八錢、普通は六錢位なり。

商業 市内小賣商凡そ四百餘戸、比較的其數多きを以て、競争激甚なり。物價は本道中廉價を以て名ある札幌に比し、僅に二三分の差あるのみ。洋酒煙草等に至りては、其價格相等し。府縣より直接輸入する商店は、僅に十數戸にして、他は小樽札幌より仕入をなせり。商業區域は、上川郡全部空知郡富良野村、及天鹽國上川郡の諸村とす。而して商況の活潑なるは、農産物出盛りの時期乃ち八月以降十二月迄なり。

雨 紛 原 野

雨紛原野は旭川市街の南方約一里、神居村にあり。本道開墾の情勢を知らんが爲には、旭川に遊びたる序を以て、必ず此地を視察するを要す。其地、西は山を負ひ、東は美瑛川を隔て、御料地に對し、雨紛川南西より來りて原野を貫通せり。此原野は明治二十三年區劃を測定し、二十四年貸附せる所にして、全二十七年始めて水田を試作し、三千圓を借入れ、延長三千七百間の灌溉溝を開鑿し、目下競ふて水田を開きつゝあるを以て、今後優に二百町歩の水田を設くるを得べし。一畝の地積百坪乃至二百坪、其規模の大なる到底各府縣に於ては見る可からず。若し夫れ盛夏の候こゝに至り、満目總て青



好結果を奏せしより、村民其利益を認め、同三十三年は、作附反別九十町七反歩、米收穫一千七百十一石に達せり。一反歩の收穫は平均二石とし、上等地は三石二斗に至る所少からず。同年土地所有者共同して雨紛水利會を組織し、拓殖銀行より一万

夕 張 炭 山

夕張炭山は、北海道炭礦鐵道株式會社に於て、現今採掘しつゝある炭礦中最も規模の大なるものなれば、北海道に遊ぶものは、機を見て一應の視察を試みて可なり。若し夕張に赴かんとすれば、札幌發上り一番の列車に乘組み、追分驛にて乗換へば、三時四十分間にして夕張に達せん。此賃金を一圓三十五錢とす(七十五哩餘)。

夕張炭山は、石狩國夕張郡登川村に屬し、夕張川の支流シホルカベツ川の溪間に在り。海面を抜くこと約千八百十五呎、探掘特許坪數四百五十万二千二百五坪、南西室蘭港を距ること八十八哩六十五鎖、札幌を距る七十五哩七十九鎖、小樽を距る九十七哩六十七鎖、交通甚だ利便なり。今本礦の沿革を略記すれば、明治九年開拓使備米國人ライマンの報告及土地測量の報告共に夕張地方に石炭あることを明言せり。然れども當時跋渉甚だ難きのみならず、夕張川には瀑布ありて舟行する能はず。爲に其後も探檢を試み調査を遂

波の習風に起伏するを見れば、北海道を帝國の富源と稱する決して誇言にあらざるを知るべし。

ぐる者なかりしが、曾てライマンに従ひ測量を實習し、此地方の地理を知りたる北海道
 應四等技師坂市太郎氏、明治廿一年秋之が踏査を企て、空知郡幌内より炭層の方向を逐
 ひ、山谷を踰えて夕張地方に出で、シホルカベツ川に至りて炭層の累々溪間に露出する
 を發見せり。爾來道廳は同技師を派遣し、精密の測量をなさしめ、茲に始めて夕張炭山
 の名、世に知らる。二十二年村田堤氏、其一部試掘の許可を得、同年十二月北海道炭礦鐵
 道株式會社創立の際、試掘權を全社に讓渡し、同社は同年開坑に着手し、二十五年鐵道
 敷設の工成り、汽車の運轉を始め、爾後年々探炭の規模を擴張し、殊に近年は壓搾空氣
 を以て機械の運轉を計る等、大に改良を施せり。炭層の廣さ南北二万五千尺、炭層の傾
 斜十五度乃至二十度にして、炭層數甚だ多けれども、其内主要なるは三層にして、一は
 厚さ五寸乃至三尺の夾雜物一枚を挟み、實に二十五尺の厚さに達す。之より下方凡そ三
 百尺を隔つれば、更に厚さ四尺の炭層あり。又上部凡そ百八十尺を隔て、厚さ四尺弱の
 炭層あり。此三層は、何れも目下探掘する所とす。夾雜層は頁岩と砂岩の二種なり。炭
 質は「ビチュミナス、チーキング、コール」種に屬し、燃燒十分、火力強烈、其實堅緻な
 り。探炭法を述べれば、坑道は高さ八尺幅十尺とし、炭層の方向に沿ふて掘進し、之に

並行して高さ七尺幅七尺の通風坑を其上部約二十四五尺を隔て、開鑿し、坑道と通風坑
 との間には、約五十尺毎に小通風坑を開き、常に大氣を流通せしめ、操業に便ならしむ。
 探炭は五十尺毎に設けたる小通風坑より始め、炭層の傾斜を登りて高さ六尺幅十七八尺
 の探炭場を開き、複線の鐵路を敷設し、坑道に連絡せしめ、又探炭場の後方には、石炭
 を坑道に搬出する爲に簡便なる自轉車道を設く。各探炭場を掘り登りて約五百尺に達す
 る時は、之を中止し、各探炭場を通じて炭柱を開掘し、此處に一直線の探炭場を開き、
 此處より下方に向ひ、一齊に各探炭場の上部に残りし石炭と、各探炭場間に残りし炭柱
 とを併せ、退却長壁法を以て掘り下るなり。礦夫は常に四千人の間を上下し、北海道
 人最も多く、宮崎鹿兒島人最も少し。販路に就て記せば、塊炭は帝國海軍、鐵道作業局、
 鐵道諸會社、内外汽船會社、各種工場等の需要夥多しく、其仕向地の重なるものは、内
 國に在りては函館、横濱、根室、青森、釜石、鹽竈、清水、新潟、直江津、伏木等に
 て、外國に在りては、浦鹽斯德、上海、香港、新嘉坡、古倫母等とす。産額は年を逐ふ
 て増加し、一日千噸に上り、會社所有の三炭山乃ち幌内、幾春別、歌志内の産出を合し
 たるものに匹敵し、一年の出炭額三十一万噸と號せり。

釧 路 町

北海道東部第一の都會を釧路町となす。函館を距る海路二百十湮(賃金二圓五十錢)釧路國釧路川の口に位し、釧路灣に臨み、南東にシレット岬突出せり。東部は概ね臺地丘陵相連り、西部は平地廣漠たり。されば古昔數多の土人住居し、今尚ほ高臺に數個の砦趾と數百個の堅穴跡とを存し、古しへの所謂「クスリ」大部落のありしことを證明す。土人の舊慣風俗等に就て知らんと欲せば、先づ此地に遊ぶべし。寛永十二年(距今二百七十餘年)松前藩始て久壽里場所をこゝに開き、藩主の直領とし、運上屋を設けたるも、未だ本邦人の在住するあらず。安政四年に至り米屋孫右衛門なるもの、奥州南部の民五百十五人を募り、此地に移住せしめたるを以て、本邦人士着の嚆矢とす。明治二年佐賀藩の支配となるや、佐賀の農工民數千戸の移住を見たり。爾來着々人口の増加を見、明治十七八年の頃鳥取縣士族百五十戸、此地を距る一二里の邊に移住して開墾に従事し、十八年釧路川上流標茶の地に釧路集治監を設けらるゝや、此地愈々繁昌の域に向ふ。されど殊に其發達を速かならしめしは跡佐登硫黄坑の採掘とす。

十九年安田善次郎氏の跡佐登硫黄坑を採掘し、製煉の業に従ふや、釧路川に汽船を浮べ、釧路より標茶までの間を往來し、亦た標茶より跡佐登に至る廿四哩の鐵道を敷設して之に連絡し、石炭の供給を得るが爲め、春鳥炭山を開掘する等、其業甚だ盛なり。而して其貨物は悉く此港を経由せしを以て、市況著しく進歩し、函館其他より移住するもの少からず。二十三年七月特別輸出港となり、八月釧路區裁判所を置かる。此地近海鱈漁に乏しかりしが、明治廿一二年の頃より發達して、二十五年頃より其産出を高め、此地の富源を増せり。二十九年以後、釧路國內部の原野區劃地を貸附し、舌辛原野其他各地に富山縣人福島縣人等の移住あり、三十年釧路聯隊司令部を設け、三十一年函館根室間の定期航海船は、必らず此地に寄港する事となり、愈々隆盛を加ふると同時に、北海道縦貫鐵道第一期線中十勝釧路線は此地を起點とする事、世人の知る處となり、地價暴騰して大に活氣を添へたり。三十二年七月當港を以て開港場となす。三十三年北海道鐵道部出張所を置き、鐵道敷設に着手すれば、人烟愈々増加し、七月一級町村制を施行せられたり。此地の近在テンナルに、前田正名氏の企畫にかゝる前田製紙會社、阿寒太に宮本木挽所あり。釧路町の事業には、釧路川水面埋立工事あり。今や人口殆んど一万

に達し、古來本道東部第一の都會と稱せられたる根室町を凌駕せり。他日鐵道東西に通じ、且つ内部の原野偏く開拓せらるゝに至らば、此地の繁榮想ふべし。

福山町

福山は函館を距る陸路二十五里、いにしへの所謂「蝦夷松前」の地なり。函館より毎日午前八時出帆の汽船ありて、僅かに六十錢を投すれば、四時間にして達すべし。旅宿に上野屋あり。此地本道に於て最も多くの歴史を有するにもかゝらず、港狭くして巨船の碇泊に便ならざると、傍に函館の良港あると、物産の多からざるとを以て、今や漸く衰微しつつあり。然れども「蝦夷松前」の如何なる地なりしかを知らんと欲せば、兩三日の間を偷みて遊ばざるべからず。單に遊覽の目的を以て、敢て之れを「福山の視察」とは云はざるなり。

昔時久しく本道の要鎮として、世に知られたる松前城址今尚ほ在り、天守閣及大手の樓門は、依然として存し、本丸の一部は松前小學校の敷地として、宏大なる校舍を建てられ、啾唔の聲絶えず。其一半を公園となし、松前氏の祖武田信廣を祭りし松前神社及

敷多の名木あり。中にも「風舞松」「七色櫻」「天狗腰掛松」「かまくら石」「臥龍梅」等最も見るべし。此地古き歴史を有するを以て、多く由緒ある寺院を存す。

其他の遊覽地

函館より千島に赴くが如き、壯なる旅行なるべけれど、かくの如きは専門の學藝に資せんとする者の外には、勞して益なかる可く、小樽より宗谷、稚内沿岸に遊ぶが如きは、鯨漁業の盛時(四五月の交)にありてこそ其効あれ、平時には思ひし程の益なからむ。いにしへ鯨漁の盛んなるを以て知られたる江差の地、亦た特に日子と旅費とを失ふて遊ぶ程の必要はあらざるべく、根室の地は釧路町に凌駕され居る程なれば、是亦た遊歴するも格別得る處はなかる可し。實に北海道は、四國九州を合したるものより尙多くの面積を有するも、内部は未だ人跡なき處なれば、林業、礦業等に關係ある人を除きては、之を跋渉するも勞のみ多くして得る處は少からむ。されば函館、札幌、小樽及び其附近に遊びて北海道の如何なるものかを觀察し、以上の土地風俗の一斑を觀ば、之れを以て北海道の旅行を了りたりと云ふを得可し。

中央鐵道線附近

舊時江戸と京都間の往還には、東海道及中仙道の二線あり。東海道は品川より駿府、濱松、宮、桑名を経て京都まで、五十三驛百二十五里二十四町、中仙道は板橋より高崎、輕井澤、諏訪、を経て、木曾より大垣を過ぎ、京都まで六十九驛、百三十五里二十二町なりき。兩道とも東西の往來織るが如くなりし所、近年東海道鐵道通じ、東西の旅客は皆な之に依るに及び、中仙道は忽ち寂びて、國道の路上に行人稀に、宿驛の街頭荒艸の生ずるに至りぬ。然とも東西二京の往來、固より東海道鐵道の一線を以て永く満足するを得べからず。一朝事變ありて、鐵道の通せざる毎に、旅客貨物は忽ち運搬を止め、公衆の不便言ふ可らざるものあり。故に政府も遂に本州の中部を縦貫する鐵道の必要を感じ、中仙道鐵道の敷設は、曾て東海道鐵道に先んじて着手せられ、東京より高崎までの日本鐵道線に接続し、高崎横川間を敷設したりしも、碓氷の天險に阻まれ、轉じて東海道を敷設したりしが、既に東海道線、信越線、及北陸道線の畧び成功するに及び、また中央線敷設の必要を感じ、終に東京より八王子まで敷設したる甲武鐵道線に接続して、

二六新報

年 中 無 休

○天道を啓き人間を度す是れ吾二六新報の本領也
 されば時あつて満天下を敵として戦ふを辭せざるを同時に恒に慈撫するを忘れず。天下皆な睡るの時突如急要の問題を捕へ來て之を論評し、若くば人心漸く倦むの時遽然平地に點火して時代を廓清す。是れ吾二六新の事に非ずや

○吾二六新報は現に日々一版、二版、三版、四版、五版までも刷出し尙進んで日々六版、七版、八版、九版、十版急に應じて最新の出來事を報道し各地方面の讀者に最も忠實勉強なり

○發行紙數十五万を超へ、東京大阪の諸新聞を壓倒して、獨り高一ヶ月 金十五錢 廣告料(五號活字)一六十錢(十九字詰)行

理學士 山崎直方先生 共編 第壹卷九月中發行
理學士 佐藤傳藏先生

大日本地誌

全部十卷 約六千頁

- 第一卷 ▲關東 第五卷 ▲北陸 第九卷 ▲北海道
- 第二卷 ▲奥羽 第六卷 ▲中國 第十卷 ▲琉球
- 第三卷 ▲中部 第七卷 ▲四國 及臺灣
- 第四卷 ▲近畿 第八卷 ▲九州 (以上順次發行)

地形地勢 各地方に於ける地形の大勢を説き、山系、水系、海洋、港灣の形勢を明かにし、氣象の梗概を明快に記述し、自然地理の形勢をして一目瞭然に來り迫るの思ひあらしめんことを期す。

沿革 各地方に於ける歴史上の事蹟を地理的に描寫し、殊に古今の盛衰興亡に就きて多大の苦心を費せり、されば此沿革を以て、地圖と相對照せば、英雄豪傑龍圖虎戰の野も都邑市鎮遷盛衰の理も忽ちにしてこれを了解し得べし。

行政司法 行政區劃に於ては中央政府と地方政治との關係を明かにし、司法區劃に於ては、その管轄區域の詳細を記す。其他地方廳、裁判所所在地等勉めて洩すことなし。

軍事教育 海軍に於ては鎮守府の位地及管區權能、組織、役員等を始めとして軍艦の所屬、造船所の内部分等々詳しくこれを説き、陸軍に於ては、師團の分布、師團の區劃、及各師團の特色等を詳説し、地理的觀察を用ゐて、或はこれを綜合し、或はこれを解剖し、一々批評を附し、詳密丁寧を極む。

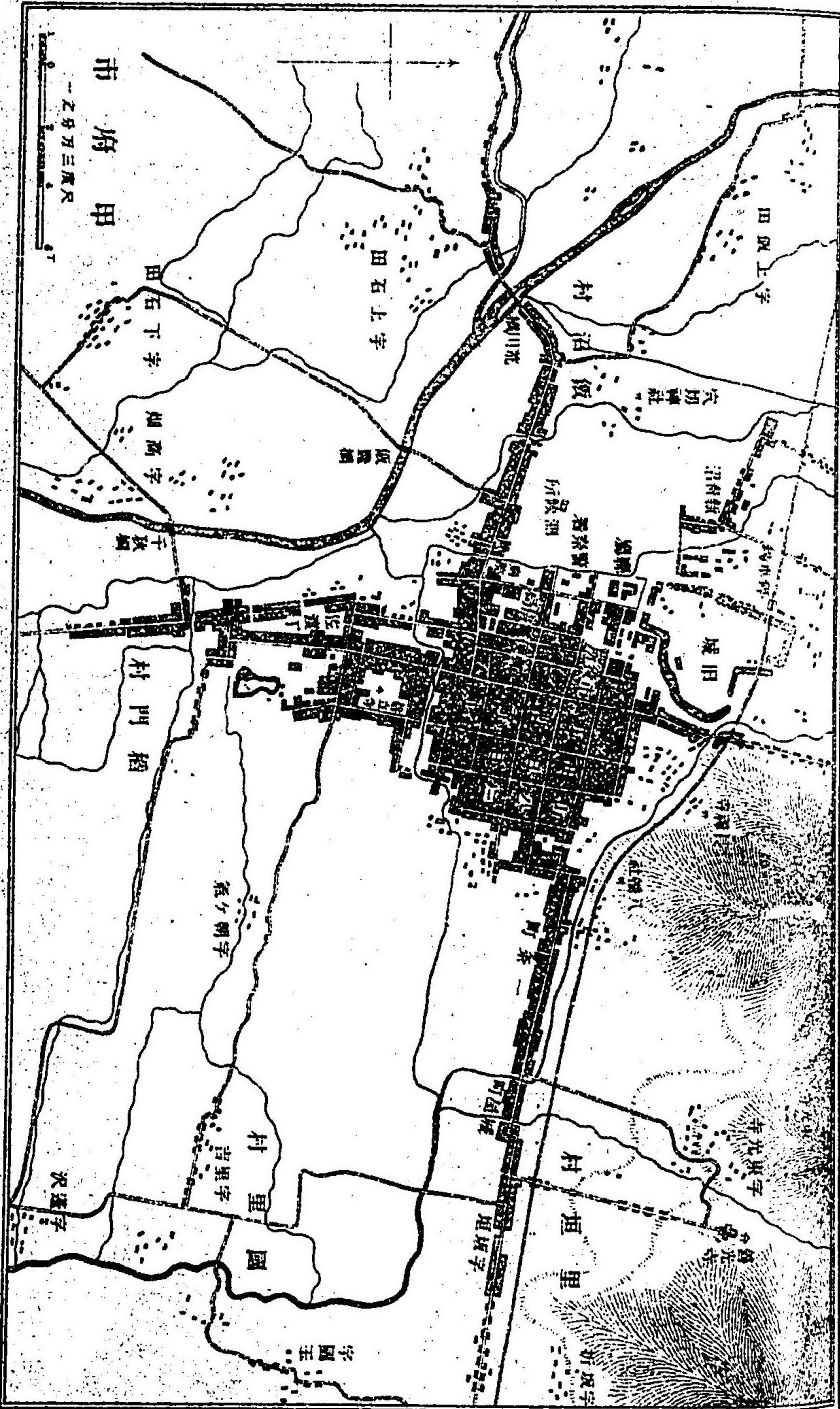
産業 農業、工業、商業、礦業、林業、水産の六部に分類し、農業には米穀、養蠶、牧畜等の現今の景況より其歴史に及び、地理的分布を詳述し、工業には製糸、織物、陶器、漆器、銅器等の産地、沿革、製造の狀況等を記述し、商業には銀行、取引所より内國商業外國輸出の一盛一衰する有様及其理由、礦業には各地方鑛山の分布、林業には國有、民有の區別、植物の種類及産額等、水産には各地方特色ある漁業、遠洋漁業等を記述的に叙し、一として洩らす處無からん事を期す。

交通 各地方に於ける鐵道、汽船を始め、電信、電話、郵便、道路に至るまで、細大洩すなく、本邦交通機關の要は、この中にあり。

地方誌 都府を中心にして、其附近の名勝、古蹟、神社、佛閣等を記し、其他の地理的形勢に就き、最も其精を極めたり。殊に材料は皆最新にして最精確なるものを選びたれば、一面最良の地誌なると共に、また旅客の爲に好案内記たらんことを期す。

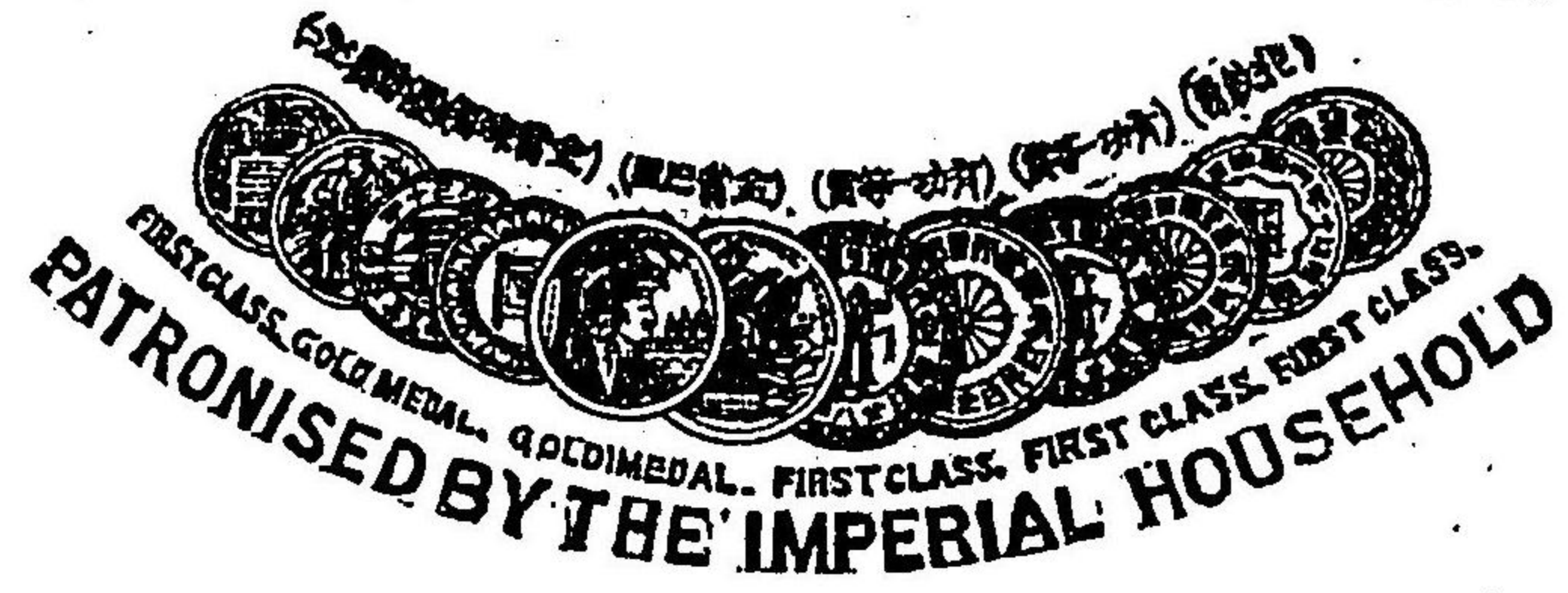
本町三丁目 日本圖書館

發兌元 東京日本橋區



第十四圖

受拜牌銀等一會覽博業勸國內回五第
領亮牌金會覽博大亞細亞イノハ領佛



● 達用御省内宮 ●

帝國醫科大學御用

甲斐產商店

● 發賣元

東京市日本橋區通旅籠町

● 店商產斐甲

議論愕々

島田 三郎 主筆

趣味清新

毎日新聞

一部定價壹錢五厘
一ヶ月定價卅五錢
廣告料一回卅五錢

場合の如何なるを問はず、一葉の毎日新聞を把つて、熟讀措かざるの人に逢着するとせよ、其人の敬すべく、愛すべく、親むべく、冒すべからざるを見む、花を愛する人の那邊となく一種の雅韻を含める夫れの如く、毎日新聞を愛讀する人は、正義を愛し、天を畏れ、人道を護り、少くも不善を憎惡するの勇者たるを表示さる可き也

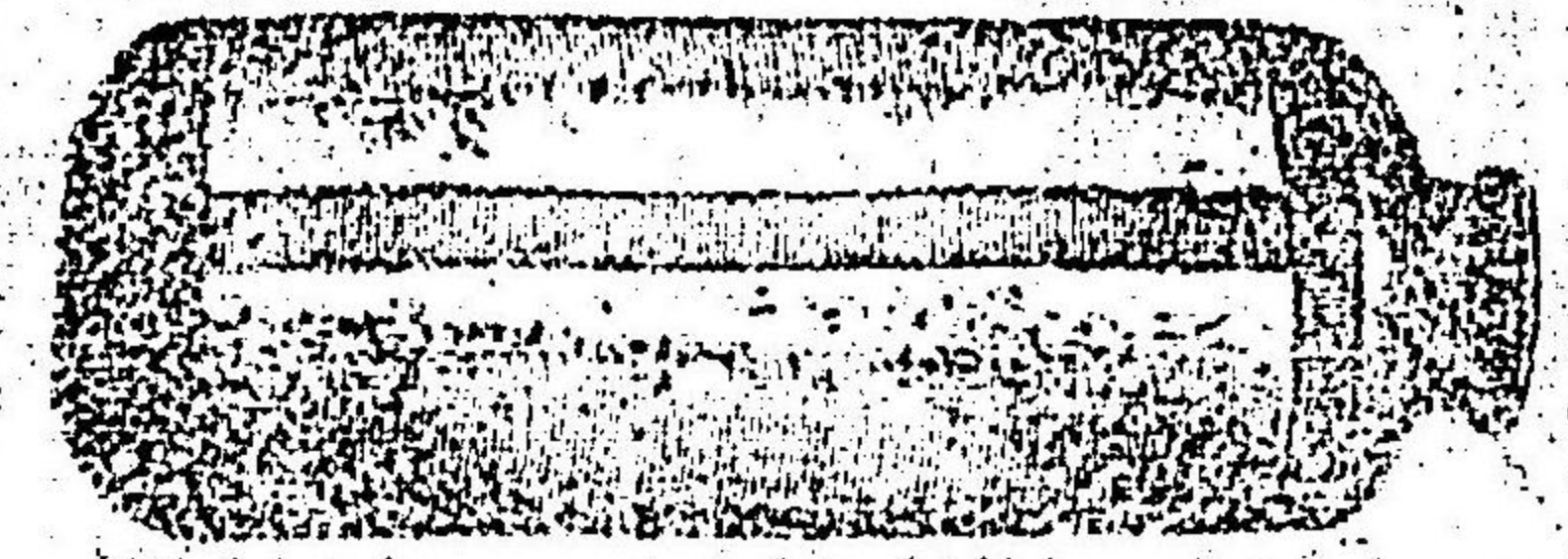
色刷日清韓三國全圖 (正價) 滿州問題解決の好資料は、毎

中込の諸君に限り、(地方は郵税共壹圓廿錢) 無代價を以て贈呈すべし、乞ふ愛讀を賜へ

但地圖のみを望まるゝ方は正價卅錢と郵税貳錢を添へて中込みあれ

東京市京橋區尾張町新地七番地

發行所 毎日新聞社



新形護謨製氷枕

用法

此の枕は全部最良のゴムにて製し、中に冷水を満たし白木綿を蔽ふて用ひ、頭腦を冷やすを目的とす、平生腦を病む人または腦を勞する人には最も必要なり

効能

此枕は肌に觸れて甚だ柔かなれば久しく用ゐるも耳邊または頭部を麻痺せしむる憂なく、また夏時午睡に用ゐ、醒めて後も頭の重き不快無し

利用

此枕は携帯に便にして旅行用に重寶なるのみならず、冬時は其中に蕎麥湯を満たし毛布を以て包むときは、湯タンポの代用となり十五時間餘の溫度を保つことを得

定價

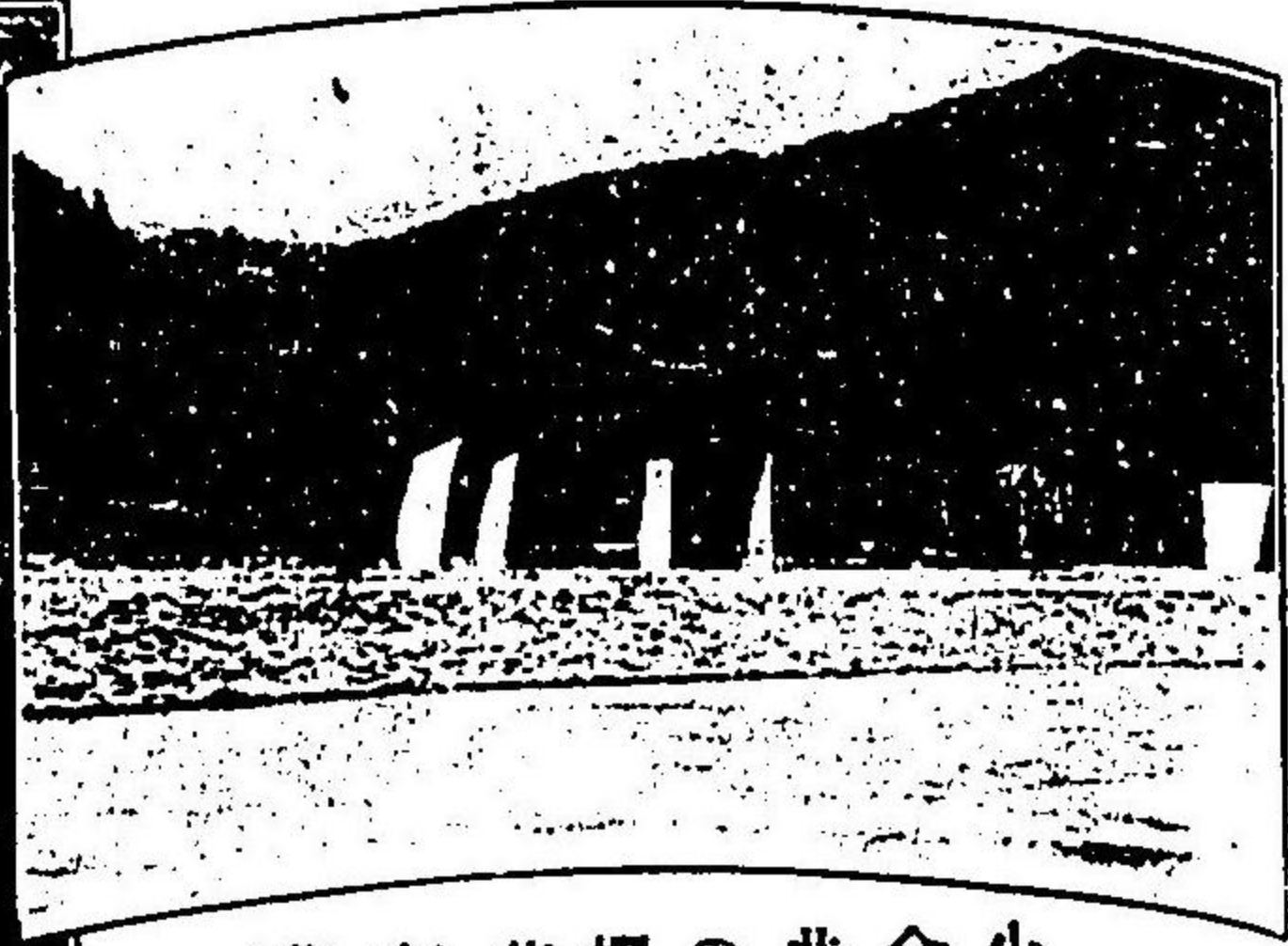
一個金四圓、賣捌所は全國到る所の醫療器械賣捌所にある

東京市京橋區本町三丁目十一番地

合名會社 玉屋商店支店

發賣所

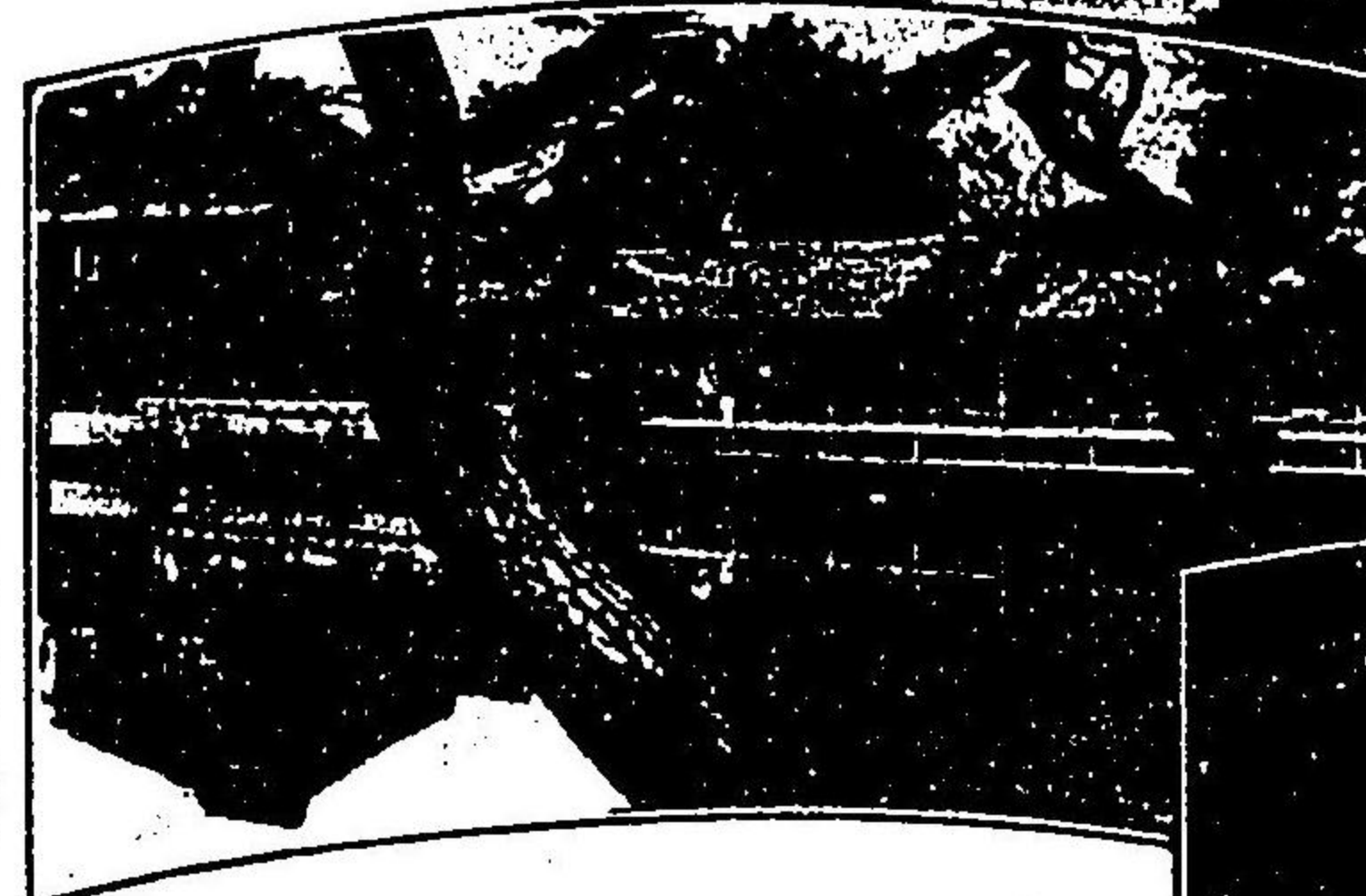
猿橋(甲斐)



(藏武)花櫻の井金小



十二社の池(武藏)



(藏武)流上の川摩多



身延山久遠寺 甲斐

富士川の下流(駿河)

富士川の下流(駿河)

如斯の如

如斯の如

華文回博覽會參賽會牌

白粉

洗粉

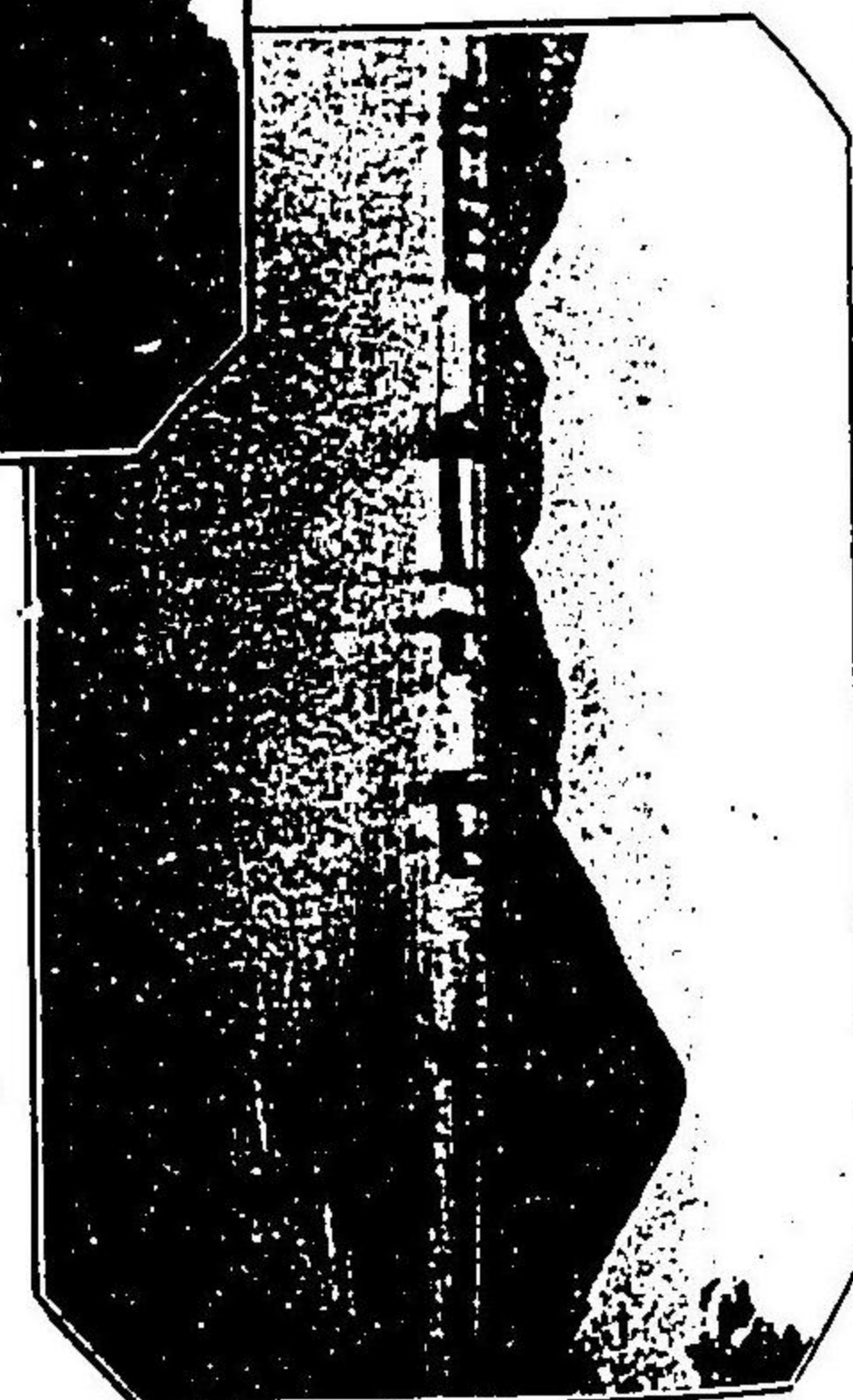
元造製

東京

平賀尾平



島生竹の湖 豊稔
(江 近)



銅鑪の川 瓦長
(濃 美)



橋 六 朝
(驛 飛)



(濃 信) 城 本 松



(濃 信) 近 附 橋 け かの 曾 木

八王子より甲斐に入り、諏訪より木曾に入り、名古屋に至りて東海道線と連絡する中央線と、中央線の鹽尻驛より信越線の篠ノ井驛に接続する篠ノ井線を以て、本州中部にY字形の中央線鐵道を敷設するに決し、篠ノ井線は既に成り、中央線は東西より工事を急ぎつゝあり。故に今は此等中央各線の沿道と、併せて木曾以西の舊中仙道線、及び岐阜より飛驒を経て越中に通ずる線路の沿道を、案内せんと欲す。先づ東京より程を甲州街道に發す可し。

一、甲州街道

新宿附近

東西二京を連絡する官設中央線は、武藏の八王子より起りて甲斐に入るものにて、東京八王子間の私設甲武鐵道沿道は、實に中央東線の咽喉にして、古來甲州街道と稱せられ、關東平野の一部として、名邑勝區甚だ多し。今は先づ此の地方に於る交通機關を擧げば、

日本鐵道山ノ手線

甲武鐵道新宿驛より西は品川に東は赤羽及田端に接続す

甲武鐵道 東京麴町區飯田町より八王子町まで二十七哩
 川越鐵道 甲武鐵道國分寺驛より川越町まで十八哩餘
 青梅鐵道 甲武鐵道立川驛より青梅町まで十三哩
 官設中央鐵道東線 八王子町より小佛、笹子の二嶺を越て甲斐に入る
 の各鐵道あり。而して東京市内の飯田町以西に、連珠の如く接続する甲武鐵道の停車場は、牛込、四谷、信濃町、新宿の各驛何れより乗車するも、八王子行の汽車は毎日八回發車し、新宿までは日々三十二回往來しつゝあり。

内藤新宿 古來甲州街道の第一驛、東海道の品川、中仙道の板橋、奥州街道の千住と共に、江戸市外の四宿と稱せられ、市内の要部に櫓を列ねる遊廓は、芝居にて名高き鈴木主水を流連せしめたる所、また太宗寺の閻魔は、身の長け一丈六尺の運慶の大作、年々盂蘭盆と正月の賽日には、參詣者堵の如し。新宿停車場より西十四丁の角筈村十二社權現は、境内に周回三四丁の池あり、また四條の瀑布あり。池畔の茶店は、都人士の納涼地たり。(口繪寫真十二社の池參照すべし)

堀内妙法寺 甲武鐵道新宿驛を西に去り中野驛に下れば、南方十七町許の堀内村に

は、日蓮の高弟日朗が、靈木もて彫刻せし日蓮上人の像を本尊とする妙法寺あり。伽藍甚だ壯大なり。尙ほ中野驛の北十三丁許には新井村の藥師あり。俗に子育藥師と稱す。附近には秋季に栗飯を賣る家多し。眞言宗寶仙寺は、中野町青梅街道の右側に在り。

小金井の櫻 境驛よりするも、或は國分寺驛よりするも、半里以内にして、多摩川上水の堤に達す。此堤一里餘に亘り、承應年間常陸櫻川より移植せし櫻樹多く、花時來遊者雲の如し。堤の殆ど中央なる小金井橋の附近眺望尤も佳、酒樓數軒あり。花時には臨時汽車の便あり。又小金井橋西南半里には眺望を以て有名なる貫井辨天あり。小金井に至る途中、吉祥寺驛より下車すれば、四町弱にして井の頭辨天に達すべし。清澄の池は、徳川家康が引て茶の水とせるものにて、世に神田上水の泉源と言ふは是なり。池畔幽邃閑寂として、池中に清泉の沸々たるを見るべし。又此西南一里には深大寺あり。今は荒廢したれども、古は有名なる巨刹にて、其傍に蕎麥を名物とする茶屋あり。

國分寺 同停車場の南十二三町に、舊國分寺の跡あり。今は田圃中に二王門の礎石あるのみなれど、古瓦壘々として尙ほ千年前の像を見るべし。戀々窪は國分寺村に在る凹地なり。此地昔は鎌倉秩父間の街道にして、遊女町ありき。畠山重忠の鎌倉に往來

本日漫遊案内

するや、常に此地にかしり、一遊女を愛しけるが、其讒に遇うて死するや、遊女は悲歎の餘り投身せり。其の池の跡は、乃ち今の凹地なりと傳ふ。
六所明神 國分寺より半里にして府中に達す。此地八王子街道の衝に當り、今尙商家旅宿櫛比す。官幣小社六所明神は、驛の中央に在り。大國魂神社と云ひ、大國魂命を主神とし、外に小野神、小河神、氷川神、杉山神、金鑽神の五社を合祀す。故に六所明神と號す。景行天皇四十一年大國魂命の垂跡にて、例年五月五日を祭日とす。其日は夜間に神輿を假屋に移すの間、驛内一の燈を見ず。此時幾多の淫猥なる罪惡行はるといふものあり。府中の南八幡山には公園あり。六所明神の西南十餘町なる多摩川岸には、正平年間新田北條の戦ひし跡といふ分倍河原あり。
百草園 府中より西南二里二十四町、日野停車場よりは東南一里半にして、一堆の高丘あり。これを百草園とす。昔は慈覺山松達寺なる禪刹ありしが、今は廢院となり、岡は遊覽地に改めらる。眼下には日本六玉川の一たる多摩川の蜿蜒たるを瞰下し、遠く秩父の連山を眺め、其間茫漠たる武藏野の壯觀一眸の中に在り。十國臺、富士見臺、天平丘等は、眼界殊に廣し、丘山八幡神社には、天平時代の作と稱せらるゝ石狗の雨露に

中央鐵道附近

晒されたるあり。丘上には喜樂亭なる酒樓の外に、園主の別荘養生館あり。客の依頼によりて宿泊を諾す。
百草園より日野停車場に至る途中、十五町許の平村には平維盛の古墳あり。其西一町なる高幡村には、大寶以前の創建と稱する不動院あり。寺寶には島山重忠の太刀あり、又徳川氏末年の驍將近藤勇の碑もあり。
多摩川の鮎漁 府中附近及び、拜島、立川、日野、一の宮等、何れも鮎漁の地たれども、東京より行けば、日野又は立川驛にて下車するを便とす。立川にては停車場前の茶店九芝屋にて、鮎狩一切の事を案内し、日野驛にては、全停車場前の茶店東屋にて案内す。鵜飼引網付一組一圓七十五錢、羽網待網付一組二圓七十五錢、笠一組一圓二十五錢、投網一反(漁師付)六十錢、友釣一人五十錢、屋根舟(舟夫付)一艘一圓位を相場とす。また立川驛にては、序をもつて停車場より五六丁なる多摩川岸谷保村の普濟寺を見るべし。百草園と相對して風景甚だ好し。堂後には六角形の古塔あり。又同村には天神社ありて、菅原道實第三子の刻みしといふ道眞の像を安置す。
八王子町 甲武鐵道の終點たる八王子町は、織物業を以て聞へたる商業地にして、

町内到處所に機織る音聞ゆ。各地の商人來集するが故なればにや、妓樓十數軒を列ねて、日夜絃聲盛んなり。旅舎には、角喜、吉田屋、等あり。大善寺は横町に在りて、北條氏照を開基とす。螢の名所なる子易明神は、停車場の北隣に在り。八王子城趾は、町の西一里元八王子村に在り。北條氏照の築きし所にて、天正十八年前田上杉兩氏の爲に陥落したれとも、今尙石壘を存す。近傍には瀧澤山、竹林山、月ヶ峰の諸山ありて、夏は青葉の陰涼しく、秋は紅葉の色深し。

高 雄 山

八王子より西二里半淺川村に在り。八王子城趾を見て行くも可なり。或は亦官設中央線淺川驛にて下車するも可也。山麓の高雄橋より頂上迄卅餘町也。頂上には天正十六年行基の開基せる藥王院ありて、結構莊嚴なり。山上古杉茂つて晝尙ほ暗く、秋は紅葉の美觀あり。寺院は宿泊を許す。頂上より西北に向つて降ると半里にして、琵琶瀧あり。高一丈餘、神經病者を治するの効ありと。また頂上より東北に降ること十二三丁にして蛇瀧あり。昔日某の聖が大蛇を救ひしかば、大蛇御禮にとて造れるものなりとか。又山中には佛法僧と鳴く幽鳥あれど、信心薄き者には其聲聞えずといひ傳ふ。淺川村より與瀧驛を過れば、小佛嶺にして、之を過れば瀧車暫く相模を経て甲斐に入る。

青 梅 町 附 近

青梅に至らむには、甲武鐵道立川驛より、青梅鐵道に乗り換ふべし。其途中名所として知られたるは多摩の風景に富む拜島の大日堂あり。また拜島驛より半里餘なる瀧山城趾は南多摩郡加住村に在りて、北條氏照の城址也。廣豁なる風景を以て名あり。羽村驛附近には、數丁の近き距離に羽村堰あり。往時徳川家綱が渠を穿つて多摩川の水を江戸市中に導きし所にて、今は東京市水道も水源を此所より引くなり。

青 梅 町

西多摩郡役所々在地にして、昔より青梅綿の産地として名高し。町内の金剛寺は、平將門が草創に係り、境内の誓の梅の實は、常に青色を帯び、熟することなきが故に、町の名を生じたりと。青梅停車場前の高丘は、金刀比羅山と稱し、仰いて富士、御嶽の兩山を望み、俯して多摩川の清流を眺め、風景また愛すべし。青梅鐵道は、青梅町より西方一里許の日向和田驛まで通ず。其所にて汽車を下れば、一里許の上流に二俣

尾の桃林あり。花時は遠く望めば一抹の紅霞を棚曳かす。また日向和田より多摩川を渡れば對岸の吉野村は、全村概ね梅林にて、花時は恰かも銀世界に入るの思ひあり。梅林

間、多く福壽艸を養ひ、新年東京に發賣するもの多く此所より出すといふ。
御嶽神社 日向和田驛以西多摩川の水源地に沿うて西に進めば、二俣尾、三田、柳澤、氷川、小河内等の村落を經、甲斐の北都留郡に入り、柳澤峠を越て甲府に達する道路あり。青梅甲府間の往來は之に由る。甲斐の人は青梅街道と稱す。日向和田より多摩川の北岸に沿ひ、西行二里餘にして万年橋に達す。此所にて青梅街道と岐れ、橋を渡りて拂子澤を過ぎ、御嶽山に登れば、頂上まで阪路三十丁にして御嶽祠あり。崇神天皇七年の鎮座といふ。大貴已命、少名彥名命を祭り、本社拜殿ともに建築甚だ壯麗なり。地は海面を抜くこと三千八百尺、山中清涼にして盛夏の候も暑熱を知らず。山麓二の華表の傍にある禊の瀧を首とし、附近には、七代の瀧、綾尾の瀧、おぼん岩、圓山、日の出岩、那具雄峯、等の奇勝あり。また社前には舊御師の家二十餘戸ありて、御嶽講社員の紹介あれば、旅人の宿泊に應ず。日向和田より万年橋までは、人力車を利用するを得。また専ら御嶽祠に參詣して、再び青梅町に歸るには、往復同一路によるも面白からねば、歸路には新道を下り、多摩川の南岸に沿ひ、梅林多き吉野村、日影和田、畑中の諸村を經て、調布村の字駒木野にて多摩川を渡れば、御嶽祠より三里にして青梅町に達す。此邊り多

摩川の清流は、紺碧にして瑠璃の如く、積砂は珠よりも鮮かに、兩岸所々斷崖聳へ、巨巖の磊鬼として横はる所、急湍之に觸るときは、激して雪を飛ばし、遠く望めば川は恰も一匹の友禪縮緬を展げたるが如し。(口繪寫眞多摩川上流の圖參照すべし)
日原の鐘乳洞 日向和田以西、多摩川の北岸を甲州街道に沿ふて氷川村まで溯り、右折して日原川に沿ひ、山間に入れば日原村に有名なる鐘乳洞あり。地下に巨洞ありて其内に下るに、昇降屈曲して底止する所を知らず。古來未だ人の其の奥を窮めたる者無しといふ。日向和田より鐘乳洞まで十一里、途中氷川までは人力車を通ず。
小河内の鑛泉 日原より氷川まで歸りて、再び甲州街道に出で、西行一里餘にして小河内村の鑛泉あり。此地往時は甚だ賑はひ、遊女町さへありし所と聞くも、今は衰退して寂寥たる山間の一村のみ。然とも鑛泉は依然として涌出し、打撲症、金創に特效ありと言ふ。原島某、外一二の旅店あり。
柳澤峠 小河内以西、山岳重疊して阪路甚だ急に、一路羊腸、川に沿ふて進み、川野村を過れば武藏の國境を越え、鴨澤村は既に甲斐の北都留郡なり。之より甲府に至るの間、丹波山村は多摩川の泉源にて、川の名も丹波川と稱し、長流とて、高さ十五丈

の大瀑布あり。此所より柳澤峠の分水嶺を越れば、東山梨郡にて、今まで東に流れる溪流は、今は、忽ち反對に西に流れて富士川に注ぐ。此邊の山間は、甲斐の特産物たる水晶の礦物を産す。峠を下りて神金、大藤の諸村を経て、七里村に至れば、官設中央鐵道は、八王子より笹子の峻嶺を過ぎ來りて、此所に鹽山停車場を設く。鴨澤の國境より此地まで八里餘といふ。是れ普通の甲州街道は、笹子峠を越へ、初鹿野より急轉直下して勝沼町を経て、甲府に通ずるも、初鹿野、勝沼間の勾配急にして、鐵道を通じ難く、故さらば初鹿野より北方に迂廻し、鹽山驛より青梅街道に沿ひ、甲府に達するなり。

郡 内 附 近

八王子以西 八王子にて甲武鐵道を辭し、更に官設中央鐵道に乗り換へ、淺川驛を過れば、小佛峠の隧道あり。之を出れば相模國津久井郡にて、馬入川の上流なる桂川を彼方此方に渡り、與瀬驛を過ぎ、上野原驛は既に甲斐國北都留郡なり。此より西、烏澤、猿橋、大月の諸驛を経て、笹子峠に至るまで、桂川に沿ふ溪間數里の地方と大月驛より谷村町を経て、富士山麓の吉田村に通ずる南都留郡地方とを併せて、郡内と稱し、古來甲

斐絹の特産地にて、郡内綿と名くる甲斐絹は、此の地方の産出する所なり。

猿橋 町は北都留郡役所、警察署、區裁判所等の所在地にて、戸數四百、人口二千、毎月三七の日を以て甲斐絹市場を開き、其の取引甚だ盛んなり。停車場より町まで八丁餘あり。町の中央、警察署の前、桂川の兩岸相迫る所に一橋を架す。長さ十七間、巾三間、橋下一柱なく、巨材を累ねて架け渡し、古來日本三奇橋の一として數へられ、建築の奇巧を以て名あり。橋上より水際まで百五十尺、水深また二十尋を下らずといふ、*
口五千六百、南都留郡役所、警察署、地方裁判所支部、等の所在地にて、毎月二六の日を以て甲斐絹の市場を開く。旅舎に松田屋、太田屋、伏見屋、島屋等あり。谷村より十日市場、下吉田を経て吉田に達す。其間また馬車鐵道あり。吉田は富士の裾野の北口に、此所より絶頂までは約五里なり。



* (口繪寫眞参照す、へし)

富士登山の吉田口 甲斐

方面より富士山に登らんとする者は、大月驛より鐵道馬車

にて二里十五丁を走れば谷村

町に達す。谷村は戸數一千、人

岩殿山 大月停車場の西北に近く桂川を隔て、絶壁數十丈、恰かも桶を立てたるが如き孤峰の上に、舊城址あり。天正中、武田氏の臣小山田備中守此所に居り、武田勝頼織田氏の大軍に攻められ、韭崎の新府城を守る能はず、逃れ來りて此城に入らんとするとき、小山田は俄に叛きて織田氏に降りたれば、勝頼主従は終に天目山の下に自盡して、武田氏全たく亡滅するに至りし所、弔古の客をして、賣國の奸臣國を亡ぼすの事蹟を回顧して、悲憤慷慨禁する能はざらしむる所なり。

笹子峠の大隧道 日本に鐵道あつて以來官私線を通じて第一の難工事たりし所、笹子驛より初鹿野驛の間、一万五千二百七十五呎七の長隧道にて、海拔三千八百七十尺の高さなる山の半腹を、汽車は海拔二千五呎の地點に於て走るなり。八王子甲府間、五十哩三十鎖にして、其の工事は明治二十九年十二月着手し、開通式を擧げたるは三十六年六月十一日にして、其間前後八年の星霜を費やし、一千三百万圓餘の經費を要したり。大小四十二個の隧道ありて、其の延長は六万三千二百二十六呎に上り、三十四の橋梁は、延長四千三百一呎に上る。乃ち全線中の四分の一は、隧道と橋梁とにて満たされ、中にも笹子隧道の費用は二百八十万圓にして、一哩の平均二十五万圓を消費す、以て稀

有の難工事たるを知るべきなり。

田野の景徳院 笹子の大隧道を西に出れば、初鹿野停車場あり。甲州街道は急阪を下りて山麓の勝沼町に通ず。停車場の西北方、田野山、天目山、木賊山、相連なり。天目山の麓、田野村の景徳院は、是れ天正十一年三月十一日武田勝頼主従其臣岩殿の小山田備中に欺かれ、其城に入らんと欲して此地まで來り、忽ち入るを拒まるゝに及び、進退全たく谷まり、勝頼は其夫人北條氏、其子信勝と共に自刃して果て、威を四隣の國々に振ひたりし武田氏も、空しく天目山下の草葉の露と消へて亡びし古戰場にて、傍らに從臣土屋惣藏が、單身巖角に據て寄手の大兵に當り、主君の生害を全ふせしめたる物藏一騎打、一に雷鬮峽と呼ぶ所もあり。寺には勝頼父子と夫人北條氏の影像と殉死の僧二人土二十三人侍婢十六人の靈牌を供へ、寺域内に勝頼主従の墓碑あり、後人物徂徠來り弔ふて曰く、

拔山氣力本無双、何識英雄耻渡江、惆悵項王蹤跡似、誰家父老艤舟蓬、中原雄視驅馳日、此地遽然駭不行、淚落楚歌難得續、山禽猶作舊時鳴

と、實に虞氏を弔ふて垓下に斃れし項羽の末路も、思ひ遣られて、人をして同情の念に堪

江州の佐々木承禎織田信長と戦ひ敗れ、遁れ來りて此寺に入るに及び、信長怒つて寺を燒き、快川國師をも殺ろし、徳川家康は快川の弟子末宗をして本寺を再興せしめ、後に柳澤吉保甲斐に封せられしとき、修理を加ふといふ。寺に武田信玄の墓といふあり。法諡は、惠林寺殿機山信玄大居士といふ。境内には兩袖櫻、横月梅、惠山水、士峯雪、兩股杉、松間反橋、林抄浮圖などいふ勝區あり。

●**笛吹川** 日下部驛の西方に、北より南に流る、清流、源を東山梨郡の北境國司ヶ岳に發し、東西山梨、東西八代、中巨摩の各郡を経て、市川大門町に至り、釜無川、蘆川の二流と合し、富士川と爲る。流域十四里、沿岸に奇勝多く、中にも日下部より西方半里、青梅街道を甲府に行く途中の龜甲橋を渡れば、西岸に差田の磯あり。絶壁峭立し、起て東南を望めば、富岳は高く雲表に聳へ、橋下には清流石を噛み、激して雪を噴く。櫻あり、春は芳雲の隧道を形作り、水に扁舟を棹せば、夏も暑熱の何物たるを知らず。河岸に茶店あり、膳に川魚の潑刺たるを上げて、徐ろに杯を擧るを得。眞に多く得難きの景なり。

●**石和** 甲州街道中、甲府よりの第一驛にて、其距離一里二十二町なり。笛吹川の東

岸にあり。戸數三百、人口二千、東八代郡役所、警察署、稅務署、石和銀行等の在る所。郡中第一の都會、笛吹川は市街の西端を流れ、一橋を架し、甲運橋といふ。川を越れば東山梨郡にて、石和停車場は宿の北方八町に在り。山梨馬車鐵道は、甲府より石和驛を経て勝沼町に達するなり。鵜飼川、一に石和川といふは、宿の東方を北より南に流る。是れ謠曲の「鵜飼」に「つるの郡の朝言も、日たけてこゆる山道を、すきて石和に着にけり(中略)抑此いさわ河と申すは、上下三里が間は、堅く殺生禁斷の處なり」とある古蹟にして、鵜飼を以て鮎を捕る者あり。日蓮上人が鵜飼の漁夫勘助なる者の幽魂を濟度せし所と稱せらる。

●**酒折宮の古蹟** 石和より汽車にて西に走れば、將に甲府に達せんとする邊り宇酒折に日本武尊の行在の古蹟を望み見るべし。史に稱す、景行天皇四十年東夷反す、皇子日本武尊之を征し、東北諸國を経て常陸より甲斐に入り、驛を酒折に駐む。一夕食に方り、尊、歌もて、「新治筑波をすきて幾夜か寝つる」と問ひ給ふも、侍臣皆な答ふる能はず、獨り燭を乘る者其の尾を繼ぎて曰く、「かどなへて夜には九夜、日には十日を」と、尊大に之を賞し給ふ。是れ我朝連歌の鼻祖なり。此時尊は酒折に官府を置き、大伴武日に朝

部(今の東山梨無岡部村)の地を賜ひて國を治めしむ云々。此地甲府の東二十五丁にあり。丘陵の上に小社あり、尊を祭り、老松之を護す。境内幽静閑雅なり。加茂季鷹の酒折宮を咏める歌に、『千万の東の夷むけまし、神のみいづをあふかざらめや』といふは此地なり。

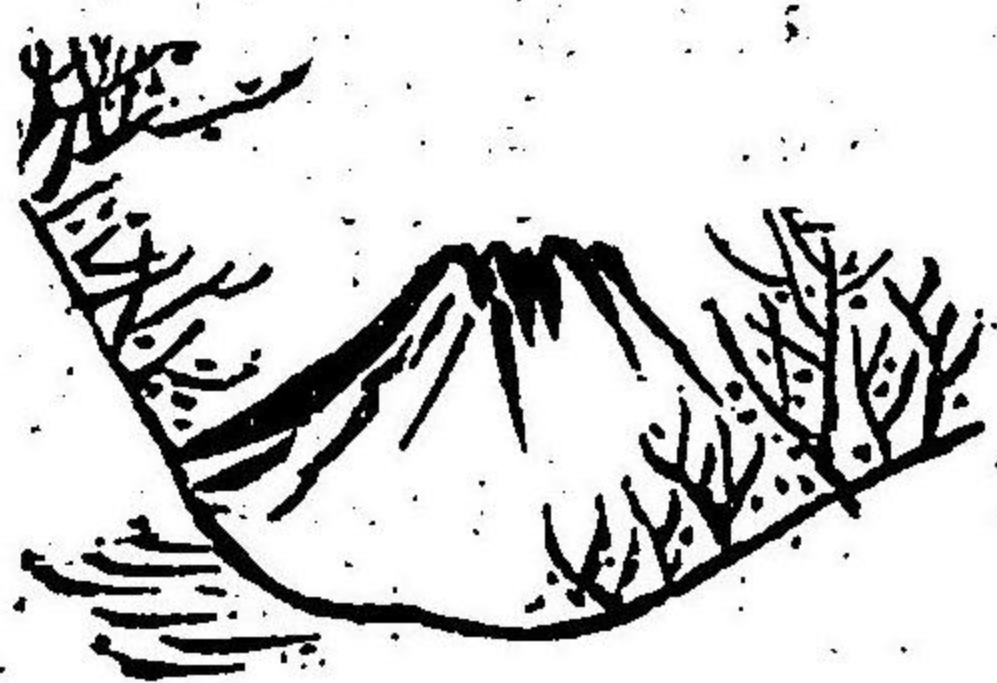
甲府市 汽車石和驛を發して西に走り、右に酒折宮と善光寺の巨刹とを眺めて過れば、忽ちにして城壕高く聳へて上に喬松の空を凌ぐ所に至りて進行を停む。此れ甲府停車場にして、他の都市にて敷せば見る停車場の、市街を距ること遠きと異りて、此所は市街の中央に在り。下車して出れば、停車場の前に笹子隧道開通記念碑を立つ。右に監獄署を見て行くこと二丁、山梨縣廳、縣會議事堂、地方裁判所、警察署、稅務署、縣立病院、師範學校等、相並んで錦町に在り。戸數八千五百、人口約四方、街衢壯麗にして夜間は電氣燈輝き、西に荒川の清流を控へ、東南西の三方は甲州の平野なり。市内最も繁華なる地を柳町、八日町と爲し、また銀行會社には、甲府商業銀行、綠銀行、大森銀行、富士井銀行、四品取引所、山梨馬車鐵道會社、電力會社等あり。また各町所々に烟突の聳ゆるは皆な製絲場にて、各工場を通じ、日々に一万余の工女を役す。故に物

産は生糸、絹織物を最とし、葡萄、葡萄酒、水晶等之に次ぐ。商工業此の如く盛んなれば、日刊新聞紙も數多く、山梨日々新聞、嶽中日報、山梨民報、甲斐新聞、山梨時報等あり。旅館は柳町の佐渡幸、同町の米倉など巨擘にて、料理店は、望仙閣を領袖とす。藝妓屋は、若松町に軒を列ね、遊廓は市の北方新柳町に別世界を爲せり。

此地文祿三年淺野長政の甲斐に封せられしとき、始めて城を築きて居り、其前武田信玄の居城たりし北方一里を隔つる古府の居民を移して新たに市街を興して以來、漸やく國中商業の中心と爲り、寛永二年柳澤吉保甲斐守に任せられて來り治するに及び、大に市區を改正し、儒臣物徂徠を聘して商工業を奨勵したるより、山間の小國ながら、全國の産業盛にして、其首府たる甲府は益々隆盛を加へ、柳澤氏の封を大和の郡山に移されし後は、幕府の直轄に屬し、城代を任用して之を治め、明治維新の後、山梨縣を置き、甲斐一國を管轄す。全市街は錦町外三十六ヶ町と總稱せられしも、明治二十二年市制を施かるゝに及び、附近の村落を加へて市街の數を増せり。(甲府市地圖參照すべし)

甲府よりの交通 此地を中心とする四方の要路は數多あり。
一東京街道(普通に甲州街道といふ) 石和、勝沼、猿橋、上野原、八王子を経て東京

まで三十五里二十七町、
 二信州街道 韭崎、臺ヶ原を過ぎて信州諏訪に至る、臺ヶ原まで八里十二町、
 三鎌倉街道 石和、黒駒、河口、吉田を経て駿河の須走より御殿場に至る、吉田まで
 十里四町、
 四駿河街道 鵜澤、切石、南
 部を経て駿河の興津に至る
 南部まで十四里四町、
 以上を四大要路と爲し、外に
 日下部、丹波山を経て武藏の青
 梅町に通ずる青梅街道、韭崎、
 若神子を経て信州佐久郡に通ずる*
 矢の如き急流を下りて駿河の岩淵町に出て、東海道汽車にて東京に赴き、歸途は八王子
 より笹子峠を越へ、甲州街道を甲府に達するを順路とせしも、今は往復とも汽車にて各
 半日にて達するを得るに至り、甲府の繁昌は益々す加はらんとす。また山梨馬車鐵道會
 社にて、富士川の川舟に乗り、
 東京との往來は、甲府より鵜澤
 に出て、富士川の川舟に乗り、
 六線は縣道たり。而して從來笹
 子峠の汽車通せざる間、甲府と
 東京との往來は、甲府より鵜澤
 に出て、富士川の川舟に乗り、
 達する沼津街道の三線あり。此
 の中東京街道は國道にて、他の



社は、甲府より東は勝沼まで、南は鵜澤まで、延長二十二哩の馬車鐵道を有し、日々勝
 沼へは四十餘回、鵜澤へは三十餘回往復し、以て交通の便に供するあり。
 舊城址 一に舞鶴城と稱し、文祿三年淺野長政の此國に封せられしとき築き、城壁
 略ぼ成るに及び、淺野氏は他に轉じて徳川氏の領有と爲り、寶永二年柳澤吉保封せられ
 て土木全く成る。柳澤氏の封を移すに及び、再び幕府の直轄と爲り、享保十二年祝融の
 災に罹り、僅に米廩、兵器庫、墨壁樓櫓を存せしのみ。それすら維新後は之を毀ち、今
 は一半を中學校と爲し、一半は停車場と爲れり。然とも殘壕猶ほ存して、壁上の番松は
 舊に依て綠なり。
 武田信玄の墓 甲府市の北方十餘丁、相川村の万年山大泉寺の背後、宇岩窪に在り。
 大泉寺は曹洞宗にして大永元年武田信虎の創建、天桂禪師の開山なり。墓は田圃の中に
 石柵を繞らし、中央に高一丈一尺の碑を建つ、碑面に「法性院機山信玄之墓」と勒す。別
 に古碑あり。高さ二尺四寸、面に法性院殿機山信玄大居士神儀天正元年癸酉四月十二日
 病死矣三年間隱密云々の文字を刻す。鹽山の惠林寺に在る信玄の墓と、何れか正しき
 を知る能はず。傳へ云ふ、信玄元龜四年四月三河國野田城外の陣中に死す、從臣死を

秘し、竊に遺骸を此地に送り火葬にして此に埋む。嗚呼、峽中の小天地、信玄の偉器を容るゝに足らず、出て四方を征し、南は遠州に徳川を惱まし、東は相模に北條を苦め、北は信濃に上杉と雄を争ひ、終に西に出て、織田氏を斃さんと欲し、野田城外、將星墜ち、盛儀を以て英魂を葬むる能はず、空しく此田圃の中に埋められ、子孫不肖乃父の業を守らず、久しからずして天目山下に滅す、今は唯だ山空しく翠に、水空しく流るゝを見るのみ。悲むべき哉。

武田の舊城址

大泉寺より更に北方に田圃中の道を行くこと十町許にして同村字古

府に在り。永正年中信玄の父信虎、石和の館を此所に移して新たに築き、信玄の子、勝頼に至るまで、武田氏三代の居城、今も猶ほ城濠の跡を存す。此地元と躑躅ヶ崎と稱し、平野の間に濠を繞らし、其の土を以て城と爲せしと覺しく、疆域は東西約百六十間、南北約百十間、城西に竹林あり、夫人及衆姫の居室にて、郭外、四周の田圃は、諸將士の邸宅なりしといふ。一見甚だ狭少にして要害の設備極めて疎なり。然とも信玄は能く此城に在て兵を出し、向ふ所敵無く、また敵をして其の境に近つかしめず。信玄死するに及び、勝頼は城の要害無きを憂へ、天正九年新たに韭崎に築き、工事未だ半ばにして其

十月移り住み、時人之を新府と稱す。翌年三月織田徳川の大軍に攻められ、城を棄て、東に走り、終に一門皆な天目山に死す。兵の強弱は人に在て器にあらざるなり。加茂季鷹の來り弔へる歌に

石ずゑの跡たに草に埋れて空しくそよく秋の夕風
人をして今昔の感に堪へざらしむ。

御嶽の探勝

甲州第一の勝區を求むれば、御嶽の昇仙峽に勝るは無し。此地普ねく人に知らるゝに至れば、豊の耶馬溪はまた其名を織にする能はざるなり。其地は甲府より中巨摩郡宮本村の御嶽に通ずる間道にして、風景の絶佳なるは、西山梨郡能泉村に屬する荒川の沿岸二里の間にあり。甲府より武田古城趾の側を過ぎ、一里許にして北相川村和田に到り、老松の鬱蒼たる和田峠を登ること十町許りにして東南を顧みれば、甲府市街、笛吹川、皆な脚下に在り。天霽れば富士山は、前面の天半に屹立するを望むべし。峠を越て丸山村に出で、北行一里許にして荒川の岸に出づ。路傍に天神の石龕あるを以て、天神平と

稱す。昇仙峽の絶勝は、此所より荒川の沿岸約一里半猪狩村までの間に在り。唯だ見る山これ巖、巖これ山なる數十峰、相連りて二重の屏風を立てたるが如き間に、一道の荒川は白龍を躍らす。巖は花崗岩にて、龜裂したる間より、松は雜樹とも生ひて、巖に一層の風趣を添ふ。かゝる岩の峰、一つ送れば一つ迎へ、目幾ど應接に違あらず。溪流の瀬と爲り淵と爲り急湍となる間に、巨石磊砢、形状百出し、其の形似を以て名け、猿に似たる猿岩、富士に似たる富士岩、蟻に似たる蟻石など、幾多の石を眺めて過れば、石碑あり、天保年間此の路を開きたる農夫孫右衛門の像と林鶴梁の贊とを刻す。また少しく行けば、山壁の巖、倒れむとして倒れず、一巖支へむとして支へず、巖と巖との間、少許の隙ありて、自ら洞門を爲す。溪間、磨崖碑の下、飛瀑あり。雪虹瀑といふ。その傍に白色の石横はり、浮石と稱す。數十間歩して昇仙橋上に立ち、顧みれば右には奇形なる覺圓峰、天を刺し、左には遮雨岩之と相對す。恰も二大漢の將に闘はんとして肩を怒らすが如し。之を中心として前後左右、巖これ山なる奇峰、擦繞重疊して二大漢の闘を環視するに似たり。此の邊り昇仙峽中最も奇峭雄偉を極むる所と爲す。橋を渡りて行くこと數十間、仙娥瀧あり、溪身絶束せられて幅延約二間高さ十丈許の懸崖を奔走

す、また峽中の偉觀なり。瀑の側なる巨巖を切りぬき、洞門と爲せる所を過れば、猪狩村にて、流れも山も平凡と爲り、仙裳を出て、また人界に入るの感を爲す。行くこと半里にして一簇の人家あるを宮本村と稱し、祠あり、之を御嶽の金櫻神社と爲す。殿宇壯麗、中にも神樂殿最も精巧を極む。境内老杉多く、遠く富岳を望み、門前に旅舎數戸あり。蕎麥を名物とす。此所より金風山を登ること五里二十町にして絶頂にまた金櫻神社あり、山宮また本宮とも云ふ。然れども普通の御嶽山參詣者は此所より還る。金櫻神社より甲府までの歸路は、御嶽山道及御嶽澤道の二線あり、兩道ともに行程約五里、下り坂のみなれば道は甚だ容易く、沿道また奇勝多し。

身 延 山 參 詣

日蓮宗の總本山身延山久遠寺は、甲斐に在ては武田信玄と富士山を併せて、三絶とする勝區なり。獨り甲州人のみならず、同宗信徒は全國より數百里を遠しとせずして參詣する所、今其地に赴くには、甲府より往くを順路とす。甲府より身延までの中間御嶽澤までは道路に二線あり、一は甲府の西南端なる荒川の千秋橋を渡り、中巨摩郡小井川村

を過ぎ、釜無川に架する淺原の長橋を渡りて川の西方に沿ひ、藤田、南湖の兩村を經、南巨摩郡増穂村の青柳宿に至り、駿河街道に出て、鵜澤に通ずるなり。他の一は、小井川より分れて、花輪、忍の緒村を過ぎ、笛吹川の桃林橋を渡り、西八代郡の上野に出て、蘆川を超て市川大門町に至り、釜無川と笛吹川の合して富士川を爲せるに架する青柳橋を渡りて青柳宿に出て、鵜澤に達するなり。二線路は、畢竟小井戸より青柳までの間、釜無川の東岸と西岸との別のみ。而して甲府より鵜澤まで四里二十一丁の間は馬車鐵道通じ、一日三十餘回の往來あれば、交通甚だ便なり。市川大門町を經るは、馬車鐵道線に比して十數町を迂廻するものとす。

市川大門町 西八代郡役所の在る所、釜無川は此所に至りて笛吹川と蘆川と合し、富士川と爲るの東岸にあり。甲府まで三里廿四町、鵜澤まで一里十二丁にして、戸數一千百、人口五千五百餘の小都會、古來糊入紙の産地にて、また峽中の一都會なり。

鵜澤町 富士川の西岸に在りて、南巨摩郡役所の在る所、北は甲府まで馬車鐵道通じ、南は身延を經て駿河の岩淵町まで川舟の便あり。戸數九百三十、人口五千餘、警察署、郵便電信局、區裁判所、稅務署等の諸官衙備はり、且つ此所より發する川舟は、笹

子の鐵道通せざる前は、峽中より東京へ赴く唯一の交通機關にて、貨物旅客とも概ね此所に集まり、旅舎には萬屋、粉奈屋、富水館等ありて、峽南第一の都會なりき。今は鐵道開通の爲に繁昌を減ずるも、身延山參詣の徒は、概ね此地を通過す。

富士川の舟路 鵜澤より身延へ赴き、身延より駿河の岩淵へ出るに、富士川の川舟は最も必要なる交通機關なり。川は巨摩、山梨、八代の各郡より流下する諸水を湊合する幹川にて、市川の北に於て釜無川、笛吹川、蘆川の三河流を合せ、始めて富士川と稱す。鵜澤に至りて川舟を發し、下ること三里にして下山に至り、更に早川を合せて益ます大と爲り、紆餘曲折して甲斐の南端に南巨摩郡の國境を越へ、駿河の庵原郡岩淵に至りて駿河灣に注ぐ。鵜澤より岩淵まで十八里間、舟行僅に、八時間にて達すべし。川は日本三急流の一と稱せられ、其の流に遡るには、十八里間四五日を費やすこと常なり。此の舟路は、慶長十一年中京都の入角倉了以が、幕府の命により、危礁を除き、險岩を掃ひ、數年を費やして始めて舟楫の便を開きたるも、鵜澤の河底は海を抜くこと七百六十八尺の高さにあれば、流は矢よりも急なり。八日市場を過ぎ、身延山の麓を走れば、千尺の峻崖鬼斧もて割れるに似たる屏風岩の奇勝を賞し、波木井に至りて身延山の參詣

者は舟を辭す。寺は此所より半里なり。舟は更に下れば、大河内村に近き所に藪ヶ瀧といふ早瀬あり。川幅極めて狭ま、斷崖右岸より斗出し、水流俄に方位を轉じ、勢ひ順に加はる所、奇石怪巖河中に散在して流れを支へ、一たび右岸に激したる水は、再び巖に激し、三たび右岸に激して、勢ひ狂瀾の如く、船體を掀翻して飛沫は雨の如く衣袂を濡ほす。更に第三激流の當面に、一大石あり、舟は巧みに巖石の間を縫ふて走るも、船底敷しば石に觸れ、長さ五間に足らざる小舟、船の舳より高さこと一尺以上の急勾配を以て、一直線に大石に向つて走るとき、忽ち粉砕を免かれざるが如く、舟中の人皆な顔色無きも、舟師一度舵を採れば、船は斜めに巖石の横を掠めて過ぐ、舟路中の最難所なり。南部に至れば巖澤より九里、全水路の中央にて、水上警察の檢閲する所、是より下流は水勢稍や緩、また人をして手に汗を握らしむるが如きなし。

第十一世の主、日朝上人寺を今の地に遷して大伽藍を建立す。總門には開會關の三字の額あり。門内は老松列を爲すこと二町許にして大平橋を渡れば、左右に商家軒を列ねて一市街を爲す。下町、中町、上町を過ぎ、三門跡より右折して二百八十二級の石階を登れば、正面に祖師堂、眞骨堂、位牌堂、屹立し、傍に鐘樓、寶淨龕、諸侯納骨堂、水明樓、奥殿、大庫裡、等あり。支坊は枚擧するに暇無し。石階の下、左折して行くこと十數町にして日蓮上人の廟所、並びに八角堂等あり。是れ日本宗教界の革命者、日蓮上人埋骨の地なり。毎年曆陰十月十二、十三の兩日を以て大法會を執行す。之を會式と稱し、遠近の信徒集る者數万人、万點の法燈山中に耀やき、香烟溪間に薫じて、海内無双の壯觀たり。

芬陀利峰の奥の院 久遠寺本堂より登ること五十間なる山嶺の稍や平坦なる所、奥の院、祖師堂、東照宮、二王門、等あり。身延山中最も眺望の快瀾なる所、東南は遠く駿河、伊豆、安房、上總の諸山を望み、東北は近く富士川を隔て、國內の群峰に對す。此所より大連阪を越え、樋澤川に沿ふて西に下り、西ヶ谷を経て田代川に沿ひ、行くこと二里半にして本建村字赤澤に至り、春氣川の羽衣橋を渡れば七面山に達す。

●七面山 海拔五千五十七尺の峻嶺、山頂は七面大明神、御供所、喜見城、池大神、等ありて、其の東に久遠寺の奥の院あり。山麓の一の華表より五十丁にして達す。途中に龍ヶ鼻、三十二瀧、雨乞ヶ淵、白糸の瀧、等あり。社傍に池あり、鏡ヶ池と名け、清澄鏡の如し。身延山參詣者は多くは此所に登山す。

釜無川の流域

本来甲斐の國は、甲府を中心として周圍僅に平野ある外は、四方盡とく山を繞らし、其間一水の全國を北より南に貫流するもの、北に在るの間は釜無川と稱し、南方に至れば富士川と稱す。而して甲斐より信州諏訪地方に通ずる街道は、釜無川に沿ひ、また中央鐵道も甲府より韭崎を経て、其の以西は之に依る。以下此の街道により韭崎より臺ヶ原を経て、信州に入るの沿道を案内せん。

●甲府以西 甲府より信州上諏訪まで、行程十八里、山梨、長野、兩縣の縣道にて、馬車人力車を通ず。沿道多くは釜無川に沿ひ、著名の都會無きも、風景愛すべき地は少なからず、甲府市を西に發し、町の端れなる荒川橋を渡り、行くこと一里十餘町にして

龍王新町の小市街を過ぐ。是れ中巨摩郡役所の在る所、町の西端なる赤阪より、東方を顧みれば、甲府平野の彼方に、巍然群峰の上に聳ゆる富岳の眺め、恰も帝王の前に群臣盡とく拜跪するが如く、此の如く近く富士の全景を望み得る所は、他に匹ひ稀なり。尙ほ西行二里にして韭崎に達す。

●韭崎町 西に釜無川流れ、東に鹽川流れ、町の南に至りて一と爲る。町は甲信往還の要衝に當り、此所より信州諏訪郡葛木驛まで、釜無川の南北兩岸に沿ふて二條の縣道あり。本来南岸の道路は信州より甲斐を経て駿河に通ずる本道なるも、河水數しば暴漲して破壊の虞多きより、別に近年北岸に沿ふて新道を設け、中央鐵道もまた其の新道に沿ふて敷設せらるゝなり。韭崎町は、戸數約七百、人口約二千七百、北巨摩郡役所、警察署等あり。甲府と諏訪間の要衝たる上に、此所より信州南佐久郡に通ずる道路と鐵道を経て駿河に通ずる道路四達を中心在り。故に此の街道中最も賑かなる所、貨物を運ぶ馬車の往來多き爲に、土人は戯れて謎を作り『韭崎町とかけて、金もうけの話と解く、心はウマすぎる』といふ。町の西北方には七里岩の斷崖屏風の如くに連なり、巖の半腹を穿ちて安置する岩屋の觀音と、其傍の五百羅漢とは、ともに往て見るに足る。更

に石階を登りて七里岩の上に立てば、釜無川の清流を脚下に見て、曾て武田勝頼が古府の城を移したる新府の城址あり。勝頼は天正九年十二月廿四日此所に徙つて工事未だ全く成らざるに、翌る十年三月三日、既に夫人と共に此城を棄て去る。居ること僅に七十日に過ぎず。流石に悲しさに堪へ得て、夫人北條氏は「はるかすみたちいづれともいふくたびかあとをかへして三日月のそら」と詠じたりと云ふ。來り弔へば、國亡山河在の感を禁ずる能はず。

諏訪近傍

甲信國境 甲信兩國の境なる、釜無川の上流國界橋を渡るとき、甲府より約十里、葛木は山間の寒驛、東北には海拔九千百十六尺の八ヶ岳聳へ、其の山嶺を以て甲信の境

と爲し、西南は海拔七千九十八尺の釜無山峙ち、甲斐を貫流する釜無川は、源を其の山麓なる甲信國界の溪間より發す、鐵道は驛の傍を走りて停車場を置く。甲府より葛木を経て諏訪まで、山梨長野兩縣ともに縣道ながら、平時は人力車の往來極めて稀なり。道路は落合村を経て富士見村まで斷へず爪先上りに登り、阪路登り盡したる所に富士見停車場を設く。山上一戸の茶店あり、原の茶屋と呼び、富士川と天龍川の分水嶺にて、東に流るゝは甲斐に向ひ、釜無川に注ぎ、西に流るゝは一たび諏訪湖に入り、出て、天龍川と爲るなり。富士見以西、諏訪まで五里餘、西北に向つて阪路をひた下りに下り、其間金澤、茅野、宮川の諸驛を過ぎ、阪路下り盡して、水田數里に連なる平野に出て、一線糸の如く直き田野中の新道二里許を行けば、上諏訪町に着す。

上諏訪町 諏訪湖の東岸に臨み、舊時は諏訪氏三方石の城下にて、諏訪郡役所、警察署等ある所、戸數約二千、人口約一万、製糸業盛んにして土民皆な富み、市街は戸毎に電燈を點し、旅館は家ごとに温泉あり。中にも牡丹屋を巨擘とし、野々平、鐵鑛泉、中岐阜屋等、皆な屋内に浴槽を備ひ、浴後樓に登り欄に凭れば、湖光面に當る。快言ふ可らず。旅舎を兼る温泉宿は總て四十餘戸あり。湯は鹽類泉にして、皮膚病に効ありといふ。

舊城址は町の西端なる湖岸に臨み、城壁尚ほ存し、今は高島公園と稱す。廣袤方一町許、規模は小なりと雖も、渡邊國武子、渡邊千秋男兄弟の出身地なり。公園の傍に遊廓あり。町の料理店には關、鳴鶴館、等あり。また湖中と水田中より天然瓦斯の湧出多く、風車を利用して瓦斯を地底より汲み、肥料に供し、微風動くに隨ひ、數里に連なる風車盡く旋轉し、また一壯觀を呈す。瓦斯は之を引て機械の原動力に用ひ、米を搗き、綿糸を紡績するに用ふるものあり。天恵に富むの地なりと謂ふ可し。此地は海面より高さこと二千四百尺の地にあるも、湖畔の濕地、人は輒もすればマラリヤ熱に罹り易きを一缺點と爲す。

下諏訪町 上諏訪より湖の北岸を行くこと一里にして、下諏訪に達す。町は人口戶數ともに上諏訪に劣るも、此所は甲州街道と中仙道との合する所にして、また飯田町に赴く伊那街道の起る所、電燈會社は此所に設けられて、上下兩諏訪町に供給せられ、日本帝國第一の製糸地なる平野村は、町の西隣にあり。中仙道の國道は北佐久郡追分に於て信越街道と分れ、岩村田、長久保の兩市街を経て、西北に下諏訪町に來り、更に直角形を爲して西南に鹽尻峠を越へ、洗馬驛に至りて善光寺街道(乃ち篠ノ井線の鐵道)と合し、

木曾谷に入るなり。故に交通の便は、下諏訪遙に上諏訪に勝る。町に温泉湧き、湖水に臨みて山水の景勝に富むの快は、二者伯仲す。旅館は龜屋最も著はる。

諏訪神社 上下兩社あり。上諏訪町字中洲に在るを上諏訪神社と云ひ、町より南方約一里を離る。下諏訪神社は下諏訪町の北端に在り。共に國幣神社にて、健甕名方神、八坂刀賣神を祭り、上諏訪の社殿最も壯麗に、繞らすに神籬を以てし、本社、末社、寶殿、繪馬殿、神饌所等皆な境内に連なる。下諏訪神社は結構稍や劣るも、老杉森然湖上に茂りて、境内高潔瀟灑、殊に神威の儼かなるを感ず。

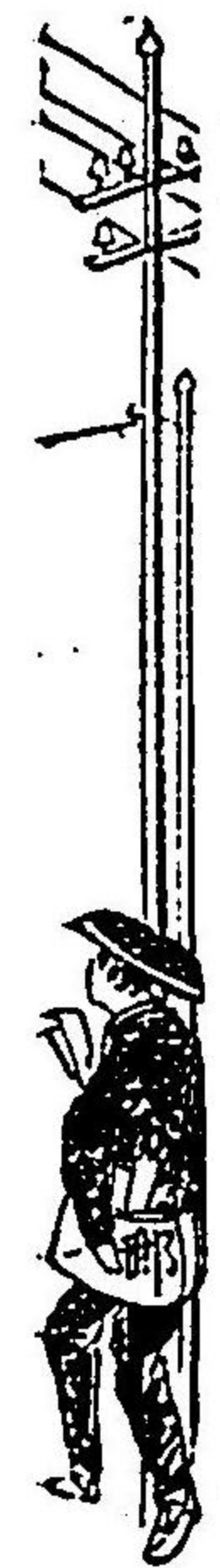
諏訪湖 一名鵜湖と稱し、東西一里十四町、南北三十三町、周廻四里廿二町、國內第一の大湖、東に入ヶ嶽、北に和田峠、南は杖突峠、西は鹽尻峠の間に在りて、四圍の山間より來る溪流は、一たび湖中に入て後に西流して伊那地方に入り、天龍川の流域を爲して、其の西岸に飯田町の都會あるなり。試みに下諏訪を去て鹽尻峠に登れば、湖上の全景盡く眼下に集まり、水は一碧の鏡を開き、四周の山影遙かに湖光に映じ、八面玲瓏の富士岳は正面に高く雲表に聳へて立つ。上下諏訪間の市街村落と、湖上を往來する遊舫とは、一々指點して數ふべく、風景言ふ可らず。湖中には鯉、鮒、鰻、鮠、鮎、

魚等を産し、また冬期は湖面氷結し、厚さ一尺より二尺に及び、人馬其上を來往す。日本二十四孝の院本に、八重垣姫が湖上を渡るの脚色は、此れより案出したるなり。此邊最も避暑に適す。斯くして下諏訪より中仙道に由り、鹽尻峠を越て鹽尻驛に到れば、中央鐵道の篠ノ井線は、東方篠ノ井驛より信越線に分岐して松本を經、此所に來りて甲州街道の八王子線と合し、木曾谷を過ぎて長野に通せんとす。

甲府鹽尻間各驛距離

今甲州街道の案内を了るに臨み、經過せる各驛間の距離を示せば左の如し。

甲府（一里二十六丁）||龍王（二里十二丁）||韭崎（四里十丁）||臺ヶ原（二里十五丁）||葛木（三里十三丁）||金澤（二里二十三丁）||茅野（二里二十七丁）||上諏訪（二里十一丁）||下諏訪（三里）||鹽尻



斯くして甲府鹽尻間は、二十一里二十三丁なり。是より轉じて篠ノ井鹽尻間の松本街道を案内せん。

二 松 本 街 道

篠 の 井 近 傍

官設信越鐵道線中、篠ノ井驛より分岐し、鹽尻驛に至りて中央線に接続するを篠ノ井線と云ふ。延長四十一哩五十四鎖。松本町を中心として、長野市と中央線とを連絡するなり。また古來善光寺參詣者の、美濃尾張地方より往來する者、偕は木曾、伊那の各地より往來する者、皆な此の道路に依り、一に善光寺街道とも云ひ、今は長野縣々道中、信越線に次て最も往來多き線路といふ。

稻荷山近傍

篠ノ井驛より汽車に乗れば、二哩三十二鎖にして達する稻荷山驛は、

戸數七百、人口三千七百許の市街あり。生糸、絹織物、杏、等の産地にて、町には劇場あり、藝者屋あり、旅舎、料理店も數戸あり。畢竟物産の饒かなるに由る。此地より猿ヶ馬場嶺を越へ、姨捨停車場の近傍三丁の地に姨捨山あり。

姨捨山

信濃更科郡八幡村字姨捨にある觀月の名所、其名夙に天下に知らる。放光

院長樂寺といふ庵の境内に、姨石の巨石横はり、高さ五丈横十間餘、傍に桂の老樹あり。

庵には本堂、庫裡、満月殿、月見堂等あり。堂に上り、欄に凭りて遠く望めば、千曲川の清流を下瞰し、河を隔て、鏡臺山に對し、中秋明月の夜、鏡臺山の背後より磨き出す一輪の大圓鏡、山を離れて光を河流に映す。古來庵の前面に階段状を爲す水田には、田ごとに月影を印するを以て田ごとの月の名あるも、實は同時に數多の月影を映するよりは、月の山上に昇りて水面に映するの絶景を賞するなり。古人の詩歌も、専ら娘捨山の月を賞す。左に其中の二三を擧ぐべし。

更科や娘捨山の高嶺より嵐をわけて出る月かけ

正三位家隆

身の行衛慰さめかねし心には娘捨山の月もうかりし

宗良親王

娘捨の山には入らし名をさして車かへし、人もある世に

小野於通

我國の娘捨山に見る月はカリホルニヤの曙のそら

佐久間象山

俛や娘ひとりなく月の友

はせを

あひにあひぬ娘捨山に秋の月

宗祇

冠着山 一説に眞の娘捨山は、娘捨停車場より二十町にして山麓に達する冠着山を謂ふとも云ふ。山は更級郡と東筑摩郡との境にして、鐵道は冠着山の大陸道（延長八千

七百十四呎）ある所、山麓より山頂まで六十丁、頂上に冠着神社あり。四顧快濶眼界頗る大、鏡臺山より出る月影と、千曲川の清流を望むは、娘捨山に異ならずして、眺望の雄大なるは遙に其の上在り。娘捨より麻績、西條、明科、田澤の諸驛を経て、松本に達す。冠着山はまた千曲川流域と犀川流域の分水嶺を爲し、山東の水は皆な千曲川に注ぎ、山西は犀川に走るなり。

松 本 近 傍

松本町 信濃の中央に位し、犀川は西方を流れ、四方に山を繞らして、近く周圍に田野開け、維新前まで戸田氏六万石の城下にて、市街は南北二里七町、東西三十二町餘、町は五十餘に分れ、六千五百の戸數と三万三千の人口あり。稅務管理局、地方裁判所支部、區裁判所、東筑摩郡役所、警察署、稅務署、小林區署、葉烟草專賣支局、郵便電信局、測候所、蠶種検査所等の諸官衙と、中學校、高等女學校、女子師範學校等あり。また第十四、松本、松本貯金、松本倉庫、信濃商業等の諸銀行を首として、銀行會社は甚だ多く、生糸を主要産物とし、製糸所は十數所にして、機械系は近來年々二万貫以上を産し、日刊新聞

は、信濃日報、信濃民報、あり。旅舎には菊屋、丸茂、同支店、秀峰館等著名にて、料理屋には花月、早崎、三ツ井、松本館、美遊喜等を著名と爲し、其他一々數ふるに堪へず。劇場には、開明座、綠座、松前座、松玉座等あり。町藝妓は綠町、上ヶ土、下馬出等に軒提灯を吊す者約百五十人、別に横田遊廊あり。市の東北十五町、女鳥羽川の東に在り。青樓二十三戸、百五十許の娼妓と四十餘の藝妓あり。岩龜樓、三龜樓、吉江樓、大青樓、舶來亭、等最も大なりといふ。町の中央を女鳥羽川貫流し、全町を川の南北により二區に分ち、南深志、北深志といふ。深志は往時松本の地名なり。舊城址は市街の中央に在り、天主閣は五層の樓閣、高さ二十五間、依然として舊時の觀を改めず。傍に中學校を建つ。縣社筑摩神社は譽田別命外四神を祭り、正殿の額は後陽成院の宸筆にして、一の華表の額は弘法大師の筆と稱す。毎年八月十日十一日を祭日とし、市民は夜間男女老若を混じ、異裝の隊を組織して仁和賀を出し、各町意匠の新奇を競ひ、遠近より來り觀る者夥しく、一年中市内最も賑はふ日と爲す。(松本城址口繪寫眞参照すべし)

淺間温泉 松本町の中央千歲橋元標より東北三十四丁の淺間温泉は、單純泉にしてリウマチス、傷痍後の滲出物、肋膜炎、中風、疝氣等に効ありと云ふ。此の温泉の他と

異なるは、無臭、無色にして、汲て飯を炊き茶を點することす。地は三面山を繞らし、一面松本の市街に望み、天主閣の高樓、往來の瀟車、皆な指點すべし。温泉場は上下淺間の二區に分れ、浴舎は通じて八十餘戸、中に目の湯、西石川、鷹の湯、千代の湯、等巨壁にて、何れも料理屋を兼ね、歌妓二十餘名あり。

松本以西 松本を去て瀟車は西に去れば、村井驛を経て鹽尻に達し、中央鐵道に合す。村井は古來松本より中仙道に通ずる宿驛にて、戸數五百餘、人口三千餘の小市街、今は専ら養蠶を以て立つ。村井の西は桔梗ヶ原の平原、東西二里、南北三里に連なり、天文二十二年武田信玄が松本城主小笠原長時の軍を破りし古戰場、近來四方より漸やく開墾せらるゝも、中間の平野は、秋時に瀟車の窓より眺むれば薄、尾花の風にそよぎ、桔梗、花郎女の露重げなるを見るべし。原野の西端に設けられたる停車場は、乃ち鹽尻驛、此所より中仙道を西すれば木曾街道と爲る。

三、木曾街道

木曾とは古來中仙道の中、信濃國西筑摩郡贄川驛より奈良井川に沿ふて、溯り、奈良

井驛を過ぎ、鳥居峠を越へ、更に木曾川に沿ふて下り、亂山重疊する沿道に、飯原、宮ノ越、福島、上ヶ松、須原、野尻、三富野、妻籠、馬籠の十一宿二十二里間を稱す。馬籠驛以西は、美濃に入りて落合驛と爲り、中津、多治見、岐阜の各町を経て、西京に達し、贊川驛以東は、洗馬、鹽尻の二驛を過ぎ、鹽尻峠を経て諏訪に入り、更に和田峠を越へ、追分驛に至り信越街道と合し、碓氷峠を越へ、安中、高崎、熊谷等の諸都會を過ぎて東京に達するもの、實に古來の中仙道なり。方今西は名古屋より中津町まで、官設鐵道中央西線開通し、東北は長野より松本を経て鹽尻まで、官設鐵道篠ノ井線開通し、尙ほ東は東京より甲府まで開通したる官設鐵道中央東線は、遠からず韭崎、金澤、等の諸驛を経て、諏訪より鹽尻に連絡せんとす。故に餘す所は鹽尻より中津町に達する木曾街道あるのみ。今は其の沿道を案内せん」とす。

鹽 尻 近 傍

鹽尻驛 鹽尻峠の北麓にて、中仙道の一驛なり。南は峠を隔て、下諏訪に通じ、東は鐵道を以て松本町に通じ、西は洗馬、本山の二驛を経て、木曾の贊川驛に連なる。洗

馬より諏訪に通ずるは中仙道にして、松本を経て長野に通ずるは善光寺街道現今篠ノ井線と稱するなり。故に鹽尻は、他に物産無き小驛ながら、東西交通の衝に當り、車馬輻輳して日夜雜踏を極む。之に反して洗馬、本山の二驛は、同じく中仙道中の宿驛なるも、今は往來人稀にして、住民は僅に養蠶を以て生を營むのみ。洗馬以西は奈良井川に沿ふて溯る。川は松本の北に至りて梓川を合せ、犀川と爲りて北流し、長野の西に至りて千曲川と合し、越後に入りて信濃川と爲るなり。

贊川驛 本山驛と贊川驛との中間にて、東筑摩と西筑摩の境を爲し、西筑摩郡を木曾といふ。贊川は木曾十一宿の最北端なり。兩山左右より迫り、中間僅に奈良井川の一水を通じ、其の隣驛を奈良井といふ。驛を越れば鳥居峠にて、川は峠の山中より發す。此邊の諸驛、古來も六橋と名くる橋を産す。

鳥居峠 奈良井驛と飯原驛との間にある高山にて、木曾街道の最高所、其の頂上を分水嶺とし、北流するは奈良井川と爲り、最後に信濃河と爲て起後の新潟に注ぎ、南流するは木曾川と爲りて、伊勢の桑名に注ぐなり。頂上は恰かも木曾の御嶽山に對し、此所に遙拜所の祠あり。銅佛、石佛、石神、銅華表等あり。御嶽は終歲過半雪を戴き、白

體々として近く西北方に經ケ岳、八森山等の群峯の上に卓立す。此地は天正十年木曾左馬頭義昌が、武田勝頼の兵と戦ふて大勝を奏したる古戰場なり。舊道は奈良井より絶頂まで二十丁、絶頂より西麓の鉾原驛まで廿五丁の峻阪にて、新道は勾配を緩くして屈曲を多くし、爲に三倍許の延長と爲れり。鉾原驛は、今は新道通じ、驛を經ずして過ぎ、空しく山腹より脚下に望み見るのみなるも、同驛より飛驒に通ずる道路あり。故に奈良井驛に比すれば行人多きが如し。

木曾義仲の古蹟

鉾原驛の西、二里八丁にして宮ノ越驛あり。驛の東端山口城址は、會て義仲の本城を構ひし所、其の西方野尻、妻籠の二驛には、出城を設け、其臣今井兼平をして野尻城を守らしむ。宮ノ越の近傍なる相原八幡は、仁安元年義仲の元服したる所、驛の對岸木曾川を隔て、徳恩寺村に徳恩寺あり。路傍に榜示して朝日將軍木曾義仲の舊蹟と大書す。寺には義仲及其臣樋口兼光、今井兼平の畫像を寺寶とし、義仲の位牌を藏し、境内に巴御前の墓あり。何物を埋葬したるにや。詳かならず。宮ノ越より約二里にして福島驛に達す。現今木曾街道旅客の最も多數が參詣する御嶽山は、此所より登臨するなり。

御嶽山の登臨



木曾の御嶽山は、其の高さに於ては富士山に次ぐも、登山者は富士と伯仲の間にある靈山なり。山は福島驛より北方に木曾街道を離れ、木曾川を渡り、御料林の檜林多き山間に入り、三里許の間、王瀧峠を越へて御登り口の麓に達す。王瀧は人家二三十戸、概ね登山者の宿泊を業とし、陰曆六月一日より九月中旬まで、約百日間を以てば、山は麓より頂上まで一合目二合目と區劃して十合目を絶頂と爲す。沿道所々に茶屋、雜菓子屋、甘酒店などあり。また百艸煉藥などの藥をも販ぐ。登ること三里餘の四合目なる八海山大權現の祠の邊りまで、阪も急ならず、雜艸茂り、之より上は樅梅等の密樹茂り、

三笠山といふ小山の頂に至れば、三笠神社あり。山は尚ほ富士山肩の寶永山に類す。而して此所既に海拔七千三百尺許なり。少しく山を下れば田原と呼ぶ低地、御嶽山の六合目に、小屋あり、雨露を凌ぐ可く、中に二三十人を宿せしむるに足る。田原より上は傾斜急に、地には樺、黒檜、白檜、五葉松、等生へるも、風雪の爲に上に伸びず、短かく地上に横はりて、姿態甚だ奇なり。更に上れば樹は五葉松のみと爲り、低く岩上に匍匐して、絲色の毛氈を敷けるに似たり。登つて十合目の頂上に至れば、一艸木無く、唯だ焼石の崖嵬たるのみ。此所に御嶽の本社あり。其の一段高き所を劍ヶ峯と稱し、最頂上に小祠と小屋と陸軍參謀本部の三角標とあり。劍ヶ峯の最高所は、海拔一万五百尺、富士より低きこと二百尺と爲す。王瀧より約五里、古來七里と稱し、且に王瀧を發し、暮に此所に着するを普通とす。頂上の小屋に宿するに、周圍所々に終歲雪を殘し、空氣は稀薄にして氣候は甚だ冷かに、九合目以上は木を生せざれば、下方より偃松の枝を折り來りて火を燒くも、火は十分に燃えず。飯を炊くも半ば熱せず。雪を溶かして水を製し、水の貴きこと酒の如く、顔を洗ふにも一椀を以て満足せざる可らず。小屋には床無れば、水の貴掃ふて臥し、強力の携ふる薄き蒲團を纏ふも、終夜寒くして夢を結ぶこと難し。朝は三

時頃より東天紅を呈し、朝霧は高山より霽れて、漸やく低き地に及び、白雲敷し去來して、其の霧に包まるゝときは、咫尺を辨せず。之を御幕が下ると云ふ。信徒は曉を待て小屋を出て、日の昇るを拜し、稱して御來光と謂ふ。朝暾昇り、雲霧霽れ、眸を四方に放てば、甲斐、駿河、美濃、飛驒、信濃の諸峯は、怒濤の起伏するが如くに連なり、眼界廣濶、意氣乾坤を狹しとするの感あり。劍ヶ峯の背後へ廻れば、一の池、二の池、より五の池まであり。皆な舊火山の噴火口に水の溜まりしなり。中に四の池は水殆ど涸れて、周圍に黒百合の美しく花を開くあり。此所にも所々に殘雪あり、塵埃の來り犯すもの無れば、皆な純白にして白玉の如し。頂上より下る路は三線あり。一は王瀧口にて、一は同じく福島に通ずる黒澤口と爲す。他の一は、全たく方向を異にし、飛驒の高山に通ずるも、往來最も少なし。最も早く開けたるは黒澤口なるも、今はまた登山者少なく、普通は王瀧口を順路とす。

福 島 近 傍

福島町 木曾山中第一の都會、松本へ十五里、名古屋へ三十七里、中津町までは十

五里にして、戸數約九百、人口約五千の一市街、西筑摩郡役所、警察署等あり。また山林學校あり。舊時は此所に關門を構へ、尾張藩の山村某之を管し、關を守る士族二百餘人ありし所、市街は川の兩岸に連なり、漆器を製造する者多し。年々七月一日より五日間此地に馬市を開き、また御嶽山參詣者も其頃より群集し、一年中最も多く他國人の來り集る時と爲す。町は木曾川を挟みて兩岸に連なり、戸々清流に臨み、後ろは山岳重疊して聳へ、一たび關門を閉せば、何人も過るを得ず。東海道箱根の關所と並びて、東西の往來を監視する唯一の要害なりき。町に興禪寺、長福寺の二寺あり、ともに臨濟宗にて、興禪寺には木曾義仲の墓あり。其西には木曾義康の古城址もあり。

棧道の古蹟

福島郡の西一里、駒ヶ根村大字杏掛にあり。舊時は懸崖高く聳へて、道路を通じ難き所に架したる棧道にして、中古までは木橋なりしに、慶安元年、尾州侯は有司に命し、兩端に石を疊みて橋礎と爲し、之に長五十六間、横幅三間四尺の木橋を架せしめたりといふ。方今は川に沿ふて新道を開き、また架け橋の危道を踏まず、唯だ其の舊蹟の地、兩岸窄く迫りて懸崖高く聳へ、碧流は大石に湛へられて鏡の如く、清流能く數丈の底を透見し、老樹巨巖の上に蟠りて、鬱々蒼々たる所、實に木曾山中最も絶

景として賞すべきを見るのみ。(口繪寫眞参照すべし)

寢覺の床 かけ橋の西一里、駒ヶ根村の内字上げ松の寢覺にあり。木曾川の兩岸懸崖對峙する谷底に、幾多の巨巖河中に横はり、其の最も大なるは一島を爲し、上に數株の松ありて、一小祠は其の松間にあり。浦島太郎を祀るといふ。巖は皆な刀もて刻みたるが如く、各其の形によりて名を附し、屏風岩、烏帽子岩、獅子岩、硯岩、腰懸岩、狙岩、浦島太郎釣舟岩等の稱あり。崖上に古刹あり、臨川寺と云ふ。寺の庭内より俯して望むの景、最も奇なり。寺は國道に沿へる寢覺の茶屋より一丁許を隔つ。

寢覺以西

須原、野尻、三富野、妻籠の各驛間、河の流れは漸く大に、紆餘曲折して益ます景致を添へ、山は皆な帝室御料林の老樹茂り、蒼潤にして恰かも一幅の畫卷を展るが如く、激流山脚を洗ふて、花岡岩の山骨を暴露し、赤裸々たる巖石の上方は、檜、

樅、椴等の古木、森然、鬱然、蒼々然として、行儀正しく茂る間に、松は高士の小節に拘はらざるが如く、巖上に踞し、崖下に垂れ、縦横正斜、姿體百出し、前景送り、後景迎へ、變化万千、人をして前後應接に暇無らしむ。妻籠驛を過ぎ、木曾川と離れて美濃の落合驛に出れば、木曾の勝區あり、恰かも仙境を出て、人間界に出るの思ひあり。落

合驛より一里にして中津町に達す。名古屋より中央西線は此所まで開通す。
鹽尻中津間の各驛距離 今木曾街道の案内を終るに臨み、また各驛間の距離を示せば左の如し。

鹽尻(一里二十二丁) || 洗馬(五里一丁) || 奈良井(二里二丁) || 飯原(二里八丁) || 宮ノ越(一里三十丁) || 福島町(二里三十一丁) || 上松(三里七丁) || 須原(五里拾丁) || 妻籠(一里三十五丁) || 馬籠(一里五丁) || 落合(一里三丁) || 中津町

是れ古來稱する各驛の里程にて、今は新道通じて山路の勾配を寛にせし爲に、里程は是より延長したる所あるも、また曲れるを直くして短縮したるもあれば、全體に於て大差なきものとす。

四、中央西線近傍

美濃の中津驛以西、中仙道は大井、大久手、細久手、御嵩、伏見、太田、鵜沼、加納の諸驛を經、岐阜に通じ、今も尙ほ國道たり。然とも官設中央鐵道は、名古屋より發

して中津町に通じたれば、今はまた人の中津町以西の中仙道を行くもの少く、「木曾のかげはし太田の渡し」て俗語も、之を歌ふ者稀なるに至りぬ。故に此の案内も、先づ鐵道線に由らんとす。况や鐵道の沿道には、虎溪山の勝區、陶器の本場産出地として有名なる多治見など、探討すべき所甚だ多きをや。

中津町近傍

●中津町 木曾谷を出て、中津町に至れば、天然の山光水色は著しく凡俗化すると共に、人為の設備は遺憾無く整ひ、旅館、飲食、寢具等まで、岐阜、名古屋の既に近きにあるを覺ゆ。木曾谷への運搬は、總て人肩馬背を假るに反して、中津町までは、名古屋より四十九哩四十五鎖の鐵道一日四回往復し、片道僅に三時間許を費すのみ。元來中仙道の一驛、美濃國惠那郡に屬し、惠那嶽の麓、木曾川の南に在て、中津川は南より北に流れて木曾川に注ぎ、岐阜までは二十里三十二町にて、尙ほ山間の一市街ながら、戸數一千四百許、人口七千餘、惠那郡役所、警察署、稅務署、郵便電信局、蠶種檢査所等あり。御料局、鐵道作業局、區裁判所等の各出張所あり。主なる物産は生糸にて、

旅館、料理店、等の使用人は、多く名古屋人種を以て満たし、魚も鮮にして酒も醇なり。旅館は橋利喜最も著はる。中津驛より汽車に乗れば、忽ち過る中津川橋は、二百四十呎にて、此邊鐵道は四十分一の急勾配にて走り、七哩餘にて大井町に達す。
大井町 中仙道は、此所にて鐵道と分れ、西方岐阜に向つて通じ、汽車は西南方名古屋に向つて走るなり。町は南より流る、阿木川を以て中央を貫き、戸數四百餘、人口二千二百餘、町の長國寺には、西行法師の位牌を藏し、西數町の中仙道通りなる西行阪の傍には、法師の塚ありて、五輪の塔を立つ。位牌には建久元年二月十六日寂と記し、『待たれつる入相の鐘の音すなりあすもやあらは聞かんとすらん』の辭世を録す。西行此地に示寂の事、稍や疑無さを得ざるも、法師の歌に『よもすがら嵐の音に風さへて大井のよどこにほりをぞしく』などあれば、此邊りに住みたることあるや明かなり。大井以西、數多の隧道を潜りて釜戸驛に出れば、土岐郡に屬し、是より鐵道は名古屋まで土岐川に沿ふ。有名なる虎溪山の奇勝も、此川の沿岸にあり。

多 治 見 近 傍

土岐津驛 釜戸瑞浪二驛を経て、土岐津驛まで、鐵道は土岐川の北岸を走り、土岐津町は、川を隔て、南岸にあり。町は高山、土岐口の二區より成り、舊時は天領にて、今は高山に土岐郡役所、稅務署、陶器學校等あり。戸數五百餘。人口二千五百餘。此邊一帶に陶器の産地にして、有名なる久尻焼は、土岐津驛の西北なる久尻村より産し、其の元祖加藤筑後守景光は、支那に渡つて陶法を研究したる人、其の作品、今は好事家の爲に什襲珍藏せらるゝなり。
多治見町 土岐郡第一の都會なるも、郡の西端にある故郡役所は土岐津に置くなり。瀬戸焼陶器の本場にて、戸數は一千五百餘、人口七千四百餘、土岐川の兩岸に跨がり、停車場は川の西岸に在り。中津驛以西、此に至りて始めて平原に出づ。而して土岐川も、惠那郡の山中を出るときには、躍て飛び越え得べかりしもの、土岐郡に入り、虎溪の山間を出て來りて、漸やく大に、後に西流して尾張に入り、内津川、矢田川、を合せて庄内川と爲り、名古屋の西を繞りて伊勢の海に注ぐなり。
虎溪山 多治見町の東、土岐川の上流半里の地、可見郡豊岡村にある土岐川沿岸の總稱にて、山を虎溪と稱し、寺を永保と號す。正和二年夢想國師の隱栖したる所、國師

後に嵯峨の天龍寺に入るに及び、法弟佛徳禪師其後を嗣ぐ。四衆漸やく其徳風を慕ふて來り會し、遂に一大道場と爲る。事後醍醐帝の敍聞に達し、萬里小路藤房を遣して繪旨を賜ふ。是れ即ち永保寺の創建にて、境内約方一里に達す。多治見町より其地に至るには、町の西端の多治見橋を渡り、川に沿ふて溯り、山麓に至りて羊腸の阪路を登れば、絶頂に平地あり、門の石柱二本には、「虎溪佳山水」永保古禪林」と題す。門を入り、行くこと數十歩、坐禪石の上より俯瞰すれば、土岐川の急流は奇樹怪石の間に曲折る、桃源水は、落ちて臥龍池に注ぐ。池の傍なる本堂を華藏庵と名け、佛殿を水月場と稱し、庵前の池上に辨財天祠あり。鐘樓門を経て總門を廻れば、土岐川の岸に出づ。水中に起伏する岩石は、湍岩石、獨立石、補陀石、水牛石等の名あり。下ること數丁、西



望最も奇なり。九折の阪を降れば、多寶塔あり、更に下り盡せば、溪流に土橋を架し、三笑橋といふ。此溪畔を溯ること數十歩の地を仙壺洞と稱す。山隅の開山堂には、勅額を掲げて夢想國師の像を安置し、堂の右を流

南の崖は、絶壁削るが如く、流れの盤渦する所を龍潭と稱す、淵の北岸懸崖連り、淵の下、急湍巖角に激し、其音轟々として雷の如し、十八灘と名く。虎溪の奇勝此に至つて盡く。實に東濃第一の絶景なり。
多治見以西 鐵道は土岐川に沿ふて尾張の東春日井郡に入り、高藏寺、勝川、千種の三驛を経て名古屋に達し、東海道鐵道名古屋驛に接続す。之を中央鐵道西線と稱するなり。

五 東濃中仙道

中津驛以西

中仙道の中、木曾路を経て中津町までは既に説けり。而して中央鐵道は、中津町より名古屋に出で、東海道鐵道に合し、岐阜に至りて中仙道に合し、是より西は中仙道に沿ふて京都に至る。故に名古屋以西は、東海道鐵道近傍の章に案内すべきも、中津と岐阜の間、二十里三十二町餘なる舊中仙道の國道は、未だ之を説かざるなり。此の地方今は中央鐵道開通の爲に、旅客の過ぐる者稀なるも、舊時の名残を偲ぶ爲に、略ぼ之を

説かんと欲す。

沿道各驛距離

先づ此の沿道の各驛と距離とは左の如し。

中津町(二里半) 大井(三里半) 大久手(一里三十丁) 細久手(三里) 御嵩

(二里五丁) 伏見(二里) 太田(二里) 鶴沼(四里八丁) 加納

加納より岐阜までは、二十丁許にて、岐阜は元と中仙道の沿道にあらず。全く中仙道

と長良川との中間に在り。方今東海道鐵道の岐阜驛も、名は岐阜と云ふも、實は加納町近

くにあるものとす。

十三峠近傍

中津町より大井驛までの二里半は、鐵道も尚ほ中仙道に沿ふて通じ、

驛の西端なる阿木川を渡り、中野村に至りて始めて道は中仙道と名古屋街道とに岐る。

名古屋街道は縣道にて、鐵道も之に沿ふ。中仙道の國道は、分岐點より數丁にして西行

阪あり。法師の塚は此所にあるなり。此れより十三嶺の險路を踰へて大久手に出て、琵琶

坂を登り、山路一里三十丁にして細久手に出づ。細久手以西、路は漸やく下り阪に

て、津橋、井尻の數村を經、御嵩驛に至る頃は、田野遠く開けて、木曾川沿岸の平野と

爲る。

御嵩町

可見郡々役所の所在地、戸數約四百、人口一千八百許にして、旅館は升屋

を最とし、町に天台宗の願興寺あり。弘仁六年傳教大師の創立にて、本尊藥師如來は傳

教大師一刀三禮の刻、世に蟹藥師と稱せられ、其他の寺寶には、運慶作四天神將、行基

作釋迦如來、惠心僧都作彌陀如來、嵯峨天皇御宸筆等あり。郡内屈指の名刹なり。此所

より伏見驛を過ぎ、有名なる太田の渡りを舟にて越せば、木曾川の北岸は太田町なり。

太田町近傍

太田町

木曾川の東南は可見郡、北西は加茂郡、而して太田町は加茂郡役所の在る

所、太田の渡船は中仙道第一の大渡津なり。戸數約四百五十、人口二千三百五十餘、此

地より、岐阜まで約七里、町の東端より便船を出し、木曾川を上下す。故に物貨輻輳し

て商業殷賑なり。中津以西岐阜の間、第一の繁華なる市街といふ。

木曾川の舟行

太田町より小舟を木曾川に發し、笠松町を經て桑名まで、水路十八

里一日ならずして達す。舟は太田の上流、伏見または八百津よりも發す。津藩の儒臣齋

藤拙堂が、天保八年四月伏見驛より舟を舩して木曾川を下りたる記は、舟路の狀を寫し

て微細を極む。中に曰く、(原漢文)翌日夙に起き、水濱に趨き舟を求む。舟人家は前岸樹林の中に在り。戸を閉して未だ起きず。阻むに灘聲の喧騒を以てし、索呼するも達せず。唇焦げ舌燥く。之を久ふして乃ち應じ、其の兒と與に舟を舩して來り迎ふ。日は既に辰を加ふ。乃ち發す。舟は狭長にして薄板之を爲る。呼て鵜飼と爲す。兒は纔に十三歳のみ。父は舩に在り見は艦に在り。各楫を持ち、操縦甚だ習る。灘急に舟走り、兩崖の巒嶽一時に皆な揺く。當前見る所、倏急後に在り。唯だ岸行き山走るを見て舟の移るを覺へず。山は皆な石身土を戴き、松之が髪たり。而して紅杜鵑其の間に粧點し、腥血滴るが如し。又處々に水簾の懸る有り。綫々灑々潭石の上に墜ち、石皆な奇狀、兩岸に羅列し、或は特立して柱の若く、或は折裂して門の若く、或は渴驥の潤に飲むが若く、或は臥牛の道に横はるが若く、五色陸離相間し、斂は率ね大小斧劈を作り、間ま荷葉披麻を作す者あり。波浪を濺て以て出て、交替去來、應接に暇あらず。蓋し詭譎變幻中、清秀深穩の態を帶ぶ。荆關の筆、倪黃の手に非んば狀する能はざるなり。僕隸輩、山水の趣を解せざる者と雖も、皆な連りに奇と呼び聲を絶たず、忽ち一大巖の水中に屹立するに遇ふ。舟殆ど之に觸れ、少しく誤れば則ち壘粉す。衆懼れて黙するも、舟人は笑つて

柁を振り之を避れば、輒すく巖角を掠めて過ぐ。此の如き者數處、未だ嘗て絲毫を差はず。但だ巖際を経て、波激し舟舞ひ、飛沫人を撲ち、衣袂盡く濕ふ。僕従を回視すれば、各兩把の汗を握り、殆ど人色無きも、舟人は甚だ間暇、從容烟を吹て坐す。流を上る船、力を併せて挽上る者に視ぶれば、難易懸絶す。已にして峽を離るれば、漸く平遠、犬山城を翠微の上に露はし、粉壁鮮明、衆望み見て歡然たり。城下に至る比、又暗礁あり、舟を翹み、砦然裂けん欲す。衆復た相顧みて瞿然たり。此を過ぎて以往、漁舟相望み、歌唱互に答ひ、衆心始めて降る。蓋し始め發してより此に抵るまで、陸行半日の程たり。一餉時ならずして至る、其の快知る可し云々と。此の記に依れば、朝に伏見を發し、午後桑名に着し、更に即日四日市に至りて宿すと云ふ。江水迅急の狀、想見すべし。
太田以西 木曾川は、太田の上流一里の地に於て、飛驒川來り會し、河幅急に大と爲り、また木曾山中に見るの比にあらず。大河滔々として流れ、急流矢の如く、早瀬を下る舟は飛ぶに似たり。太田以西に至り、國道は河に沿ふて通じ、勝山を過ぎ、鵜沼驛に至れば、河を隔て、粉壁鮮明なる犬山城の樓櫓を翠微の間に望むこと、今も拙堂の記の如し。鵜沼以西はまた河と離れ、三里四方といふ各務野の原を過ぎ、新加納町を経て、

加納町に達すれば、東海道鐵道の岐阜驛は、町の北端にあり。而かも岐阜市の南端なり。是より西、東海道鐵道と稱するも、實は中仙道と並行するものとす。

六 飛驒街道

飛驒探勝の順路

飛驒は日本全國中第一の高地、其の國は僅に十二万餘の人口と、二万餘の戸數とあるに過ぎざるも、飛驒川、長良川、神通川、射水川の如き長流の泉源にして、蚤に山水の奇勝を以て名あり。元來東山道中の一國ながら、山間に僻在し、國道通せず、四方に往來するにも、皆な亂山重疊の間を過ること數十里なるが故に、交通の不便は、其の勝區を世に埋没せしむるも、委しく之を探れば、下野の鹽原、豊後の耶馬溪の如き、また奇勝の名を天下に縦にする能はざるなり。イデや其の案内を試みるべし。

溪山の勝概 飛驒國內の勝地甚だ多き中に、第一は飛驒川の上流益田川の沿岸二十餘里間の溪流なり。第二は長良川の上流十餘里の溪流なり。第三は神通川の上流なる宮川及び高原川の溪流にして、第四は射水川の上流なる白川の溪流と爲す。其の第一第

二は美濃に流れて木曾川と爲り、伊勢の桑名に注ぎ、第三第四は越中に流れて神通川は富山に、射水川は伏木に注ぐ。故に順路は美濃の岐阜より發して飛驒に入り、最高所にある首府高山町を経て、越中に下るを便とす。

岐阜高山間の通路 岐阜より高山まで、萩原町を経て三十三里の縣道は、大部分は益田川に沿ふて、人力車を通ずべく、最も長き距離の間、激湍、奇巖、峭壁、密樹等の風景に富む。また岐阜より八幡町を經る長良川沿岸は、八幡町まで十里の間、乗合馬車あり。高山までの距離も萩原線に比して數里を短縮するも、全線人力車を通ずる能はず。また長良川沿岸の探勝區域は、益田川沿岸に比して甚は短かし。况や萩原線は、岐阜より芥見まで二里の間、長良川の下流に沿ひ、暫らく長良川の風景を眺めて、然る後に益田川の奇勝を探るの利あり。故に今は岐阜より芥見を經、關、金山(以上美濃)萩原の各町を経て、高山に至り、更に高山より神通川流域を越中富山に下るの線路を案内せんとす。

長良川附近 長良川は市街の北端を東西に流れ、金華山と稻葉山とは、市街の東方に聳え、其山麓に連なる岐阜の市街は、南北に長く、東海道鐵道の岐阜停車場は、中仙道

の國道に近く、市の南端、加納町の北端にあり。八幡通の乗合馬車は、此の南端より發して東に走るも、捷徑にして且つ長良川の景を賞するには、市の北端、金華山の背後に出るを利とす。其所には名高き長良の長橋を渡り、夏時は橋下に輻輳して繋がる、鵜飼の遊覧船を、欄干の間より眺め、橋を渡りて場に沿ひ、東に遡ること里許、帝室御料地鮎漁禁止區域あり。是れより以下は、毎夜鵜飼船の漁獲に従ふ所と爲す。川は水清くして河底の水を飲ふべきも、兩岸稍や平野開け、桑島連りて多くの奇を見ず。*



行くこと二里許にして川を渡る。渡津は兩岸より空中に太き銅線を架し、線に滑車を装ひ、車は銅線を以て船に繋ぐ。船を斜めにして漕ぎ出せば、水の抵抗は、線上の滑車を動かし、船は自ら彼岸に漕ぐ、蓋し近時の新發明といふ。川を渡りて今まで右なりし流れを左にし、更に半里許を行けば、芥見村は岐阜より飛騨街道の本道と問道との合する所。武儀川は北より、津保川は東より、共に長良川に來り會す。此に於て先づ武儀長良の二流に分れ、津保川の架橋を北に渡り、小金田に至れば道は兩岐と爲る、

右は萩原道、左は八幡道、何れも高山町に達するなり。右方の縣道を行くこと一里にして關町に達す。

關町 美濃國武儀郡にて、岐阜より高山へ通する飛騨街道の要衝、東南は中仙道太田町に連なり、北は同國上有知町に通する縣道を以て十字形を爲す中心にあり。武儀郡役所の在る所、戸數約一千、人口五千餘、古來刀劍の鍛冶多く、關物と稱する幾多の名工を生じたる所、近世銃砲を以て唯一の兵器と爲すに及び、刀工の業は甚だ衰へたるも、今は農具を産して、市街般賑なり。旅館には萬茂、料理店には昇月樓あり。岐阜より此地まで五里十七丁、關より濃飛の國境金山町まで九里、關以東三里餘は、津保川の細流を右にして漸やく山中に入り、下ノ保、中ノ保、神淵、笹洞等の山間なる村落を過ぎ、山を下りて飛騨川の岸に出れば、町あり、金山と云ふ。町の東端、馬瀬川北より來り、東より來る益田川に合して飛騨川を爲し、馬瀬川を以て濃飛兩國を境し、橋あり境橋といふ。之を渡れば即ち飛騨なり。

益田川沿岸 飛騨に入てより道路は益田川に沿ひ、僅に五丁許にして下原宿あり。此れより北、瀬戸、保井戸の二驛を経て、下呂に至るの間を中山七里と稱し、兩岸の山

岳迫り来りて、川は僅に其間を通じ、絶壁峭立、密樹上を掩ひ、急湍巖を嚙んで、土は盡く洗ひ去り、花崗岩の山骨は、巨巖と爲りて河身に横はり、或は兩岸に峙つ。川幅廣き所は二三十間、狹き所は巖と巖との間、躍らば躍ゆるべし。水の躍るときは雪を噴き、満へては碧瑠璃を漾はす。巖は方圓形を異にし、高きは頂上に苔を帯びて古松蟠まり、脚躑躅を吐き、低きは半ば水に没し、半ば水に摩せられ、光澤紫銅の如く、變化万千、一巻の石譜を展べたるが如し。中に兩岸最も迫る所、榜示して漁獲を禁止す。是れ此所にて罟を張れば、魚族の上流に溯るを得ざらしむればなり。其の河水巖角を走り、下つて崖下に没して水無さかと疑はしむる所、下原の釜と稱す。風景絶佳なり。此より上流、孝池水、吐月峰、獨木橋、歸樵徑、女夫松、濺水崖を併せて浦白の六勝と云ふ。河流急にして橋を架しがなく、古來兩岸より巨綱を通じ、籠を吊下して手繰りながら渡る、世に之を籠の渡しと云ふ。此の如きもの古來多かりしも、今は其制を改め、太き銅線四條を架し、下の二線の上に木篋を載せ、人は其中に入り、上の二銅線を手繰りつゝ、渡る。籠の吊下に比すれば、大に危険を減すといふ。

萩原町附近

此邊り一帯の地、川の兩岸は山岳屏風の如くに連り、川に沿ふて溯

るに従ひ、溪山の勝益ますます奇に、山は盡とく蒼潤、翠綠滴るが如く、水は皆な紆餘、山脚を嚙んで走り、石身の山、急流に洗ひ去られ、或は大斧劈、或は小斧劈、或は荷葉皴、或は披麻皴、山水書法の筆法具さに備はる。下原より下呂に至るまで、路は川の西岸に沿ひ、下呂にて始めて橋を架す。浅水橋といふ。橋より水まで三丈餘、兩岸懸崖を爲し、橋下の深淵、紺碧鏡の如し。橋を渡れば、一徑東南に走る。美濃の加茂郡に入り、付知、苗木の兩市街を経て、中仙道の中津町に通ずるなり。下呂には鑛泉あり、浴舎は二三十戸、一ヶ年の浴客二千人許ありといふ。更に中呂を経て、萩原町を過ぎ、上呂村あり。萩原町は益田郡役所の所在地、郡内第一の都會といふ。戸數六百餘、人口三千部、住民概ね商賈にて、家屋また卑陋ならず。旅館は木屋を巨擘とす。此地高山へ十里、岐阜へ二十三里十七丁といふ。此邊の沿道、人は皆な純朴にして風俗野卑ならず、婦人また眉目秀麗なる者多し。

朝六橋

上呂より大ヶ洞、宮田、阪下を經、小阪に至れば小阪川は、東より来りて

益田川に注ぐ所、橋を小阪川に架す。朝六橋と稱し、古來飛驒の名所にして、橋下の深潭、水清くして明鏡の如く、怪岩河中に起伏し、兩岸には老樹鬱蒼たり。翠臺枝上に點

緩し、低く水に垂る。橋上の眺最も佳なり。本居宣長の歌に『たをやめの蟬の羽袖もすしげに夕風渡る妻太の川橋』とあるは此地の謂なり。
位山 小阪より二里許を遡り、渚橋を渡りて再び川の西岸に移り、木賊洞、河内の二村を経、久々野驛に至りて始めて川と別れ、西北の阪路を上れば、左方を位山と名く。山は水松を以て満たす。是れ往昔御笏の料として京都に献じたる時、爵を賜ひて、水松を二位の木と稱せしより、山を位山と呼ぶ。古來名流の歌詠多し。橋千蔭の歌に『位山峰の若葉のみどりさへあけにうつろふ秋をこそまで』また堯惠法師の北國紀行に『かくて明る年の十八のさ月の末に、飛驒の山路をしのぎ、あづまのかたへおもむき侍りぬ、位山を見るに、千峰万山かさなりていづくをかさりともしらず、梢吹く風もたかさ位山檜原のもとにかゝる白くも』とあるも此所の謂なり。位山を左にし、宮崎を越れば、絶頂を分水嶺とし、南に流るゝは益田川より飛驒川を經、木曾川に入て伊勢海に注ぎ、北に流るゝは宮川と爲り、神通川の源を爲し、越中に入て富山灣に注ぐ。以て其の高さを想ふべし。峠を下れば、宮村には國幣小社水無瀬神社あり。飛驒國の一の宮にて、本社、拜殿、宏壯高潔、老樹蔚然社殿を掩ふ。宮の境内より流れ出るを宮川と稱し、北流二里に

して高山町に至り、町の中央を貫流す。

高山町

飛驒は全國中の最高所、高山町は飛驒國中最高所の最都會、海拔一千八百六十尺の上在り。萬山四方を繞らし、國內平地少なく、其位地恰かも摺鉢を伏せて其底に在るが如く、四方に流下する河線四條ありて、道路は僅に其の溪間にのみ通じ、村落もまた單り道路と溪流とによりて開かる。故に其の河流と道路とは、恰かも衣裳の襜の如し。飛驒の國名は、實に山腹のヒダを爲すに因みて起るといふ説蓋し當を得たり。高山町は、ヒダの頂上に在り。戸數約四千、人口約一万六千三百、大野郡役所、警察署、監獄署、神道中教院、縣社飛驒總社、國分寺、大谷派別院、尋常中學校等あり。市街の中央に清流あり、橋を架すること四、其の形勢頗る京都に似たり。また東方の高丘を東山に擬し、西方に中古金森長近の舊城址なりし白雲山あり。之を嵐山に擬し、土人自ら小京都と稱す。冬時積雪多き爲に、屋上に石塊を並べ、雅致を缺くも、國分寺の三重の塔は、千年の古色を存し、白雲山の舊城址は、三百年前の城壁を留め、大谷派別院の壯大なる、

飛驒總社の古雅なる。山間別に天地の面目を新たにす者多し。旅館多き中に、谷嘉を第一とし、宿料は一泊四十錢許、料理店には月波樓、清輝樓、等を巨擘とし、町の北隅に遊廓あり、娼樓七八戸、飛驒全國中、遊廓あるは此地のみ。其の藝娼妓とも概ね名古屋より來り、土着の人にして此等の業に従ふ者、殆ど絶無といふ。故に土人の氣風純朴なるに反し、所謂娼樓は、貪慾壓く無く、殊に遠來の客に對しては、法外の暴利を貪ることありといふ。此地氣候頗る冷かに、盛夏も炎熱を知らず、晩春四月梅櫻桃李一齊に開き、九月の末には紅葉既に霜に染む。故に米作の實ること少なく、米の供給は越中に仰ぐも、富山より山路二十二里を上るにあらざれば、高山に達する能はず。故に米の貴さと珠玉の如く、中人以下は皆な稗、馬鈴薯等を常食とし、米飯を食する者甚だ稀なり。生絲、真綿、一位細工、等を特産と爲す。

四方の交通 高山町を中心とし、縣道は四方に通ず、之を分てば左の如し。

飛驒街道 久々野、小阪、萩原、下呂、保井戸、(以上飛驒)金山、關を経て岐阜に通ず

郡上街道 八日町、三日町、有巢、大原、(以上飛驒)奥住、八幡、上有知を経て岐阜に

通ず

信州街道 甲、朝日、中宿、野麥、上げ洞、(以上飛驒)奈川、安曇を経て、松本に通ず

越中街道 古川、杉崎、船津、谷、(以上飛驒)笹津、上大久保を経て富山に通ず

今は岐阜より飛驒街道を高山に到着せり。更に越中街道により富山府までの沿道を案内すべしなり。

越中往還

古川町近傍 高山より越中まで、若し専ら宮川の岸に沿へば、急流直下、二十二里にして富山市に達すべし。高山より四里杉崎より宮川と分れ、荒原の山路を越て船津町を経るを順路と爲す。高山町より約二里にして古川町あり、其間宮川の右岸に沿ふ。川は所々に巨巖の磊砢たる間を走り、水石の景、人目を慰むるに足る。巨巖屹立して河幅急に窄り、流に溯る魚族は盡く捉へ盡すを得る所、漁業禁止の榜杭を樹つ。此事益田川沿岸に於ても見る。岐阜縣廳が養魚繁殖の注意厚しと謂ふ可し。古川町は、戸數一千三百、人口約六千、吉城郡役所の在る所、更に川に沿ふて下ると二里杉崎に至れば、

道は兩岐と爲り、尙ほ川に沿ふものと、右折して山に登るものとあり。路の修理は山路に整ふ。山は登り五十丁、下り二里といふ。山下に車の綱曳を兼業とする婦人多し。人車荷車ともに綱を添へ、頂上まで力を助くるなり。阪は之の字形に屈曲を設けて新道を開き、登り盡せば茶店あり。頂上まで南方を荒原、それより北方を巢山と稱す。巢山以北、急阪を下ること二里、船津町なり。

船津町近傍

高山より七里十丁、高原川は町の北方を流れ、戸數約一千二百餘、人口六千許、旅舎には渡邊屋、木下屋あり。此所より北方西茂住に至る三里の間、高原川の沿岸最も溪山の勝に富む。鹿間の瀧、文字ヶ淵の瀧の渡し、漆山の棧道など、盡く山水の活畫、倪黄の筆と雖も寫し易からず。往て牧村に入れば、奔湍寂然聲を收めて潭と爲り、兩岸巨巖聳へ、上に青松を戴き、山盛り水怒り、驚玉散じ愕珠飛び、奇景匹儔稀なり。進んで西茂住に入らんとする所、奇峰巖の如く裂け、紫澗にして淡青色の條文を雜ゆる山骨は、全く露出し、潭を繞りて壁立し、壁に翠巖あり、峯に古木多く、瀑布あり、高さ二十餘丈、瀧々として落下し、潭邊の白石に注ぎ、走りて潭に入る。飛沫の散する所、雲涌き、霧舞ひ、日光之に映すれば彩虹を現す。奇景、畫も如かず。

西茂住驛附近 西茂住は高原川畔の一驛、傍に三井鑛山會社所屬の銀鑛製煉所あり。坑夫の出入多く、市街稍や賑ふ。驛は高山へ十二里、富山へ十里、驛の北、高原川の風景益ます奇、水の急なる所湍と爲り、緩なるは潭と爲り、懸るものは瀑と爲り、巖に激するものは雪を噴くかと疑はる。更に下りて東茂住の北、往昔籠の渡しありし所、今は溪上に長橋を架す。橋は一脚を用ひず、高く東岸より西岸に通ず、大蛇の溪を越が如し。橋を越て少く行けば越中の國婦負郡にて、前に別れたる宮川は、此に來りて釣橋を渡り、川に別れて田園の間を往く。左右盡く水田、一路平坦にしてまた山水の目を樂しましむる無く、大久保驛を経て富山市に入る。富山市の案内は、北陸道の章に之を説く可れば今は説かず。

越中の平野 山を下れば富山まで、平坦七里、暫らく神通川に沿ふて走り、笹津に至りて



441

東 海 道 附 近

品 川 町 近 傍

東京を發して西の方、東海道の沿道に向つて漫遊を試みんには、名邑勝區の古來名高きもの極めて多し。今之が案内を爲すには、主として鐵道線路を中心とし、傍ら山海の勝地に及ぶべし。而して小兒も歌ふなる鐵道唱歌の、汽笛一聲新橋をはや我が汽車は立ち出れば、第一に到着する品川驛は、東海道五十三驛中の首程、今は東京市と接続し、其の境界までの案内は、既に東京市の下に之を説きたり。市の南端、八ツ山下なる鐵道の上に架したる橋を渡れば、乃ち品川町なり。

品川町 町は南北の二に分れ、中央なる中ノ橋を以て之を區劃し、商賈櫛比して、東京灣の海に沿ひ、常に軍艦の碇泊する所、所謂品川沖の砲臺は、町の東端より起りて、東京の大川河口まで、七個を連ね、町は碇泊軍艦の士官水兵を以て繁昌の最好顧客と爲す。約四千の戸數と二万の人口ありて、荏原郡役所の在る所、市街の中央に妓樓多きは、

舊時より東海道驛次の名残と爲す。品川停車場は、町の北端、東京市と境する海岸にあり。古來櫻花に名高き御殿山は、停車場より南に三丁弱の丘陵なり。此地會つて太田道灌の居りし所なるが故に御殿山と名付けたりと云ふ。寛文年間和州吉野山の櫻を植えて以來、久しく櫻花の名所たりしが、近頃伐り去りしたため、昔の美觀を失へり。御殿山を出て、小橋を渡つて、妓樓の前を過ぎ、十町餘にして右に入り、北品川町の總鎮守たる品川神社の前を過ぎて右折すれば、

東海寺 境内に入る。これ寛永十四年徳川家光の祈願によりて、澤庵和尚の開基せる禪刹なり。昔は寺域五万坪と稱せしが、維新の際、殿堂悉く焼失して、今は昔時の坊中春雨庵を以て本堂とす。其の北一町餘の地には、東海道鐵道の線路あり。是れを横りて硝子製造所の北手なる石燈を登れば、開山澤庵和尚の墓あり。寺内亦加茂眞淵、服部南郭の墳墓あり。東海寺を出て、南品川に至れば、街道の右に當りて（停車場よりは二十餘町）

海晏寺 あり。紅葉の名所、葉唄の『アレ見やしやんせ海晏寺、まゝよ龍田も高尾てぶへも、及びないぞへ紅葉狩』とは、乃ち此所。北條時頼の開基、大覺禪師を開山と

す。本堂は曾つて火災のために焼失して、今は假堂あるのみなれど、寺後一堆の高丘には、楓樹多く、其間より品川灣の砲臺を望むべく、風景甚だ佳なり。此寺の附近を鮫洲と呼ぶ。又境内には贈太政大臣岩倉具視公の墳墓あり。此寺院に至る途には、弘安八年天目上人の開基せる法華宗天妙國寺、海雲寺の千鉢荒神等あり。

目 黒 近 傍

桐谷の瀧 品川驛より日本鐵道山手線に乗り換へ、大崎驛にて下車し、線路を横ぎりて西南に七八町行けば、桐谷の瀧あり。瀧小なりと雖も、水は清冽にして、夏季暑を避るに適せり。又目黒驛にて下車すれば、有名なる目黒不動には、十町許にして達す(桐谷瀧より行くも畧ぼ同じ)

目黒不動 同停車場を出て、右折して急坂を下り、行くと七丁餘にして、不動院に達す。寺は天台宗に屬し、瀧泉寺と號し、大同年間慈覺大師の草創する所たり。二王門を入れれば石燈の下、左方に獨鈷の瀧あり。石燈を登れば、本堂ありて、其後には大日堂、虚空藏堂、鬼子母神堂等あり。此他境内には、始めて甘蔗を栽るを教へて、國民の餓死

を救ひたる甘蔗先生の碑あり。門前には料理屋相列びて、客を招く。春は筍飯、秋は栗飯を名物とす。又門前より右折する數十歩にして、白井權八と情婦小紫とを葬れる比翼塚あり。次に不動院の北二丁に大鳥神社(日本武尊を祀る)在り。祐天上人の開基せる祐天寺は、停車場より半里弱、不動院よりは十町餘に在り。向候目黒不動門前より右方に、碑文谷村を過ぎ、二里半餘行けば、駒澤村の九品佛(淨心寺境内)あり。其より三町餘にして等々力村の不動瀧あり。此地より三町餘にして多摩川沿岸に出づるを*王經基の草創せる金王八幡社あり、境内には金王櫻あり。又寶泉寺(元祿年間松平外記の創立にて、快圓國師を開山とす)も五丁許にあり。停車場より一里許なる世田谷村には、松蔭神社(吉田松蔭の墓あり)及び井伊家の菩提所豪徳寺あり。



*得へし。

澁谷附近

目黒停車場より新宿に向へば右手にエビス麥酒會社あり。(會社内には客の需に應じ、庭園にて生ビールを賣る)

其の工場を見て、澁谷驛にて下車すれば、停車場の北に氷川神社あり。同五丁にして、六孫

大森近傍

大森 品川驛より更に西に轉ずれば、大森驛に至る。停車場の傍よりは、京濱電氣鐵道會社の線路ありて、大森海岸より、山谷、蒲田、雑色、六郷を経て、川崎に至り、其れより川崎大師に至る間を往復す。其途中蒲田には梅林あり。停車場の西隣なる丘岡は、梅花を以て名高き八景園なり。大森は海水浴場にして、伊勢源、松淺、魚榮、八幡樓等の旅舎兼料理屋あり。

池上本門寺 大森停車場より鐵道線路を横り、西南に行くこと二十町にして、池上村には日蓮上人入寂の地として名高き長榮山本門寺あり。同宗大本山の一なり。其の草創は弘安四年と稱せらる。總門を入り、石燈を登れば、右に五重塔の林間に峙つあり。正面の本堂は近年の再建にて、其左なるを釋迦堂とし、堂の左方を下れば、眞骨堂、上人廟等あり。廟の傍には日蓮上人硯水井あり。また廟内には上人寄懸の柱あり。廟前の櫻樹は、十月十二日より十四日まで會式當日の頃に開くが故に會式櫻の名あり。又此丘岡の東腹には、礦泉を出す。光明館及び明保野樓は料理屋兼旅館の巨擘たり。又

境内には故星亨氏の墓あり。

多摩川の下流 本門寺の西半里餘、馬込村に洗足池あり。池畔には勝海舟翁の墓あり。又本門寺の西南半里なる矢口村には、新田神社あり。正平十三年此地に戦死したる新田義興の靈を祭る。其南多摩川の下流矢口の渡に近き路傍には、義興と共に討死せし從臣を祀れる十騎社あり。新田神社の西北八町許なる調布村字鵜ノ木には、寛喜元年の草創に係る光明寺あり。寺は淨土宗西山派に屬し、昔は七堂伽藍の美を極めたりと云ふも、今は廢頽せり。境内の南なる小池を光明池と云ひ、昔は多摩川の流域に方りし所ならむと言ふ。

羽田の稻荷 羽田の穴守稻荷は近來信仰者多きため、大に繁昌す。大森の東南一里二十五町羽田村字鈴木新田の洲に在り。羽田を扇ヶ浦と云ふに對して此處を要島と稱す。大森より行けば、海岸より乗合船に乗するも宜し。又蒲田まで電氣鐵道に乗りて、それより人力車を走らすれば、片道十五錢許にして達す。此地礦泉あり、皮膚病、子宮病、痔、痲疾等に効あり。旅館には泉館、要館、羽田館、長流館等ありて、孰れも海上の眺望に富む。此地には川崎驛より行くも可なり。其人力車賃卅五錢内外にて、電氣鐵道の便

を借れば蒲田にて下車すべし。

川崎附近

川崎町は東海道の第二驛にして、殊に大師堂あるが爲に、古來甚だ賑ふ。鐵道停車場は字堀之内に在りて、其前には京濱電氣鐵道の停車場あり。

川崎大師堂 金剛山平間寺と號し、停車場よりは二十七町に在り。電氣鐵道は六郷川の堤を往復す。(片道五錢)傳へ云ふ、大治年間、此地の平間某なる者、海中より弘法大師の像を獲、之を小堂に安置したるが、今の大師堂の起源なりと。十間四方なる本堂の左には新大日堂あり。近來其南隅を公園地とし、泉池を穿ち、梅林を造り、益ます風致を添ふ。門前には雜貨店飲食店など軒を並べ、また乞食群居して、參詣人の同情を求む。途中の堤上には櫻樹多く、花時には電車の花下を走るとき、宛も花もて造れる隧道の中を行くの思あり。また大師堂に近き堤の下には、洲河原の桃林あり。

小向梅林 川崎町の西北に當り停車場よりは二十町許にして達す。六郷河畔に在りて、境内甚だ閑雅なり。此れより數丁にして矢口の渡津(大森附近の部參照すべし)に達す。

す。また六郷川に沿うて十數丁廻れば小杉村には、北條時頼が開基せりといふ最明寺あり。生麥村 一村落到過ぎざるも、曾て文久年間島津久光の從臣が、主人の鹵簿の前を横ざりたる英國人を斬り、爲に後來重大の國際事件を生起して名高き所、地は鶴見停車場より數丁を隔て、東海道の路傍に在り。今は英人の碑を建つ。

横濱近傍

神奈川町 川崎鶴見の二驛を過ぎ、次に達するは此地にて、東海道各驛中の重要な市街、古來江戸より八里、一日程と稱せられたる所、開港の初、外國人は此地を開港場と爲さんことを要求したるも、其地の東海道の要衝に當り、往來の士人が外國人に暴行を加ふるを憚り、當時は神奈川灣を隔てたる横濱を以て、神奈川の一部と稱し、欺きて開港場と爲したるにて、今も横濱に在る縣廳を神奈川縣と稱するは、之に基づく。其後横濱は漸やく發達し、神奈川灣は埋め立て、兩市街は殆ど全く接続するに至りて、神奈川町の繁昌も益ます加はり、終に明治三十四年四月、横濱市の疆域を擴張し、神

奈川もまた横濱市の一部分とは爲りぬ。停車場後方の丘陵を高島山と稱し、最も海上の眺望に富む。櫻の名所の豊顯寺は、神奈川停車場より二十町なる三ツ澤に在り。又神奈川の東方に接する漁村の子安村には、浦島太郎の靈を祀れりと云ふ浦島寺あり。護國山觀福寺と號し、淳和帝の勅願所にて、檜尾僧都を開山とす。神奈川停車場より西方横濱停車場の間には、曾て高島嘉右衛門氏が、始めて鐵道の敷設を受負ひ、神奈川灣を埋立てたる爲に、其名を冠したる高島町あり。また其西の内田町を過れば、既に舊來の横濱町に入り、横濱船渠會社の傍を過れば、忽ち横濱停車場に達す。

横濱港の沿革 『武藏風土記』によれば、舊時の戸數僅に八十七戸といふ小漁村も。(安政六年六月)開港場と定められてより未だ五十年に滿たざるに、全國第一の開港場として最も繁華なる一市とはなりぬ。其間の沿革を略記すれば、安政六年に、海岸通、北仲通、本町、南仲通、辨天通先づ開かれ、萬延元年には、港崎町に遊廓開かれ、元治元年には東波止場築かれ、維新後に至り、益す長足の進歩を呈し、鐵橋架設、京濱乗合馬車開業、電信局設置、新聞發刊、瓦斯局設置、京濱開鐵道全通、三菱汽船會社支店の開始、横濱正金銀行開業等を始め、其他百般の事業は、明治十五年以前に起り、同十五

年には伊勢佐木町通りに、劇場、勸工場、飲食店等續々増加し、全年遊廓は眞金永樂の二町に移轉し、二十年水道工事成り、二十二年市制を實施し、二十九年五月築港成り、三十二年七月改正條約實施せられて、外國人の内地雜居自由と爲りしも、居留地は毫も影響を受けず、益す繁昌を加へ、三十四年四月戸太町、神奈川町、本牧村、根岸村、中村、吉田新田等を合して市域を擴張し、全十二月水道復管工事落成せり。其間尙ほ幾多の事業屢々として進み、今や人口三十萬の大都會たり。開港當時の在留外國人の數は、僅に四十四人なりしが、今は七千餘人と註せらる。當時外交の衝に當れる阿部伊勢守、堀田備中守、或は井伊掃部頭等をして、今日の盛況を見せしめば、當に驚嘆措く能はざるべし。

横濱市中の巡覽 横濱停車場を出て、花咲町の川岸を傳へて行けば坂あり。紅葉坂といひ、丘陵を野毛山と稱す。丘上の太神社は明治三年の遷座にして、横濱市の總鎮守たり。境内より四方を望めば、本牧の岬より、左は鶴見川の口まで指點し得べく、迺かに房總の山岳を眺むべし。春は鶯、櫻、秋は紅葉坂の楓、皆な賞するに足る。更に舊奉行所跡の左を前に石段を下れば、野毛の不動あり。此地より、左は神奈川沖より港内の

本日漫遊案内

全部、右は遊廓所在地までを下瞰すべし。此附近には雑貨店、飲食店多し。殊に見晴亭と稱する汁粉屋は尤も名あり。更に野毛の切通しを下りて、都橋に出て、花咲町より一旦停車場前に降り、辨天橋を渡れば、本町通に出づ。南仲通り、辨天通相連なり、大商店櫛比す。日本波止場は此附近の海岸に在り。さて本町一丁目より横濱會館、郵便局、縣廳、英米露の領事館、水道局、電話交換局、日本郵船會社等を一見して、税關を廻れば西波止場に出づ。巨船の横附となりて、荷物を揚卸するさま實に壯觀なり。其棧橋上より望めば、灣の内より神奈川町まで眼前にありて、遙かに富嶽の雲に聳ゆるを見るべし。更に海岸道の東波止場、其他諸種の洋館を見て、グランドホテルの傍より、佛國領事館、米國海軍病院を左にし、谷戸坂を登れば山手なり。坂を登り盡したる所には公會堂あり。演劇音樂會などの開かる、所にして、是より左方に行けば、斷崖の上より東京灣を下瞰すべし(此所より本校に通ずる道あり)また公會堂より右方に行けば、外國人共同墓地の傍に出づ。また直行して、山手本町通を南に行けば、フェリス女學校、山手公園等あり。同公園より戻りて、代官坂を下り、元町増徳院を見、前田橋を渡り、山下町より南京町に到れば、清國商人の俱樂部なる中華會館と、もに關羽廟あり。

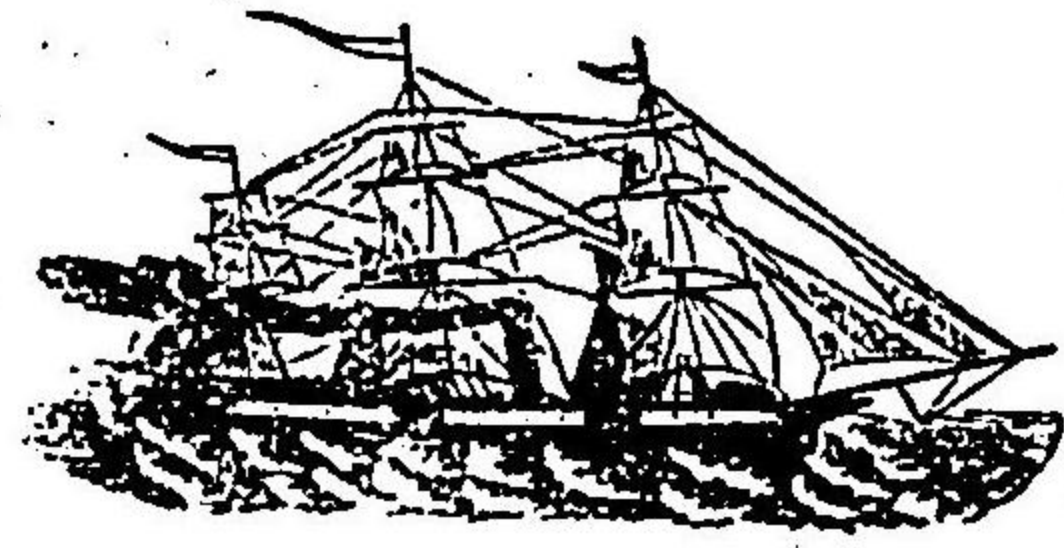
東海道附近

是より再び本町通に出て、横濱公園に行き、住吉町又は尾上町を通じて、馬車道に出て、吉田橋を渡れば、賑かなる伊勢佐木町に達す。同二丁目には羽衣辨天社あり。以上にて停車場に近き名所の重なる者を紹介し終りぬ。(横濱市全圖及口繪寫眞参照すべし)水陸の交通 今また横濱港より、陸上の交通には東は神奈川町を経て東京に往來する汽車一日三十回、西には平沼または程ヶ谷停車場により、京都、大阪、神戸の各地と往來し、若くは近く大磯、鎌倉、横須賀等に往來するもの日夜斷へず。別に横濱より起りて八王子に至り、官設中央線に接続すべき横濱鐵道も、既に敷設の許可を得て、遠からず起工せんとす。更に水上の交通を見れば、内國沿岸は言ふも更なり。海外に向つて東西の航路は、此地を起點とし、若くは此地を経由するもの殆ど屈指に堪へざらん。今其の定期航路を舉れば左の如し。

- 横濱小樽間東廻り。 荻ノ濱、函館、小樽間を往復す。此の航路は神戸に接続す。
- 全西廻り。 神戸、尾道、下關、境、敦賀、七尾、伏木、直江津、新潟、酒田、土崎、能代、函館、小樽間を往復す。
- 小笠原島航路。 八丈島、青ヶ島、鳥島、父島、母島、南硫黃島、中硫黃島間を往復す。

日 本 漫 遊 案 内

四日市航路。半田、津、四日市間を往復す。
 打狗航路。神戸、宇品、門司、長崎、基隆、澎湖島、安平、打狗間を往復す。
 此他日本郵船會社の歐洲航路
 (神戸、門司、香港、新嘉坡、
 坡南、古倫母、蘇士、ボートセ
 ット、馬耳塞、倫敦、アントワ
 ープ經由) 米國航路(神戸、門
 司、上海、香港、ヴィクトリア、
 シヤートル) 上海航路(神戸、
 下の關、長崎、上海) 濠洲航路*
 ビーオー汽船會社、北獨逸ロイド會社、ベン汽船會社、
 平洋汽船會社、太平洋汽船會社、埃太利ロイド汽船會社、
 ル汽船會社、チャイナユニチエアル會社、清國航海會社、
 ションワラック商會、
 * (神戸、門司、長崎、香港、マ
 ニラ、木曜島、タウンズヴィル、
 ブリスベン、シドニー經由) 孟
 買航路(神戸、門司、香港、新
 嘉坡、古倫母、孟買經由) の外
 に、東洋汽船會社、太平洋郵船
 會社、東洋汽船會社、佛國汽
 船會社、加奈陀太平洋鐵道會社
 漢堡亞米利加汽船會社、北太



東 海 道 附 近

印度支那汽船會社等、皆外國航路を有すれども、航路は繁雜なるか故に省略す。
 市内の車馬。 近く五十年間に發達したる土地、全國の各地より入り込む人の多き丈
 け、風俗淳良ならざれば、人力車の如き、先づ新來の遊覽者をして膽を潰さしむるほ
 ど適當の要求を爲すことあり。故に今は畧ぼ定まりたる賃錢を示せば、十丁以内八錢、
 廿丁以内十三錢、二十丁以上一里以内十八錢位にて、降雪暴風雨の時は規定の外に五割
 を増し、待合せの時は一時間七錢、重量二貫目以上の荷物を携ふれば車賃の二割を増加
 すべく、又一日雇切は一圓位とす。尚ほ横濱停車場より見物廻りの車賃は五十錢以内に
 て、市内重なる部分を通過して、停車場に歸るを得べし。次に乗合馬車は龜の橋、豊國
 橋、錦橋、戸部六丁目、平沼停車場間を往復す。
 旅店。 是到る所に在り。宿泊料は、普通七十五錢位より上等一圓五十錢位とす、尾
 上町には海老屋、太田屋、徳岡屋、中村屋、小田原屋等、本町には廣島屋、松井屋、津
 久井屋、大勢屋、高野屋、俵屋等、住吉町には和田屋、山崎屋、海岸通には蓬萊屋、花
 咲町には信誠館、不老町には勢力、辨天通には鹿島屋、福井屋、長野屋、西村等、北仲
 通には村田屋、大島屋、萬治等、太田町には讀岐屋、伊東屋等、青木町には樹村、大

本日漫遊案内

里屋等、神奈川町には新羽屋、宮崎町には新松、野毛山には交集館、吉田町には九井屋、元濱町には松坂屋等あり。其の他山下町には外國旅館として名高きグランドホテル、クラブホテル、ゼネーブホテル、ライトホテル、グロージンホテル、セントラルホテル、オリエンタルホテル等あり。根岸町にはシェイクスピアホテル、山手町にはメーブルホテル等あり。此等西洋式旅館は平素料理店をも兼ねるが故に、一寸立寄りて様子を見るも亦一興ならむ。

料理店及飲食店 到る所に在り。眞砂町の富貴樓、渡鳥、青木町の樂々、對灣館、丁子屋、明石、多景家、名古屋、柏屋、昔屋、田中屋、伊勢佐木町の萬錢、荒井屋、三茂、本牧町の櫻家、鏡海樓、神奈川町の濱源、太田町の佐野屋、武藏屋、西戸部町の大瀧樓等何れも名あり。又停車場前にはあづま家あり。西洋料理にては、港町の長養軒、停車場前の川村屋、伊勢佐木町の高砂、南仲通の長榮亭、西洋亭、野毛町の富貴亭、境町の旭亭、萬華亭、太田町の日盛樓等あり。支那料理には、南京町に遠芳樓、聘珍樓、永樂樓、成昌樓、伊勢佐木町に博雅亭等あり。何れも輕便に用を辨ず。

貸席には、港町の美名登屋、羽衣辨天社内の若柳、紅葉坂の喜らく等あり。待合亦各

東海附近

所に多く、遊廓は眞金町と永樂町の兩地に二千餘人の娼妓あり。劇場には羽衣座(羽衣町)喜樂座(賑町)賑座(全)雲井座(雲井町)相生座(松ヶ枝町)平沼座(平沼町)長島座(長島町)等あり。寄席も亦各所に在りて、色物、義太夫、講談、浪花節、源氏節等を以て客を招く。此他伊勢佐木町には遊戯場、銘酒屋軒を列ねて怪しげの婦人の首を出すあり。また廻工場には伊勢佐木町に帝國商品館、同横濱館、松ヶ枝町に東洋館等あり。

本牧海水浴場 本牧海水浴場は横濱停車場よりは約一里に在り。順路は辨天橋を渡り、本町通を東南に行き、元居留地より谷戸橋を経て谷戸坂を登り、元山手居留地を眞直に東南に向ひ、坂を下りて、田圃の間を四五丁行けば、月見館と言へる海水浴場に達す。海水清澄ならざれども、危険なきが故に、婦人小兒の游泳に適す。本牧岬にはまた十二天神の社あり。

杉田及金澤近傍

杉田梅林

横濱停車場の南方約三里に在る梅林は、古より名あり。横濱よりは根岸

に出で、屏風浦に沿うて行くべし。根岸より乗合船の便もあり。
 杉田村は海濱に在りて、古來梅林を以て名高し、其地は觀音崎、富津の兩岬左右に突出し、東は上總の木更津と相對して、鹿野山を望む。全村梅ならざるはなく、後方の丘上より望めば佐藤一齋が所謂「一村皆白雲世界、其巔を極めて俯瞰すれば、花光雲影、遠近相含み、而して海灣晶々然、一大鏡を磨き、漁舫其間に往來す」杉田村後方の丘陵を越て行くと二里弱にして金澤に達す。又横濱より杉田を通せずして金澤に*

金澤八景 金澤は武州久良岐郡に屬す。杉田梅林より山を越ゆれば、二里弱にして達すべし。所謂八景の勝は、大明の心越禪師が、支那の西湖に似たりとて準擬して八詠の詩を賦したるに始まり、近江八景と、もに、最も名高し。(口繪寫眞参照すべし)

至る街道大岡川村には、瑞應山弘明寺あり(街道の右に入ると十餘丁)弘法大師開基の古刹、阪東第十四番の觀音堂なり。其二三町奥には、中里温泉あり。更に五七丁西北に行けば、普門院の櫻とて、唯一本の名高き櫻あり。



洲崎晴嵐
 滔々驟浪歛餘暉。滾々狂波遶竹扉。市後日斜人靜情。行雲流水自依々。
 瀬戸秋月
 清瀨涓々不繫舟。風傳虛瀨正中秋。廣寒桂子香飄處。共看水輪島際浮。
 小泉夜雨
 暮雨淒涼夢亦驚。甘泉洞々聽分明。蓬窓淹蹇無相識。腸斷君山鐵笛聲。
 乙艦歸帆
 朝宗萬派遠連天。無恙輕帆掛日邊。欸乃高歌落雲外。依稀數艇到洲前。
 稱名晚鐘
 夙昔名藍成覺地。華鐘晚扣若鯨音。幽明聞者咸生悟。一片迷離祇樹木。
 平瀨落雁
 列陣沖冥堪入塞。荻蘆蕭瑟幾成隊。飛鳴宿食恁棲遲。千里傳書誰不愛。
 內川暮雪
 廣陌長堤竟沒潛。奇花六出似鋪緞。渾然玉砌山河色。遍覆危峯露些尖。

野島夕照

獨羨漁翁是作家。持竿盡日樂西斜。網得魚來沽酒飲。披簑高臥任堪誇。
此八景を一時の中に見むには、能見堂を最上とす。堂は金澤の西北なる擲筆山にあり
(杉田より行く途中左方の丘阜に在り)これ往昔は大堂宇なりしと言へど今は哀なる小堂
あるのみ。又此地より眺めたる八景も、麓の滄海變じて田圃となりしが故に、稍や景趣
を失へり。

此地金澤には金龍院あり。境内の九覽亭は亦八景を眺むるに適す。此處より瀬戸明神
社、辨天祠に詣て、旅亭東屋の前を過ぐれば稱名寺に達す。これ北條實時、及其子顯時
の建立にして、審海和尚を開山とす。有名なる金澤文庫は此境内に在り。
金澤海濱は海水浴に適し、旅館には東屋、千代本、野島屋等あり。孰れも眺望に富め
り。此地より鎌倉に至るには、朝夷切通しを過ぎ、行くと二里許にして、鶴岡八幡社前
に達す。又横須賀へは、瀬戸の懸橋より乗合船出づ。また逗子へは新道ありて、往來最
も便なり。

鎌倉附近

歴史上著名なる鎌倉は、山水明媚、今は阪東無比の一大遊園として稱せられ、夏冬共
に來遊する客甚だ多し。げに海洋の美を扣へて、鎌倉幕府以來の舊蹟を保存するが故に
四時遊覽者の跡を絶たざるも宜なり。其海岸由井ヶ濱は、海水浴に適し、附近には都人
の別荘を構ふる者多く、民家は室を貸して避暑客の便を謀る。旅館には長谷の三橋(停
車場より十八町)八幡前の同支店(全六町)全對鶴館、丸屋等の外に、柳都亭、砂井亭、
富田屋等あり。材木座には、光明館(停車場より十八丁)ありて、鑛泉温泉浴を設く。
又西洋式の旅館には、海濱院(停車場より十丁)あり。宿泊料は海濱院の四圓を除きて
は、孰れも一圓五十錢以下三十五錢の數等に分つ。東京より鎌倉に至るには、横濱より
程ヶ谷驛を経て、大船驛に至り横須賀線に乗り換へるなり。
程ヶ谷附近 程ヶ谷停車場は、東海道鐵道の神奈川直行線も、横濱經過線も、とも
に落合ふ所にして、元と東海道五十三宿中の一驛なり。停車場より七町許にして小兒虫
封の神たる外川神社あり。全三丁許に、北條政子が化粧の水に用ひたりといふ御臺所の

水あり。また程ヶ谷町には、寛永年間の草創に係る樹源寺あり。澤庵和尚が鎌倉紀行に「かしの里の此方より左につきて行末こそ金澤へ行く道なれと、その里の名を問へば帷子の里とさきて、地白なる霜の朝は如何ならむ夏ぞ来て見ひかたびらの里」と詠じ准后が「いつきてか旅の衣をかへてまし風うら寒さかたびらの里」と詠じたるは今の程ヶ谷町字帷子町なりとか。

程ヶ谷を發し、大船にて下車せば、其北半里許に在る田谷の穴を見るも可なり。洞窟は田谷山定泉寺に在りて、洞内の壁面には觀音像あり、坑内寒冷なり。又大船驛より鎌倉街道を行く半里許にして、圓覺寺に達す。(後に説くべし)これより鶴岡八幡に至る亦半里とす。次に全停車場より東一里には今泉山圓宗寺あり。境内には瀧あるが故に來遊する人尠からず。

鶴岡八幡宮 鎌倉停車場より、老松の並木ある大道に出て、左方を望めば、有名な鶴岡八幡宮の森を見るべし。行て七丁にして境内に入る。蓮池、赤橋、辨天社、新橋、若宮(仁徳天皇を祭る)白旗神社(頼朝を祀る)等の外、石燈の下には静御前の舞ひし下拜殿あり。石燈の左側には公曉が隠れて實朝を要撃せし大銀杏樹の往昔を語るあり。

石段を登つて、樓門に入り、拜殿に達すれば、左右に廻廊あり。茲には源氏に縁故ある寶物を陳列して縦覧に供す。又社殿の傍より後丘の白旗山に上れば、眼界殊に廣濶にして源氏三代頼朝の蹟を一望の下に見るべし。そも鶴岡八幡宮と稱するは、康平六年源頼義が、山城石清水の八幡宮を勸請したる神社にして、應神天皇、神功皇后、大仲媛神の三神を祭る。昔は源氏の守神にして、今は國幣中社に屬す。其一の華表二の華表は、由井ヶ濱に近く、松聲濤聲相和するの地に立てらる。八幡宮を出て、東に向ひ行く四町にして左折すれば、

頼朝の墓 あり。高さ五尺餘の五輪塔にして、此地より下瞰したる田圃は、昔源氏三代の館ありし跡なり。其傍には大江廣元及島津忠元が墳墓あり。墓地草深く、松聲悲調を帯び、轉々懐古の情に堪えざらしむ。

往柄天神 頼朝の墓の東隣に在りて、本社中央に菅公束帶の像を置く。鎮座の年月不詳なれど、七八百年以上の舊祠たるは明なり。此東は鎌倉宮にして、大塔宮護良親王の尊靈を祀る。官幣中社なり。社殿清楚にして、自ら襟を正さしむ。本殿の後方には、足利尊氏の爲に、親王の幽せられたまひし土牢あり。

り。坑内八疊餘を敷くべく、晝尚ほ光薄くして鬼氣凄然たり。鎌倉宮の側より北に入る十町許の處には、北條貞時の開基せる覺圓寺あり。此地を藥師堂ヶ谷と稱するは、此寺の本尊に運慶作藥師如來あるが故なり。

荏柄天神の南なる分岐道の右を取りて、滑川に架せる歌橋を渡り二町許行けば、左側には、坂東三十三番の一たる、杉本觀音あり。行基菩薩の開基とす。其東四町には淨明寺あり。臨濟宗に屬し、鎌倉五山の第五たり。是足利義兼の草創にして、境内松樹鬱々たり。此東隣を公方屋敷となす。足利氏關東管領の館ありし地なり。又東北に當れる丘山には、稻荷祠あり。藤原鎌足の勸請なりと傳ふ。

光觸寺 淨明寺を出て、東に泉水橋、明石橋を渡つて十町許行けば、時宗の光觸寺あり。寺號の額面は、後醍醐天皇の御宸筆なり。是より東北十町許にして、朝夷奈切通を越へ、尙ほ東に向へば金澤に達す。鎌倉停車場より金澤迄二里とす。

是れより再び鎌倉停車場前に歸り、郵便局側より折れて滑川を渡り、東に行く數町にして妙本寺あり。日蓮の古跡にして、境内には比企一族の墓あり。是より東數町間に大法寺、妙法寺、長勝寺等あり。

光明寺 停車場より南十八町なる材木座に在り。北條時頼の兄經時の建立にて、良忠を開山とす。山門の額面は後花園天皇の御宸筆なり。其門前より南方海濱を行けば、源爲朝の矢の根井なり。又光明寺の北隣を補陀落寺とす。文覺上人の開基なり。

建長寺 八幡宮の西側に沿うて行くと數町、巨福呂坂を越ゆれば巨福山建長寺あり、鎌倉五山の第一にして、北條時頼の建立、宗の大覺禪師を開山と爲す。寺域五千二百餘坪ありて、七株の白楨、蓮花の銅盤、山門樓上の十六羅漢（今は八體を存するのみ）開山堂等あり。本堂欄間の天人は、左甚五郎の作と云ふ。寺内には頼朝が富士牧狩に用ひし陣太鼓、陣鐘を有す。又方丈龍王殿の後なる丘を勝上嶮と稱し、富士、相模灘の風景を一眸の中に納むべし。

圓覺寺 建長寺より數町にして、左方に長壽寺あり。其西北數町ならずして鎌倉五山の第四たる淨智寺あり。其東北數町には明月院あり。淨智寺より西北數町にして圓覺寺に達す。圓覺寺は瑞鹿山と號し、五山の第二たり。北條時宗の建立、宋の佛光禪師を開山とす。總門の額は、後光嚴天皇の御宸筆、山門寺號は花園天皇の御宸筆なり。又鐘樓の洪鐘は北條貞時の納むる所たり。寺域總計一万七千坪にして、佛日庵、續燈庵、澤

木園、宿龍池、妙香池、坐禪窟、虎頭岩等、皆境内に在り。現管 長は釋宗演師にして専ら門道場を監督せらる。

圓覺寺より戻りて、長壽寺の傍より右方に折れ、龜ヶ谷坂を越ゆれば扇谷に出づ。右折して鐵道線路を横ぎれば、數十歩にして海藏寺門前に達す。本堂の傍には十六の井あり。底脱井亦其門前に在り。門を出て、右方の小路を行けば、化粧坂ありて、其左方には景清の土牢あり。

葛原岡神社 化粧坂を登り盡せば葛原岡神社あり。此地は南朝の忠臣藤原俊基が斬罪に處せられし跡にて、長く草莽々たりしが明治十八年、聖旨に依り特に從三位を贈り其地に靈を祀つて葛原岡神社と稱せり。

壽福寺 扇ヶ谷に在り。五山の第三にして、停車場よりは北五六町にして達す。平政子が建立に係り、境内には、政子、實朝の墓の外に、梵なし鐘といふ名鐘あり。停車場より此處に至る途中には望夫石あり。又壽福寺の東に當れる山を源氏山と云ふ。更に壽福寺門前より海岸に通ずる道を今小路と稱す。其右手には御用邸あり。御用邸を拜して後、裁許橋を渡り、行く二三町にして長谷道に合し、此處より右折して行くこと、四五町にして長谷に入る。

長谷觀音 停車場よりは半里許に在り。寺を海光・山長谷寺と號し、阪東第四の札所とす。本堂は高丘の上に在りて、此地より下瞰すれば由井ヶ濱脚下に在り。堂内には二丈六尺の十一面觀音を安置す。これ佛工春日の作なり。

長谷大佛 觀音門前より左方に行く二町許にして、有名なる大佛所在地に達すべし。大佛の高さ三丈五尺、膝廻り五間半、腹内には觀音六躰、阿彌陀三躰に入る。これ建長四年の鑄造にして、露佛なれども風雨の害を知らず、慈悲圓滿の相を以て參詣者を迎ふ。(口槍寫眞参照すべし)

長谷は鎌倉中最も繁華なる地にして、觀音門前には旅店、飲食店、遊戯場櫛比す。權五郎社亦此地に在り。偕て海岸に向ひ、街道を右折して行く三町許にして星月夜の井あり。更に西行三町許にして極樂寺切通しを過れば極樂寺あり。是より稻村崎、七里濱、腰越を経て江の島に至る。其間一里、極樂寺切通し片瀬間には電車鐵道通ず。

由井ヶ濱 長谷の海濱に出づれば西に靈山岬、東に飯島崎を眺むべし。其間一帯の海濱を由井ヶ濱と稱す。稻瀬川、滑川、豆腐川の三小流海に注ぎ、波濤靜かにして、白

砂美しく、遙かに三浦半島の翠黛を瞻望すべく、松籟、波浪に和して天樂を奏す。此濱たる、源氏の世には弓馬の練習所に充てられ、今は紳士淑女の遊歩場となりぬ。心なき者は、只面白く遊ぶべく、心ある者は六百年前の歴史を追想して、感慨極まりなかるべし。

以上にて鎌倉内の重なる名所を録し終りたれば、是より滞在する人の爲に、二三項を追加す。

- 五水 日蓮乞水(三崎街道名越切通の手前に在り) 梶原太刀洗水(朝夷切通坂下)
- 銭洗水(化粧坂上佐介ヶ谷隠里) 金龍水(建長寺西門前) 甘露水(同寺の北隅)
- 十井 六角井(材木座飯島) 石井(長勝寺内) 星井(極樂寺切通し下) 鐵井(雪の下若宮小路) 棟立井(圓覺寺内) 瓶井(明月院後) 甘露井(淨智寺) 泉井(泉ヶ谷) 扇井(扇ヶ谷飯盛山) 底脱井(海蔵寺前)

江の島近傍

此他七切通し、十橋等あれど繁雜なれば省略す。

稲村崎 極樂寺切通しより數丁に在り。新田義貞が鎌倉攻撃の際、大刀を海中に投じて退潮を祈りし地なり。是れより腰越村に至る一里餘の海濱を七里濱と稱す。街道の北邊には日蓮上人袈裟掛松あり。又途中には行逢川あり。是れ日蓮上人瀧ノ口にて遭難の砌、奇瑞に驚きて、鎌倉に急報せむとする使者と、鎌倉より赦免を報ずる使者とが此川にて行き合ひたるが故に此名ありといふ。又此海岸は、寶徳年間、足利成氏兩上杉の鎧を削りし古戰場たり。

腰越村にあり。義經の鎌倉に入らむとするや、頼朝の怒に觸れて許されず、此地に留りて、辨慶をして陳辨書を草せしめたり。之れを世に腰越狀と稱す。今尙當寺には硯の池あり。

日本三辨天のひと稱せらるゝ江の島辨天は、片瀬村を去る五丁許なる海上に獨立する巖島にあり。鎌倉より此地に至るには、七里濱より腰越を経べけれど、東京より直行せむには、藤澤驛にて下車すれば、南方約一里にして達すべし。此間電氣鐵道ありて、片瀬村迄行く。賃錢十錢なり。(電車は、藤澤片瀬間、藤澤鶴沼間、鶴沼片瀬間、片瀬極樂寺切通し間) 又人力車もあり。別に停車場の南五町許なる片瀬川の橋下より片

瀬村に通ふ乗合船あり。片瀬村より海岸砂中を行く數十歩にして、棧橋を渡れば島内に入る。是より道の兩側には金龜樓、惠比壽館、岩本樓、讃岐屋、江戸屋、北村屋、堺屋等の旅店あり。また貝細工を賣る家軒を列ぬ。其間坂路を登れば、邊津の宮、中津宮を見て、奥津神社に達す。此三社を總稱して江島神社(即ち辨天)と云ひ、今は縣社に屬す。祭神は、多紀理毘賣命、市寸島比賣命、多岐都比賣命の三神とす。奥津宮より崖を下れば見ヶ淵あり。これ鎌倉建長寺の兒白菊の投身せし跡なりとか。是より蒼來を安置す。洞窟を出て、歸途、西端に行けば、魚板石あり。岩上平坦にして蓆の如し。此巖島の周圍十八町餘、船を雇うて一周を試みるも亦興多し。(口繪寫眞参照すべし)



片瀬村 片瀬川河口には片瀬館なる旅館あり。海水浴場たり。次に當村に於て名高瀬村に通ふ乗合船あり。片瀬村より海岸砂中を行く數十歩にして、棧橋を渡れば島内に入る。是より道の兩側には金龜樓、惠比壽館、岩本樓、讃岐屋、江戸屋、北村屋、堺屋等の旅店あり。また貝細工を賣る家軒を列ぬ。其間坂路を登れば、邊津の宮、中津宮を見て、奥津神社に達す。此三社を總稱して江島神社(即ち辨天)と云ひ、今は縣社に屬す。祭神は、多紀理毘賣命、市寸島比賣命、多岐都比賣命の三神とす。奥津宮より崖を下れば見ヶ淵あり。これ鎌倉建長寺の兒白菊の投身せし跡なりとか。是より蒼來を安置す。洞窟を出て、歸途、西端に行けば、魚板石あり。岩上平坦にして蓆の如し。此巖島の周圍十八町餘、船を雇うて一周を試みるも亦興多し。(口繪寫眞参照すべし)

さは、日蓮上人遭難の地たる龍の口の寂光山龍口寺なり。鶴沼海水浴場 江の島と相對し、大磯に至る海岸なる鶴沼は、西南に豆相の連山と相對し、海氣清涼なれば、海水浴場に適當す。東屋、鶴沼館、待潮館、三井樓等の旅館あり、宿泊料亦比較的に廉なり。此地藤澤驛を去る二十町、電車の便あり。江の島よりは渡船の便あり。藤澤の遊行寺 藤澤停車場傍よりは、鶴沼、江の島に至る電車の便あり。又停車場の北十二町の字大富町には、時宗の本山たる藤澤山清淨光寺(俗に遊行寺と稱す)あり。正中二年侯野五郎の建立、香海上人を開山とす。寺域五千四百九十五坪を有す。境内に小栗満重を祭れる小栗堂あり。寺寶には鬼鹿毛(満重の愛馬)の鬘、照天姫の古鏡等あり。江の島鎌倉の見物序に一見するの價あり。此他大磯に通ずる海岸には、鶴沼に隣する明治村字辻堂に海水浴場あり。旅館を明治館と言ひ、引地川に小舟を浮べて、海岸浴場に客を送迎す。茅ヶ崎海水浴場 茅ヶ崎停車場の南八丁の海岸、亦海水浴場たり。海は遠淺なれば危険の憂なく、且つ古より稱せられたる入景の勝あり。姥島歸帆、柳島落雁、南湖晴

嵐、鳥居戸夕照、高砂秋月、真崎夜雨、鶴ヶ峰暮雪、八雲晚鐘これなり。此地又南湖の稱ありて、旅館には茅ヶ崎館、中村樓、海水館、萬松樓、松旭閣、松本樓、等あり。宿泊料は茅ヶ崎中村の二館を除くの外は七十錢位なり。

三 浦 半 嶋

東京灣と相模灣との中間、相州三浦郡は海中に斗出して半島を爲し、東岸には則ち武藏の金澤より相模の横須賀浦賀等の勝區連なり、兩岸には逗子三崎等の遊覽地逶迤として在り。今其の三浦半島に到るには、東海道鐵道線大船驛より岐れ、鎌倉、逗子を経て、横須賀まで鐵道の便あり。又東京灣漁船會社の東京三崎間の航路は、浦賀、下浦、松輪を経て、三崎に至り、同東京浦賀間航路は、金杉、品川、横須賀を経て、浦賀に至る。兩航路共に東京靈岸島を發着所とす。

逗子海水浴場 西に豆相の連山に對し、富嶽の雲表に聳ゆる逗子の海濱は、水清く、浪穏かに、土地の空氣亦清冷なれば、避暑地として大磯、鎌倉にも劣らざる地たり。海濱は逗子停車場を去る西南十町許に在りて、旅館には、日越川に臨める養神亭を始め、

日蔭の茶屋、柳屋等あり。宿泊料は一圓以下六七十錢位なりとす。逗子村延命寺には、北條早雲と戦ひ、敗れて此地に遁れ、從者と共に自殺せる三浦道春の墓あり。又此地より東十數町なる櫻山には、平維盛の嫡男六代御前の墓と稱するあり。東鑑によれば、六代御前は、鎌倉に捕はれ、此地にて斬られたるなり。小坪村は鎌倉郡及び三浦郡の境に近き一小村落なるが、治承年間、島山重忠が三浦義澄と戦ひし跡なり。

葉山海水浴場 三浦半島の西岸葉山村字下山口は、東宮殿下御用邸の在る地にして、逗子停車場を去る南一里半なり。道は海岸に在りて、逗子の日蔭茶屋前より、森戸の濱に出て名島の小島嶼を見つゝ行けば、青松簇生する岬角の海中に突出せるを見るべし。これ長者ヶ崎にして、海水浴場たり。旅館には長者園あり。御用邸御門を過ぎて、右折すれば此旅館に達す。江の島、大磯の海岸より豆相の連山、富士の頂は、坐して眺むべし。園の後なる山を旗立山と云ふ。これ北條父子が旗押し立て、和田義盛と戦ひし跡なりと。其麓の南に面する海岸を大崩と稱するは、往昔山岳壞れて海に入りし跡なればなり。又東十數丁の地に聳ゆる山を秋名山又は大楠山と稱す。海拔七百十二尺なれど、登臨すれば眼界豁然として開け、近國の諸山悉く指點し得べく、亦伊豆大島は鯨兒の

浮べるに彷彿たり。萬葉集に「あしがりの秋名の山にひく舟のしりびかしもよこはこがたに」とあるは此地の風景を詠じたものなり。

横須賀軍港 鐵路によれば逗子を發して、數多の小隧道を通過し、其間海洋を瞥見し、其の終に悉く開かれたる處に到れば横須賀停車場あり。其構内より望むも、軍艦、水雷艇の海上を飾つて壯觀極りなきを見るべし。横須賀軍港たる、本牧岬と觀音崎との殆ど中央に位し、更に港を包むに、箱崎、勝ヶ岬の二小岬角あり。町内最も繁華なるは元町、旭町にして其地維新前迄は、僅に三十餘戸の漁家ありしのみ。先づ停車場を出て、左折して右に斷崖、左に造船所に沿うて十二三町進めば、稻岡町に海軍鎮守府の正門を見る。大瀧町には東京横濱に航行する汽船發着所あり。これより二三町にして、勝地米の濱に達す。これ若松町の東端、海中に突出せる丘陵にして、上には日蓮宗の龍本寺あり。頂上よりは房總の翠巒を望み、眼下には猿島の砲臺を眺むべし。又停車場より右折して吉倉渡船場に至れば、長浦灣に通ずる運河に、小蒸氣船の往復するあり。長浦灣は、舊幕府の船廠を置かむとしたる地にて、地勢横須賀灣に似たれども、灣内狹隘なるがため、横須賀をして名を成さしめたり。今尙此海岸船越と稱する地には海軍水雷術練習

所、全砲術練習所等あり。次に横須賀より金澤に至る途中、十三峠には英人アダムス夫婦の墓あり。慶長五年彼れ我國に漂流し歸化して安針と稱し、幕府の用ふる所となり、三浦郡逸見の地に二百五十石を賜りぬ。彼れ十三峠の風景を愛し、遺言して此處に埋られたるなり。

衣笠城址 横須賀の南一里許なる衣笠村大字衣笠の山上は、三浦氏累代の城地にして、三浦大介義明に至り、島山重忠の爲に亡ぼされたる古戰場たり。大介が墳墓は衣笠山の東南八町許なる大矢部村満昌寺境内に在り。源頼朝が義明十七回忌の法會を開きたるは此寺なり。

大津海水浴場 横須賀より浦賀に至る途中、大津村には海水浴場あり。横須賀停車場より南一里許に在りて、旅館には勝男館あり。宿泊料は六十錢以上一圓位とす。海岸よりは左に本牧、右に觀音崎を望みて、風色佳絶なり。殊に四隣質樸なるか故に、學生の避暑地に適せり。

浦賀 嘉永六年六月三日米國海軍提督ペルリが、軍艦三艘を率ゐて始めて入り來り、帝國外交の端を開きたる浦賀町は、横須賀を去る南二里許に在り。今は衰頽の色あ

れど、道に歴史ある地なれば、町内亦見るべき物あり。愛宕山は西浦賀の後方に聳え、風景を以て名あり。又観音崎方向に當つて、走水村の走水神社あり。日本武尊を祀る。社殿は岡丘の中腹にありて、磴下の海岸は、海上二里を隔て、上總の富津洲と相對す。更に浦賀より海岸を傳ひ、千ヶ崎を廻れば半里ならずして久里濱に達す。此海岸こそ米國使節ペルリと、幕府の外、國奉行とが、始めて談判を開きたる地にて、日本近世の文明は、種子を此地に蒔かれたりと言ふも可なり。今はペルリ上陸記念碑を建つ。
松輪海水浴場 南下浦字松輪亦海水浴場たり。殊に婦女子の游泳に適し、別に漁魚の樂あり。此地横須賀を去る五里、浦賀を通じて行くべけれども、道路悪しくして不便多ければ、寧ろ東京灣汽船會社の船にて、直接に行く方却つて便なり。旅館には松輪館あり。

三崎 東京市百七十万の人衆か、日々に食する魚類の輸送地たる三崎町は、松輪と相去る一里許りの海岸、即ち三浦半島の南端に在りて、城ヶ島は大海の激浪を防ぐが故に、其海岸は常に平穩の海彼美しく寄せ來るのみ。此地昔より勝地として知られ、源頼朝の如きも屢ば來遊せり。今日櫻の御所、椿の御所、桃の御所などの跡は、皆な頼朝

の別館を構へたる地なり。椿の御所に近き小半島を尼ヶ崎と言ひ、風景優れたる地にして、森輪館なる旅館あり。又櫻の御所は今の寶藏山附近にて、桃の御所は、歌舞島に近き地に建てられしならむと。歌舞島は、頼朝が來遊の度毎に、歌舞を催したるか故に此名あり。此地三崎町中央には海南神社あり。藤原鎌足十二世の孫藤原資盈夫婦が靈を祀る。資盈は九州博多を領せしが讒者の難に遇ひ、遁れて薩摩に至らむとする海上、颶風に遭うて、此地に漂着しければ、詮方なく居を卜して村民を撫育せり。村民すれば、僅に二十錢にして到着すべし。



其徳に感じて社を建てしなり。旅館には前記の外に、青柳、紀の國屋、船本屋、内山、柳井等ありて、宿泊料は四十錢以上一圓迄を數等に分つ。此海岸は、海水浴に適したるは勿論にして、釣魚の慰もあり。東京よりは、東京灣汽船會社の汽船に乗

大 磯 附 近

海水浴場の元祖たる湘南の別天地、今は紳士豪商の別荘、軒を並ぶ大磯は、新橋停車場を去る四十哩七鎖の地にあり。藤澤、茅ヶ崎（此附近は既に案内せり）を過ぎて、馬入川を渡れば、平塚驛に着す。

平塚海水浴場 停車場の南七丁なる海岸は、海水浴場にして、おきな家、旭亭、港屋等の旅館あり。何れも一圓以下四十銭許の宿泊料なり。又停車場より海濱迄の車賃を十銭とす。海岸の風景佳絶なるのみならず、馬入川に赴きて鮎漁を催すも亦興多し。廻國雜記に「咲くと見え散ると見ゆるや風わたる花水川の浪の白玉」とある花水川は驛の西方を流る。

大山阿夫利神社 愛甲郡と大住郡とに跨れる大山には、縣社阿夫利神社あり。平塚驛より北方に向ひ、途中城島村の淨心寺に詣て、伊勢原を過ぎ、上粕屋村に至る三里餘の道には人力車を通ず。是より二十町にして大山町に達し、更に登ると一里卅町餘にして頂上に達す。神跡は日本武尊が坐し給ひしと言ふ巨石にて、祭神を大山祇命とす。山内には二重の瀧、良辨の瀧、大瀧等あり。又大山町には翠浪閣、伊豆屋、駒屋、玉木、平野屋、等數戸ありて、宿泊料は四五十銭位とす。富士登山者は歸途多く此神社に參詣す。

大磯海水浴場 大磯の地たる古より東海道五十三驛の一に數へられしか、海水浴場開かれてよりは、遽かに繁華なる一驛となりて、夏季の如きは、東京の一部を、此處に移したるの觀あり。騰龍館、招仙閣、長生館、松林館等は、何れも上等の旅館にして、之に次ぐものを甲喜樓、山本樓、百足屋、石井、角半、宮代屋、富士見館等とし、尙此他に手輕なる家には中村屋、健屋、杉本、油屋等あり。宿泊料は家によりて異れど、普通上等にて一圓以下七十銭位、中等にて六十銭位、下等にて四五十銭位なり。町内到處所遊戯場、飲食店にて、其間亦藝者屋もあり。近來は稍俗氣紛々たるを感するに至れり。此地にて訪ふべき名所には、停車場の西五丁、即ち驛の西端たる鴨立澤の西行庵あり。

これ西行法師が「心なき身にも哀は知られけり鴨立澤の秋の夕暮」と詠せし地にて、寛永年間俳諧師三千風が草庵を結び以來、俳諧の道場たり。千疊敷は停車場背後の丘岡にして、閑裕なる眺望あり。驛の中央延壽寺には、虎子石といふあり。本堂には曾我兄弟の木像あり。又往昔遊園ありし地、化粧坂は、停車場の東數丁、鐵道踏切ある所にて、今は化粧園子を賣る家あり。是より尙ほ進めば、數丁にして高麗山あり。これ亦海上の

眺望を以て名あり。高麗山の東一丁許にして花水川に架せるを花水橋とす。往昔頼朝か、花見むとて、此地まで来りしに、花既に散りし後なりしかば、花不見橋とは名付けたるなりと。これより東十四町にして平塚に達す。次に此地の名物には、筆草、五色石、虎子饅頭、菓子さぐれ石、等あり。(口繪寫眞参照すべし)

● 國府津海水浴場 汽車は大磯を辭し、二ノ宮驛を過れば國府津に達し、此れより北方に轉じて箱根の山中に入るなり。國府津停車場前の海岸を海水浴場とす。鳶屋、國府津館の旅店あり。宿泊料上等七十錢、並六十錢位なり。國府津停車場傍よりは、汽車の發着に接續して電氣鐵道車發着し、海岸に沿ひ酒匂、小田原を経て、箱根の湯本に至る。賃錢は國府津湯本間一等八十錢、二等五十錢、三等廿五錢とす。

● 酒匂海水浴場 國府津の西、酒匂川の北より流れて海に注ぐ東岸の松林にあり。國府津より電車に乗れば、二十餘町にして酒匂村に着す。此賃錢一等二十錢、二等十三錢、三等七錢とす。此地には松濤園ありて、園内には離座敷十數棟を建て、避暑客に貸す。借料は座敷の大小によりて異なれど、一月七八圓より四五圓位とす。所謂貸別荘の制なれば、飲食物は自身調ふるにて、却つて廉なり。

● 小田原町 元は大久保氏十一万三千石の城地たりし小田原の海濱も亦た海水浴場たり。國府津驛より此地に到る電車の賃錢は一等四十錢、二等二十五錢、三等十三錢とす。電車の停る所は、小田原電氣鐵道株式會社前にて、町の中央より稍西に寄りし地なり。其傍より伊豆の熱海まで人車鐵道ありて、米神、江之浦、眞鶴、吉濱、門川、伊豆山を経て、熱海に往復す。賃錢は伊豆山迄三等五十八錢、熱海迄全六十六錢とす。小田原はまた舊時東海道五十三驛中の重要驛なり。去れば方今旅館には、鷗盟館(宿泊料五十錢以上八十錢位)の外に、中松屋、小伊勢屋、片野屋等あり。町内にて一見すべきは、小田原北條氏の居りし城址を始め、城址内の報徳神社(二宮尊徳翁を祀る)大久保神社(舊藩主大久保氏の廟)小峰梅林の外に、字幸町の縣社松原神社(日本武尊を祭る)等あり。又此地より熱海に至る途中石橋村の西なる石橋山は、源頼朝と大庭景親との交戦せし跡にて、全村より十二町にして頂上に達す。風色明媚なり。

● 湯河原温泉 小田原より人車鐵道に乗じ、眞鶴に至れば海水浴場あり。源頼朝が、石橋山に敗れて、主従只七騎にて、安房へ走らむとて、船出せる地は即ち眞鶴港にて、今は海水浴場たり。眞鶴樓なる旅館あり。次に人車鐵道門川停車場にて下車し、街道よ

り右折して、阪路廿八丁を登れば、湯河原温泉場に達す。藤木川の兩岸に温泉湧出し、其數十餘所あり。昔は金創切傷に特效ある湯なりといひしかど、此他慢性胃加答兒、慢性腸加答兒、生殖器病等にも効あり。温泉宿には、伊藤、三河屋、梅屋、藤田屋、二階屋、富士屋、湯元屋、橋本屋、伊豆屋、箱根屋、上野屋、天野屋、中西等あり。總て輕便を主とし、客の好みに従つて賄す。此附近にて見るべきは、東一里の土肥の城址(城山といふ)土肥家香華院たる願禪寺、城山より一里山中の三十三鉢觀音、日金山(温泉場より上り五十町)等なり。

道了權現 國府津の西、松田停車場より南方二里なる南足柄村字關本なる最乗寺は、應永年間の草創にて、境内には有名なる道了權現あり。傳へ云ふ、最乗寺開山了庵禪師の弟子に道了なる者あり。怪力にして寺院草創の際獨力にて山上より巨木大石を運びさ。其死するや、忽然天狗と化して去り、未來永劫山内の鎮護を誓へり。これ道了權現なりと。夏時參詣者多し。

蛇水の瀧 松田驛の西隣、山北停車場より西南一里なる北足柄村の瀧川上流に三層の瀧あり。蛇水の瀧といふ。其附近には楓樹多し。瀧川の下流は酒匂川に合す。

箱 根 温 泉

箱根の地勢 相模の小田原町より、伊豆の三島まで、登り四里、降り四里と稱する箱根峠は、古來東海道第一の難路、絶頂に蘆の棚あり。南北に細長く、湖の南岸に箱根町あり。町の東端に關所を置き、幕政時代には嚴に往來の旅人を誰呵したる所にして、一條の溪流は湖の北岸より東方に流れ、仙石原、宮城野の諸村を経て、宮城野川と爲り、宮の下に至りて蛇骨川を合せ、早川と稱し、更に堂ヶ島、塔の澤、湯本の各温泉地を過ぎ、湯本の東南に至りてまた須雲川を合せ、小田原町の西に至りて海に注ぐ。而して須雲川は、蘆の湖の南岸、古關の傍なる屏風山、文庫山等の背後より源を發し、畑、須雲の諸村を経て、湯本村に至りて早川に會するなり。故に蘆の湖を頂上とし、湖の南北の兩端より、溪流を發し、湯本村に至りて一川となるまで、湖水と兩川との間は略ぼ三角形を爲す。有名なる箱根温泉は、其の早川より宮城野川の沿岸に散在し、温泉道は湯本より宮の下まで早川に沿ひ、宮ノ下より底倉、蘆の湯を経て湖岸に至り、箱根町に通ず。而して東海道の國道は、小田原町より湯本を經、須雲川に沿ふて須雲、畑の二村を經、

湖岸に至りて温泉道と會し、古關を過ぎ、箱根町を経て西に下り、三島町を経て沼津に通ずるなり。別に宮ノ下より底倉、木賀、宮城野、仙石原の諸村を經、乙女峠を越へて富士山麓の御殿場に出て、佐野を経て沼津に通ずる間道あり。是れ上古駿河より關東へ通ずる本道なりしも、一たび富士山噴火の爲に其の道を埋没して後、第二次の本道は、現今の温泉道と爲り、後に豊太閣の小田原を征するるとき、現時の國道開けて、爾來東海道の本道と爲り、方今乙女峠は、一條の細徑を通ずるのみ。



温泉道の沿道に散在する温^{*}り、其中に舊來湯本、塔の澤、最も賑ひしも、今は宮ノ下を十二湯の中心と爲し、殊に外國人の遊覽者、避暑客等、概ね此に集まるに至りぬ。宿料は家毎に同じからず。且つ日々客の需に應じて調進する故一定せざるも、普通は一日一圓許、夏時浴客輻輳するときは、二三割高かるべし。以下各湯の順路を案内せむ。

*泉は、古來湯本、塔の澤、宮ノ下、堂ヶ島、底倉、木賀、蘆の湯の七湯と稱せられしも、近年新たに小涌谷、湯の花澤、姥子、強羅、仙石原の五湯開かれ、總て十二湯と爲

湯本 東海道瀛車とは國府津驛にて分れ、更に電車鐵道に乗り移りて、小田原町を過ぎ、湯本驛に着す。小田原湯本間、一里二十三丁、一路平坦、早川の流れを左にして走る。湯本の人家は早川を挟みて兩岸に在るも、温泉宿は川を渡りて西岸に一部落を爲し、福住樓の宏館は、福住橋の傍、流れに臨みて聳え、別に旭橋と云ふあり。此所より湯阪山を前にし、右は温泉道、左は東海道なり。其の東海道の方に行けば、須雲川は湯阪山と石橋山の間を流れ來りて早川に注ぎ、湯阪山の麓に珠簾の瀧あり。湯本浴客の唯一の遊覽地、瀧は山腹より垂下して、高さ十間、幅五六間、懸崖を下る飛瀑、巖に觸れて、下るに従ひ次第に廣く、前より望めば水晶の大簾を垂るゝが如く、石を打ち、風に揉まれ、飛沫断へず四邊に散て霧と爲り、暫時にして衣袂皆な濕ふ。瀧は近來某華族の有に歸するも、一人毎に金拾錢づゝの入場料を收めて、何人も縦覽するを得せしむ。(口繪寫真参照すべし)湯本にはまた湯本細工とて、彫刻せる玩物、箱類、を販ぐ家多し。湯本の西南、東海道・國道の左方に早雲寺あり、小田原城主北條早雲の創建する禪刹なり、塔の澤 湯本より早川の溪流を右にし、山中に入ること五丁許にして達す。溪流はSの字狀を爲す所、二橋を架け、入り口なるは玉の緒橋、奥なるを千歲橋と名け、温